

平成24年度
神戸市埋蔵文化財年報

2015

神戸市教育委員会



fig. 1 下山手遺跡 第6次調査 I区全景（西から）



fig. 2 下山手遺跡 第6次調査
竪穴建物 SB101（東から）



fig. 3 下山手遺跡 第6次調査
竪穴建物 SB102出土遺物



fig.4 楠・荒田町遺跡 第53次調査 木棺墓 ST202（西から）



fig.5 楠・荒田町遺跡 第53次調査 木棺墓 ST202出土遺物



fig.6 楠・荒田町遺跡 第53次調査 木棺墓 ST202出土 青白磁合子蓋



fig. 7 尼崎学園古墳群 第1次調査 調査地全景（空中写真）



fig. 8 尼崎学園古墳群 第1次調査 箱式石棺（南西から）



fig.9 古川町遺跡 第9次調査 調査地全景（北西から）



fig.10 古川町遺跡 第9次調査
浜堤上面出土遺物

序

私たちの祖先は、神戸の地で古の時代よりさまざまに生活を営んできました。その足跡は、古墳や寺院、城跡など地上にその姿を残しているものもあります。祖先の残した痕跡の多くは、地面の下に埋もれている遺跡として普段私たちの目に触れることはできません。

しかしながら、これら遺跡の発掘調査によってその一端を知ることができます。

本書には、平成24年度に市内において実施いたしました31遺跡47件の発掘調査成果の概要などを掲載しました。

発掘調査によって得られた大切な記録は、私たちの住む地域を理解するうえでかけがえのない資料です。現代の私たちが記録を残し、未来へと伝えていかなければなりません。本書が埋蔵文化財への理解の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査および本書を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

2015年3月

神戸市教育委員会

例　　言

- 本書は、神戸市教育委員会が平成24年度に実施した埋蔵文化財発掘調査事業の概要である。事業に関する発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

工　樂　善　通　　大阪府立狭山池博物館館長
和　田　晴　吾　　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長　　永井秀憲

社会教育部長　　東野展也

文化財担当部長（文化財課長事務取扱）　　安達宏二

埋蔵文化財担当課長（埋蔵文化財係長事務取扱）　　千種 浩

文化財専門役　　丸山 潔

文化財課主査　　丹治康明　　安田 滋　　斎木 巖

事務担当学芸員　　佐伯二郎　　井尻 格　　中谷 正　　小林さやか

調査担当学芸員　　西岡巧次　　口野博史　　黒田恭正　　谷 正俊

　　　　　富山直人　　山口英正　　阿部敬生　　浅谷誠吾

　　　　　川上厚志　　関野 豊　　佐藤麻子

埋蔵文化財センター担当学芸員　　池田 毅　　内藤俊哉　　藤井太郎　　阿部 功

保存科学担当学芸員　　中村大介

震災復興派遣職員　　西岡巧次（後期）・西岡誠司

- 本書に記載した位置図は、神戸市発行5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2,500分の1都市計画図を使用した。

- 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当学芸員が執筆し、I. 平成24年度事業の概要1～3については千種 浩が執筆し、I-4については口野博史が執筆した。また、平成24年神戸市埋蔵文化財調査地点図と調査地点位置図（fig.20～25・fig.204）については丸山 潔が作成した。IIIは中村大介が執筆した。編集は口野・石島が行なった。

- fig.12は丸山が撮影を行ない、挿図写真の撮影、遺構図のトレースについては、各調査担当者が行なった。

- 卷頭カラーは、fig.7は（株）G E Oソリューションズが、表紙写真・裏表紙写真・fig.3・5・6・10は杉本和樹氏（西大寺フォト）が、fig.11は牛島茂が、それぞれ撮影を行なった。その他は各調査担当学芸員が撮影を行なった。

- 表紙写真は楠・荒田町遺跡第53次調査（本文79頁）出土の青磁碗と刀子で、裏表紙写真は同遺跡出土の青白磁合子である。

- 市内各遺跡の調査次数については、現在改正作業中である。

目 次

序

例言

I. 平成24年度 事業の概要 1

II. 平成24年度の発掘

1. 深江北町遺跡 第14次調査	19	27. 雪御所遺跡 第3次調査	97
2. 深江北町遺跡 第15次調査	23	28. 兵庫松本遺跡 第24次調査	99
3. 西岡本遺跡 第10次調査	27	29. 兵庫津遺跡 第57次調査	103
4. 本山北遺跡 第5次調査	29	30. 兵庫津遺跡 第58次調査	111
5. 本山北遺跡 第6次調査	31	31. 唐崎城跡・尼崎学園古墳群 第1次調査	115
6. 郡家遺跡 第88次調査	33	32. 小坂遺跡 第2次調査	119
7. 郡家遺跡 第89次調査	37	33. 山田・中遺跡 試掘調査	123
9. 住吉宮町 第50次調査	41	34-1. 大橋町東遺跡 第3次調査	127
10. 御影郷古酒蔵群 第5次調査	47	34-2. 大橋町東遺跡 第4次調査	129
11. 篠原遺跡 第31次調査	59	35. 松野遺跡 第44次調査	137
12. 日暮遺跡 第35次調査	63	37. 戎町遺跡 第69次調査	141
14. 日暮遺跡 第37次調査	67	38. 大手町遺跡 第9次調査	145
17. 雲井遺跡 第36次調査	69	39. 大田町遺跡 第17次調査	149
18. 花隈城 第5次調査	71	40. 古川町遺跡 第2次調査	157
19. 下山手遺跡 第6次調査	73	41. 押部遺跡 第4次調査	161
20. 楠・荒田町遺跡 第52次調査	77	42. 玉津田中遺跡 第38次調査	165
21. 楠・荒田町遺跡 第53次調査	79	43. 玉津田中遺跡 第39次調査	167
22. 楠・荒田町遺跡 第54次調査	83	44. 枝吉遺跡 第2次調査	169
24. 祇園遺跡 第16次調査	89	45. 今津遺跡 第24次調査	173
25. 祇園遺跡 第17次調査	91	46. 新方遺跡 第50次調査	175
26. 雪御所遺跡 第2次調査	95	47. 新方遺跡 第51次調査	179

III. 平成24年度の保存科学調査・作業の概要 185

挿図目次

fig. 1 下山手遺跡 第6次調査 I区全景 [巻頭カラー]

fig. 2 下山手遺跡 第6次調査 壁穴建物 SB101 [巻頭カラー]

fig. 3 下山手遺跡 第6次調査 壁穴建物 SB102出土遺物 [巻頭カラー]

fig. 4 楠・荒田町遺跡 第53次調査 木棺墓 ST202 [巻頭カラー]

fig. 5 楠・荒田町遺跡 第53次調査 木棺墓 ST202出土遺物 [巻頭カラー]

fig. 6 楠・荒田町遺跡 第53次調査 木棺墓 ST202出土青白磁合子蓋 [巻頭カラー]

fig. 7 尼崎学園古墳群 第1次調査 調査地全景（空中写真） [巻頭カラー]

fig. 8 尼崎学園古墳群 第1次調査 箱式石棺 [巻頭カラー]

fig. 9	古川町遺跡 第9次調査 調査地全景 [巻頭カラー]	
fig. 10	古川町遺跡 第9次調査 浜堤上面出土遺物 [巻頭カラー]	
fig. 11	五色塚古墳 増輪 [写真] 3	
fig. 12	体験発掘(兵庫津遺跡)(湊山小学校・平野小学校) [写真] ... 9	
fig. 13	企画展示「古代の神戸」 [写真] 10	
fig. 14	企画展示「昭和のくらし・むかしのくらし7」 [写真] ... 10	
fig. 15	特別講演会 [写真] 10	
fig. 16	出張授業 [写真] 12	
fig. 17	体験考古学講座「土器づくり」 [写真] 12	
fig. 18	おおとし山まつり [写真] 12	
fig. 19	体験考古学講座「堅穴住居をつくろう」 [写真] 12	
fig. 20	平成24年度 埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図 ... 15	
fig. 21	調査地点位置図(1) 1:50,000 16	
fig. 22	調査地点位置図(2) 1:50,000 16	
fig. 23	調査地点位置図(3) 1:50,000 17	
fig. 24	調査地点位置図(4) 1:50,000 17	
fig. 25	調査地点位置図(5) 1:50,000 18	
fig. 26	調査地位置図 1:2,500 19	
fig. 27	P 3区北壁断面実測図 20	
fig. 28	P 3区黒灰色中砂面繕筋平面図 20	
fig. 29	P 4区第1遺構面全景 [写真] 21	
fig. 30	P 6区杭列検出状況 [写真] 21	
fig. 31	P 7区北壁断面実測図 22	
fig. 32	P 7区杭列検出状況平面図 22	
fig. 33	P 8区畦畔検出状況 [写真] 22	
fig. 34	南壁断面模式図 23	
fig. 35	第2遺構面足跡検出状況 [写真] 23	
fig. 36	第1～4遺構面平面図 24	
fig. 37	第4遺構面全景 [写真] 25	
fig. 38	第5遺構面平面図 26	
fig. 39	調査地位置図 1:2,500 27	
fig. 40	調査範囲位置図 28	
fig. 41	調査区平面図及び土層断面図 28	
fig. 42	S K01・S K02検出状況 [写真] 28	
fig. 43	調査地全景 [写真] 28	
fig. 44	調査地位置図 1:2,500 29	
fig. 45	調査範囲位置図・調査区平面図及び北壁部分断面土層図 ... 30	
fig. 46	調査区全景及び遺物出土状況 [写真] 30	
fig. 47	調査区北・東壁土層断面図 31	
fig. 48	調査範囲位置図及び調査区平面図 32	
fig. 49	調査区全景 [写真] 32	
fig. 50	調査区北壁土層堆積状況 [写真] 32	
fig. 51	調査地位置図 1:2,500 33	
fig. 52	調査範囲位置図 34	
fig. 53	調査区西・北壁土層断面実測図 34	
fig. 54	第1遺構面平面図 35	
fig. 55	第2遺構面平面図 35	
fig. 56	第3遺構面平面図 35	
fig. 57	3区遺構面全景 [写真] 36	
fig. 58	4区第1遺構面全景 [写真] 36	
fig. 59	4区第3遺構面全景 [写真] 36	
fig. 60	4区第4遺構面全景 [写真] 36	
fig. 61	調査範囲位置図 37	
fig. 62	基本層序模式図 37	
fig. 63	調査区平面図 38	
fig. 64	1区全景 [写真] 39	
fig. 65	2区全景 [写真] 39	
fig. 66	S B04平・断面図 39	
fig. 67	S B04カマド検出状況 [写真] 39	
fig. 68	S B01平・断面図 40	
fig. 69	S B01検出状況 [写真] 40	
fig. 70	S B02平・断面図 40	
fig. 71	S B02刀子出土状況 [写真] 40	
fig. 72	S B03平・断面図 40	
fig. 73	S B03検出状況 [写真] 40	
fig. 74	調査地位置図 1:2,500 41	
fig. 75	調査範囲位置図 42	
fig. 76	調査区土層断面実測図 42	
fig. 77	第1遺構面平面図 43	
fig. 78	第2遺構面平面図 44	
fig. 79	第2遺構面全景 [写真] 45	
fig. 80	古墳検出状況 [写真] 46	
fig. 81	調査地位置図 1:2,500 47	
fig. 82	明治17(1884) 年刊行『豪商名所独案内の魁』より 48	
fig. 83	調査完了範囲図 48	
fig. 84	I～II区全景 [写真] 49	
fig. 85	平成24(2012) 年解体時現況図 50	
fig. 86	平成24(2012) 年解体時既存建物と合致する検出建物... 51	

fig. 87 I 区 S B03検出状況 [写真]	52	fig.126 調査区平面及び断面図	77
fig. 88 S B03平面・立面図	52	fig.127 調査地全体図	77
fig. 89 S B04平面・立面図	53	fig.128 調査地位置図 1:2,500	78
fig. 90 S X02平面・立面図	53	fig.129 南壁主要部土層断面実測図	79
fig. 91 S X02検出状況 [写真]	54	fig.130 第1遺構面平面図	79
fig. 92 明治17(1884)年～明治30年代頃	54	fig.131 第2遺構面平面図	80
fig. 93 S B06平面・立面図	56	fig.132 第3遺構面平面図	80
fig. 94 江戸時代末～明治時代前半頃	57	fig.133 I～III区明治時代以降遺構全体図	84
fig. 95 江戸時代(18世紀中頃以降)	57	fig.134 I区全景 [写真]	85
fig. 96 出土遺物拓影	58	fig.135 II区全景 [写真]	85
fig. 97 調査地位置図 1:2,500	59	fig.136 II区S D01埋土堆積状況 [写真]	85
fig. 98 調査範囲位置図	60	fig.137 II区S D01検出状況 [写真]	85
fig. 99 調査区土層断面実測図	60	fig.138 I～III区弥生時代～江戸時代遺構全体図	86
fig.100 第1遺構面平面図	61	fig.139 II区北西部検出状況 [写真]	86
fig.101 第2遺構面平面図	61	fig.140 II区東半検出状況 [写真]	86
fig.102 I区S B01平・断面図	62	fig.141 II区南辺検出状況 [写真]	87
fig.103 I区S B01検出状況 [写真]	62	fig.142 II区S E01 [写真]	87
fig.104 調査地位置図 1:2,500	63	fig.143 II区煙道 [写真]	87
fig.105 調査範囲位置図	64	fig.144 八角形煙突検出状況 [写真]	87
fig.106 東壁土層断面実測図	64	fig.145 調査地位置図 1:2,500	89
fig.107 調査区平面図	65	fig.146 調査区土層断面実測図(上段西壁・下段南壁)	90
fig.108 出土遺物実測図	66	fig.147 第1遺構面平面図	90
fig.109 調査範囲位置図	67	fig.148 第2遺構面平面図	90
fig.110 西壁・北壁土層断面実測図	67	fig.149 S X201遺物出土状況実測図	90
fig.111 第1遺構面平面図	68	fig.150 1区土層断面実測図(上段北壁東半・中段北壁西半・下段南壁東半)	91
fig.112 第2遺構面平面図	68	fig.151 2区土層断面実測図(上段北壁東半・中段北壁西半・下段東壁)	91
fig.113 出土遺物実測図	68	fig.152 1区第1遺構面平面図	92
fig.114 調査範囲位置図及び地区割図	69	fig.153 1区第2遺構面平面図	92
fig.115 調査地位置図 1:2,500	69	fig.154 1区SK01遺物出土状況 [写真]	93
fig.116 北壁土層断面実測図	70	fig.155 2区第2遺構面全景 [写真]	93
fig.117 第1遺構面平面図	70	fig.156 2区第1遺構面平面図	94
fig.118 第2遺構面平面図	70	fig.157 2区第2遺構面平面図	94
fig.119 調査地位置図 1:2,500	71	fig.158 2区第3遺構面平面図	94
fig.120 調査範囲位置図及び調査区平面図	72	fig.159 調査地位置図 1:2,500	95
fig.121 S B02平・断面図及び北壁断面実測図	72	fig.160 調査区東壁・南壁土層断面実測図	96
fig.122 調査地位置図 1:2,500	73	fig.161 石垣検出状況 [写真]	96
fig.123 III-1・2区南壁土層断面実測図	74	fig.162 調査区平面図	96
fig.124 第1遺構面平面図	74	fig.163 調査範囲位置図	97
fig.125 第2遺構面平面図	75	fig.164 西壁土層断面実測図	97

fig.165 調査区平面図	98	fig.204 調査地位置図(1)	1:50,000	123
fig.166 S X01上面遺物出土状況〔写真〕	98	fig.205 調査地位置図(2)	1:2,500	124
fig.167 調査地位置図 1:2,500	99	fig.206 試掘坑配置図		125
fig.168 調査範囲位置図	100	fig.207 試掘坑断面図		126
fig.169 調査区南北方向土層断面図	101	fig.208 調査地位置図 1:2,500		127
fig.170 No.1～4 挖削作業状況〔写真〕	101	fig.209 南壁土層断面実測図		128
fig.171 No.5 遺構面検出状況〔写真〕	101	fig.210 第1遺構面平面図		128
fig.172 調査区平面図	102	fig.211 第2遺構面平面図		128
fig.173 調査地位置図 1:2,500	103	fig.212 東壁北半土層断面実測図		129
fig.174 E-1区石垣・堀検出状況〔写真〕	104	fig.213 調査区平面図		130
fig.175 E-1区石垣・堀検出状況〔写真〕	104	fig.214 調査地全景〔写真〕		130
fig.176 F-1区全景〔写真〕	106	fig.215 4-1次S X01・SK01検出状況〔写真〕		130
fig.177 F-1区石垣・堀検出状況〔写真〕	106	fig.216 調査地全景〔写真〕		131
fig.178 F-1区東辺城外側石垣検出状況〔写真〕	107	fig.217 4-1次S B01検出状況〔写真〕		131
fig.179 I区全景〔写真〕	107	fig.218 南壁・東壁土層断面実測図		131
fig.180 I区域内側石垣検出状況〔写真〕	109	fig.219 調査区平面図		132
fig.181 K-3区域内側石垣検出状況〔写真〕	109	fig.220 4-2次S E201検出状況〔写真〕		132
fig.182 調査範囲位置図	111	fig.221 4-2次P 201遺物出土状況〔写真〕		132
fig.183 調査地位置図 1:2,500	111	fig.222 4-2次N R 201検出状況〔写真〕		132
fig.184 1区東・西壁土層断面実測図	112	fig.223 SK101平・断面図		132
fig.185 1区第1遺構面平面図	112	fig.224 SE201平・断面図		133
fig.186 1区第1遺構面全景〔写真〕	113	fig.225 P 201平・断面図		133
fig.187 1区第2遺構面全景〔写真〕	113	fig.226 北壁土層断面実測図		134
fig.188 1区第2遺構面平面図	113	fig.227 4-2次第1遺構面全景〔写真〕		134
fig.189 1区第3遺構面平面図	113	fig.228 第1遺構面平面図		135
fig.190 1区第4遺構面平面図	114	fig.229 第2遺構面平面図		135
fig.191 1区第3遺構面全景〔写真〕	114	fig.230 SK101遺物出土状況平・断面図		135
fig.192 1区第4遺構面全景〔写真〕	114	fig.231 4-2次第2遺構面全景〔写真〕		136
fig.193 調査地位置図 1:2,500	115	fig.232 調査地位置図 1:2,500		137
fig.194 調査地区割図	116	fig.233 調査範囲位置図		138
fig.195 調査区土層断面実測図	116	fig.234 調査区平・断面図		139
fig.196 調査区平面図	118	fig.235 21区遺構面検出状況〔写真〕		140
fig.197 調査範囲位置図	119	fig.236 17区遺構面検出状況〔写真〕		140
fig.198 調査区土層断面実測図	119	fig.237 調査地位置図 1:2,500		141
fig.199 調査地位置図 1:2,500	120	fig.238 調査範囲位置図		142
fig.200 遺構面地形図	121	fig.239 調査区北壁(上段)・西壁(下段)断面図		142
fig.201 SK01平・断面図	122	fig.240 第1遺構面平面図		143
fig.202 1区調査状況〔写真〕	122	fig.241 1区SB01平・断面図		143
fig.203 SK01検出状況〔写真〕	122	fig.242 1区SB01中央土坑・SB01内SK01平・断面図	…	143

fig.243	1区SB01検出状況〔写真〕	143
fig.244	第2遺構面平面図	144
fig.245	S B01内SK01遺物出土状況〔写真〕	144
fig.246	2区第2遺構面全景〔写真〕	144
fig.247	調査地位置図 1:2,500	145
fig.248	調査範囲位置図	146
fig.249	1区北・東壁・2・3区西壁土層断面実測図	146
fig.250	調査区平面図	147
fig.251	SB01平・断面図	147
fig.252	1区全景〔写真〕	147
fig.253	2区全景〔写真〕	148
fig.254	3区全景〔写真〕	148
fig.255	調査地位置図 1:2,500	149
fig.256	調査範囲位置図及び地区割図	150
fig.257	調査区土層断面実測図	150
fig.258	第1・2遺構面平面図	151
fig.259	第3遺構面平面図	151
fig.260	第4遺構面平面図	151
fig.261	第5遺構面平面図	152
fig.262	第6遺構面平面図	152
fig.263	第6遺構面以下平面図及び断面トレンチ位置図 SD601・SD603下層想定図	152
fig.264	2区第3遺構面全景〔写真〕	153
fig.265	4区第1・2遺構面全景〔写真〕	153
fig.266	4区SD303遺物出土状況〔写真〕	153
fig.267	4区第3遺構面全景〔写真〕	154
fig.268	4区第6遺構面全景〔写真〕	154
fig.269	出土遺物実測図(1)	155
fig.270	出土遺物実測図(2)	156
fig.271	調査地位置図 1:2,500	157
fig.272	東壁土層断面実測図	158
fig.273	平安時代後期～中世の遺構平面図	158
fig.274	奈良時代～平安時代前期の遺構平面図	159
fig.275	古墳時代後期～飛鳥時代前期の遺構平面図	159
fig.276	古墳時代前期の遺構平面図	160
fig.277	調査地位置図 1:2,500	161
fig.278	調査範囲位置図	162
fig.279	調査区南北方向及び東西方向土層断面実測図	162
fig.280	調査区平面図	163
fig.281	P12遺物出土状況	163
fig.282	調査区全景〔写真〕	164
fig.283	調査区全景〔写真〕	164
fig.284	出土遺物実測図	164
fig.285	調査地位置図 1:2,500	165
fig.286	1区西壁土層断面実測図	166
fig.287	調査区平面図	166
fig.288	1区全景	166
fig.289	調査地位置図 1:2,500	167
fig.290	調査範囲位置図	168
fig.291	調査区北壁(上段)・西壁(下段)土層断面実測図	168
fig.292	調査区平面図	168
fig.293	調査地位置図 1:2,500	169
fig.294	調査区平面図	170
fig.295	SK01遺物出土状況実測図	171
fig.296	SD01出土遺物実測図	171
fig.297	SK01・SK02出土遺物実測図	172
fig.298	調査地位置図 1:2,500	173
fig.299	調査範囲位置図	174
fig.300	土層断面実測図	174
fig.301	調査地位置図 1:2,500	175
fig.302	調査範囲位置図	176
fig.303	調査区東壁土層断面実測図	176
fig.304	第1遺構面平面図	177
fig.305	第2遺構面平面図	177
fig.306	北区第1遺構面全景〔写真〕	177
fig.307	北区第2遺構面全景〔写真〕	177
fig.308	北区第3遺構面SX301〔写真〕	178
fig.309	南区第2・3遺構面全景〔写真〕	178
fig.310	調査範囲位置図	179
fig.311	東西壁及び南北壁土層断面実測図	179
fig.312	第1遺構面平面図	180
fig.313	第2遺構面平面図	181
fig.314	南半第1遺構面全景〔写真〕	181
fig.315	P110石検出状況〔写真〕	181
fig.316	第3遺構面平面図	182
fig.317	P111甕出土状況〔写真〕	182
fig.318	北半第1遺構面全景〔写真〕	182
fig.319	出土遺物実測図(1)	183
fig.320	出土遺物実測図(2)	184

fig.321 石垣出土状況〔写真〕	185
fig.322 ウレタンフォーム梱包作業〔写真〕	185
fig.323 トンネル掘削作業〔写真〕	185
fig.324 石材切削作業〔写真〕	185
fig.325 搬送作業〔写真〕	186
fig.326 石垣裏面補強作業〔写真〕	186
fig.327 支持台設置作業〔写真〕	186
fig.328 細部クリーニング作業〔写真〕	186
fig.329 完成後展示状況〔写真〕	187
fig.330 出土黒色塗膜片〔写真〕	188
fig.331 S-1 外面マクロ写真（3倍）〔写真〕	188
fig.332 S-2 外面マクロ写真（3倍）〔写真〕	188
fig.333 S-2 破断部分実体鏡写真（24倍）〔写真〕	189
fig.334 S-2 内面実体鏡写真（5倍）〔写真〕	189
fig.335 S-1 繊維混入状況実体鏡写真（6倍）〔写真〕	189
fig.336 S-2 断面顕微鏡写真（透過光・50倍）〔写真〕	189
fig.337 同右上 模式図	189
fig.338 S-3 断面顕微鏡写真（透過光・100倍）〔写真〕	189
fig.339 処理前状況写真撮影作業〔写真〕	190
fig.340 処理前重量測定作業〔写真〕	190
fig.341 真空凍結乾燥作業〔写真〕	190
fig.342 真空凍結乾燥工程中の重量変化	191

表 目 次

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧	1
表2 発掘調査面積	1
表3 発掘調査面積別件数	1
表4 写真資料等貸出一覧(1)	4
表5 写真資料等貸出一覧(2)	5
表6 写真資料等貸出一覧(3)	6
表7 資料掲載一覧	6
表8 特別利用一覧(1)	7
表9 特別利用一覧(2)	8
表10 出土資料等貸出	8
表11 平成24年度の企画展示	11
表12 歴史講演会	11
表13 平成24年度埋蔵文化財出土遺物整理一覧	12
表14 平成24年度埋蔵文化財発掘調査一覧表	13
表15 S B 03出土煉瓦一覧表	51
表16 被災文書類乾燥処理結果	191
表17 平成24年度出土保存科学関連遺物一覧	192
表18 平成24年度自然科学分析一覧	192

I. 平成24年度 事業の概要

1. 事業体制

神戸市教育委員会文化財課では、平成23年度から埋蔵文化財係と文化財保護活用係の2係で文化財の保護と活用を行なっている。埋蔵文化財係に関する業務のうち、文化財保護法に係わる届出などの窓口業務、試掘調査や本調査の受託契約等の事務や補助金事務は市役所文化財課で行ない、発掘調査終了後の出土品の復元や保存修復およびその後の管理と活用は、神戸市埋蔵文化財センターで行なっている。出土品や発掘調査で得られた写真や図面などは、記録保存のために空調管理した収蔵施設で保管している。さらにこれらを活用した企画展示、様々な体験学習、出張講座などを埋蔵文化財センターを中心として展開している。また、外部からの依頼による収蔵資料に対する資料調査や貸出にも対応している。

2. 開発指導

周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等については、文化財保護法第93条・第94条に基づく届出・通知が必要であり、各事業者に対して必要とされる保護措置を示している。また、建築確認申請に伴う事前届出書の閲覧を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地内における建築行為については埋蔵文化財発掘届出書の提出を促している。

平成24年度の文化財保護法に基づく届出・通知件数は、711件（前年度708件）であり、このうち、民間事業者・個人による第93条の届出が643件（前年度643件）であった。また、開発行為事前審査137件（前年度148件）、試掘調査依頼は208件（前年度202件）であった。以上のように届出・試掘調査の件数は前年度に比べてほぼ横ばいの状況である。このように、周知の遺跡の範囲内では、開発事業は減ずることなく行なわれている。窓口での包蔵地の確認、問い合わせは年間で約6,000件であった。

これらの届出や問い合わせに対して、試掘調査によって得られた情報や既存情報をGISデータに集積し、それを基に、可能な限り建物の基礎が遺跡に影響を与えないように、設計変更を求めている。そのことによって、発掘調査を回避し、新たな建物等の下に遺跡の一部を保護している件数も多い。

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧

No.	内 容	件数
1	発見・発掘届	711件
	i 民間の事業に伴う発掘届（保護法第93条）	
	ii 公共の事業に伴う発掘通知（保護法第94条）	
2	発掘調査の報告（保護法第92条）	0 件
3	開発行為事前審査等各種申請	137件
4	試掘調査（依頼件数）	208件
	i 公共関連	
	ii 民間関連	
5	発掘調査（大規模確認調査も含む）	47件
	i 公共事業に伴う発掘調査	
	ii 民間の事業に伴う発掘調査	
	iii 圃場整備事業に伴う発掘調査	
6	工事立会	77件
7	整理作業（復興調査整理作業を含む）	8 件

表2 発掘調査面積（単位:m²）

	公共関連事業	民間関連事業	合 計
調査面積	11,269	10,974	22,243
延調査面積	19,353	21,812	41,165

表3 発掘調査面積別件数

調査面積	件数	%	調査面積	件数	%
~100 m ²	26件	55	1,001~2,000 m ²	3件	6
101~300 m ²	7件	15	2,001~5,000 m ²	3件	6
301~500 m ²	4件	9	5,000 m ² 以上	0件	0
501~1,000 m ²	4件	9	合計	47件	100

3. 埋蔵文化財調査事業

平成24年度に実施した埋蔵文化財調査事業は（47）件で、それに要した経費（出土品整理・保存処理を含む）の総額は、（272,504）千円であった。

国庫補助事業 発掘調査事業の内、その原因が個人住宅や個人事業者、零細事業者による場合は、国庫補助事業として、規程と基準により公費を充当している。平成24年度の緊急発掘調査事業費63,000千円であった。この事業の一つとして、脆弱遺物の恒久的な保存を目的として端谷城跡第5次調査出土の鉄製胴丸などの保存処置を継続した。また、復興調査整理として、平成8・9年度に調査を実施した震災復興事業に伴う上沢遺跡の出土遺物の整理を継続して行なった。

市内発掘調査 昨年度と同様に、発掘調査件数は、基礎構造の設計変更により発掘調査が回避された結果、昨年度よりも若干少ない。一方で回避を確認するための工事立会が増加している。

発掘調査面積は22,083m²（延べ41,565m²）で、このうち公共関連事業によるものが11,349m²（延べ19,763m²）と約半数を占めている。昨年度は公共関連が1割程度であり、近年2～3割程度に留まっていたが24年度は最大の調査が市有地の土壤汚染除去に伴う兵庫津遺跡の調査であったため、件数は13件と民間事業よりも少ないが、高率になっている。

面積別でみると、300m²以下の件数比率が68%と昨年の39%から大きく増加している。100m²以下が、15%から51%に増えたことに起因しており、小規模化が一層進んでいる。この要因の一つとしては、地震に対応できる建物基礎構造を確保するために、個人住宅においても基礎が深くなり、遺構などに抵触することが多くなったことによると考えられる。

現地説明会等 発掘調査の現場において、実際に遺跡を体感する機会として、現地説明会や近隣を対象とした現地公開を行なった。

平成24年8月4日、兵庫津遺跡第57次調査の現地説明会を開催し、猛暑にもかかわらず450名の参加があった。兵庫城はこれまで地上に痕跡がなく、その存在は知られていたものの、認知度は高いとは言えなかった。しかし初めて兵庫城の堀や石垣が確認されたことへの関心は高かった。

平成23年8月25日、古川町遺跡第2次調査で現地説明会を開催し、240名の参加があった。古墳時代の初めから海岸線近くの浜堤の利用が始まり、奈良、平安時代には居住域に変化していく変遷過程の説明を行なった。

平成23年12月22日、下山手遺跡第6次調査の現地説明会を開催し、170名の参加者に対して、古墳時代の建物群の説明を行なった。早くから市街地化した地域に残されていた遺構群に対して驚きの声があった。

資料の活用 発掘調査によって保存された資料には、主に出土品と写真や図面の記録類があり、埋蔵文化財センターで保管している。これらは他の機関等からの利用要望があれば、貸出等を行なっている。写真については、今年度は54件の依頼があり360点を貸し出した（昨年度は58件、182点）。貸出資料としては、昨年度はNHK大河ドラマ「平清盛」の影響で、祇園遺跡と楠・荒田町遺跡及び兵庫津遺跡の平氏関連遺跡が19件と最も多く、続いて五色塚古墳の14件と合わせると半数を超えていた。今年度はこれまで通り五色塚古墳の写真利用が多く、23件と約半数にのぼった。これらは主に学校教育関連の図書類、博物館等の展示、歴史関係図書類、情報誌類などへの掲載を利用目的としている。傾向としては情

報誌関係が増える傾向にある。利用手段としては、印刷物への掲載だけでなく、インターネット上の公開やデジタル配布を手法とする依頼がさらに増えている。(写真資料等貸出一覧参照)

出土遺物の貸出は8件、456点が、兵庫県下および山陰、四国の博物館の特別展などで活用された。西求女塚古墳、狩口きつね塚古墳、舞子古墳群、などの金属製品が多い傾向である。(出土資料等貸出一覧参照)

その他に、特別利用として、出土品についての資料調査・閲覧の依頼が26件、1358点に対してあり、市民、大学生、研究者等が五色塚古墳、兵庫津遺跡、西求女塚古墳などの資料を調査している。対象資料は土器、石製品、木製品、金属製品、人骨、動物遺存体など多種多様であった。(特別利用一覧参照)

重要文化財 平成24年4月20に開催された文化庁の文化審議会において、五色塚古墳出土の埴輪が国の重要文化財に指定された。指定を受けたのは全体の形が復元できた鰐付円筒埴輪42点、鰐付朝顔形埴輪3点、円筒埴輪3点と附 形象埴輪残欠17点、土器・土製品15点。五色塚古墳は昭和40年から10年の歳月をかけて発掘調査と復元整備と並行して行ない、全国で初めて築造当時の姿に復元した大王墓クラスの巨大古墳である。全長194mの兵庫県最大の前方後円墳であり、築造当時は日本最大級の大きさを誇る。

平成18年に刊行した発掘調査・復元整備報告書により、これらの円筒埴輪等が統一された規格性のもとに作られていることを明らかにし、その特徴から製作工人を復元することもできた。

報告書刊行を契機として、円筒埴輪等と合わせて形象埴輪も古墳祭祀の一端を示すものであり、古墳時代前期の古墳祭祀を復元する上で極めて重要なと評価されて今回の答申に至った。

これまでに形象埴輪が国の重要文化財に指定されることはあったが、円筒埴輪群が指定されるのは全国でも初めてである。このことは、改めて国史跡五色塚古墳の歴史的価値が評価されたことを意味している。

刊行物一覧 平成22年度に刊行した発掘調査報告書等は、下記のとおりである。

『祇園遺跡第14次発掘調査報告書』 頒価500円、『祇園遺跡第15次発掘調査報告書』 頒価500円、『出合遺跡第45・46次発掘調査報告書』 頒価800円、『若松町東遺跡第1~6次発掘調査報告書』 頒価500円、『平成22年度神戸市埋蔵文化財年報』 頒価1,000円『神戸市埋蔵文化財分布図(平成25年度版)』 頒価450円、『神戸の遺跡シリーズIV 神戸の古墳1』 頒価200円。

遺跡資料リポジトリ 平成22年度から引き続き兵庫県下の窓口である神戸大学を通じて、報告書等の電子化を行なった。平成24年度は平成21・22・23年度に刊行した24冊の本文2,328ページと図版535ページのデジタル化と書誌データの作成を神戸大学附属図書館において実施していただいた。



fig.11 五色塚古墳 墓輪

表4 写真資料等貸出一覧(1)

No.	申 請 者	利 用 目 的・内 容	資 料 名	資 料 点 数
1	株神戸新聞総合出版センター	『神戸～尼崎 海辺の歴史』に掲載するため	北青木銅鐸 銅鐸出土状況 画像データ 1点	1
2	個人	神戸外国人居留地研究会4月総会での報告（4月12日） 「旧神戸外国人居留地遺跡でのはじめての発掘調査」 考古学研究会 第53回総会・研究集会での報告（4月21日） 「旧神戸外国人居留地遺跡－近世の津波痕跡と近代遺跡の調査」	『旧神戸外国人居留地遺跡発掘調査報告書』掲載の写真データ 44点 図データ37点	81
3	(株)ベストセラーズ	『歴史人』 平成24年6月号 「源平合戦前史－平清盛の生涯」に掲載するため	祇園遺跡出土 園池遺構 画像データ 1点	1
4	個人	『兵庫の渡米人関連遺跡を歩く 猪名川流域～明石川流域』に掲載するため	神楽遺跡 紡錘車 他 報告書図版・写真 54点	54
5	(株)フクト	社会科教材 『夏の生活 3年 社会』(2012年度)に掲載するため	五色塚古墳 画像データ 1点	1
6	大阪商工会議所	第4回「なにわなんでも大阪検定」の試験問題に掲載	五色塚古墳 画像データ 2点	2
7	山陽新聞社	山陽新聞朝刊『地震・津波痕跡示す研究成果』に掲載するため	旧神戸外国人居留地遺跡 画像データ 2点 ①土層断面写真 ②覆瓦状構造写真	2
8	サンケイリビング新聞社 兵庫編集部	サンケイリビング新聞社 神戸西+明石スペシャル「西神ニュータウンのトリビア」に掲載するため	アケボノゾウ写真 1点 (申請者撮影)	1
9	日本放送協会 神戸放送局	NHK 神戸放送局制作の紀行番組『新兵庫史を歩く(神戸市中央区・兵庫区)』にて使用するため	祇園遺跡 画像データ 4点 ①発掘作業風景 ②玳坂天目小碗 ③京都系軒平瓦と軒丸瓦 ④土師器小皿	4
10	BAN-BAN ネットワークス(株)	BAN-BAN ネットワークス 「にじいろたまご」で放送	五色塚古墳 画像データ 2点 『報告書』図版2-1・図版3-1	2
11	(株)イディー	『夏ぶらり 垂水～舞子編(仮称)』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ 1点 報告書図版1-2 大歳山遺跡 画像データ 1点	2
12	島根大学法文学部考古学研究室	『前期古墳から見た播磨』(播磨考古学研究集会実行委員会刊)に掲載する論文内で使用するため	五色塚古墳と関連古墳位置図(『報告書』297頁 図8-1) 1点 五色塚古墳復元平面図(『明石の古墳』55頁 図3) 1点	2
13	出雲市	出雲弥生の森博物館 特別展 『よみがえるな！－国富中村古墳のお葬式－』で図録及びパネルに掲載するため	狩口台きつね塚古墳 花形鏡板 1点	1
14	神戸市立中央図書館	平成24年6月30日 第2回「広島県立歴史博物館 平成24年度博物館大学」での講演	祇園遺跡 1・2・3・5・13・14次 画像データ 57点 雪御所遺跡 1次 画像データ 4点	61
15	兵庫県立考古博物館	特別展『卑弥呼がいた時代』開催に関連する広報チラシ、ポスター、パネル、図録等印刷物に掲載するため	西求女塚古墳出土画文帯神獸鏡写真 2点 6号鏡・11号鏡	2
16	関西シーン	英文フリーマガジン『Kansai Scene』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ 1点	1
17	サンケイリビング新聞社 兵庫編集部	『サンケイリビング新聞』7月21日号「街角でくくてく」に掲載するため	五色塚古墳 画像データ 1点 大歳山遺跡 画像データ 1点	2
18	(公財)兵庫県まちづくり技術センター	『ひょうごの遺跡』の「地震考古学特集」に掲載するため	西求女塚古墳 画像データ 1点 『報告書』図版4-1	1
19	東京書籍(株)	東京書籍 高等学校用教科書 『新選 日本史B』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ 1点	1
20	(株)イディー	『神社と福谷・友清の今昔物語 横谷神社』に掲載するため	城ヶ谷遺跡出土土器 画像データ 1点	1
21	香川県進路指導研究部	平成24年度3年4回 学習の診断 社会問題の資料として	五色塚古墳 画像データ 1点 『報告書』 図版2-1	1
22	大阪城天守閣	大阪城天守閣 特別展 『秀吉の城』の展示図録に掲載するため	羽柴秀吉・別所長治対陣図 画像データ 1点 羽柴秀吉制札 天正8年正月17日付 画像データ 1点 三木城跡出土巴文軒丸瓦 画像データ 1点 三木城跡出土唐草文軒平瓦 画像データ 1点 『神戸で秀吉と出会う』 11頁・17頁・22頁 淡河本町自治会所蔵 羽柴秀吉制札 天正7年6月28日付 1面 画像データ 1点 『神戸で秀吉と出会う』 5頁	6
23	安西工業(株)	『考古学ジャーナル』 2012年11月号に掲載するため	五色塚古墳 整備前 画像データ 1点 整理後 画像データ 1点	2
24	宗教法人 蝶子神社	蝶子神社御社殿御造営事業記念誌に掲載するため	兵庫津遺跡 第29次 出土標柱 画像データ 1点 兵庫津遺跡 第52次 SP104出土遺物 画像データ 1点 『報告書』10頁 兵庫津遺跡 第52次 貝殻遺存体 画像データ 1点 『報告書』30頁 元禄兵庫津復元図 画像データ 1点 『報告書』5頁	4
25	兵庫区まちづくり課	兵庫区歴史講演会で使用	楠・荒田町遺跡42・43・46次調査 写真データ 3点 『報告書』 カラー図版7・8・11下 『祇園遺跡14次調査現地説明会資料』よりデータ5点 1頁 祇園遺跡位置図 2頁 調査区平面図 3頁 空から見た調査区 井戸を廃棄する際の祭祀に使用した土器 発掘調査区の全景(北から)	8

表5 写真資料貸出一覧(2)

No.	申 請 者	利 用 目 的・内 容	資 料 名	資 料 点 数
26	山陽電気鉄道株 鉄道営業部	「山陽電車 ハイキングカレンダー・ポスター」に掲載	五色塚古墳 画像データ 2点 『報告書』 図版 1-1・2-1	2
27	株TSK	トーホー平野祇園ビルのデジタルサイネージで使用 トーホー開店に伴う記者会見資料に掲載	祇園遺跡 第14次調査 全景写真 データ 1点 井戸遺物出土状況写真 データ 1点 出土遺物 集合写真データ 1点	3
28	神戸市危機管理室	第4回 減災講話シリーズ 『津波対策と非難の心得 “巨大津波に備えて”』において使用	旧神戸外国人居留地遺跡 画像データ 1点	1
29	株文化工房	神奈川県立金沢文庫にて『日宋貿易と金沢文庫』のビデオ上映及び教育施設へのDVDの配布	兵庫津遺跡 空中写真 画像データ 1点	1
30	サンケイリビング新聞社 兵庫本部	会員向け情報誌 「心と体に元気をチャージ～地元パワースポット巡り」に掲載	五色塚古墳 画像データ 3点 『報告書』 図版 1-1・2-1・4-1	3
31	神戸市上津橋土地改良区	上津橋土地改良事業完成記念誌に掲載	出合遺跡 画像データ 11点『出合遺跡 第34・35・37・39・40・43・44次報告書』卷頭カラー図版1上・1下・2・3・5、5頁写真2・3、139頁写真27、図版2・3・25	11
32	個人	『外国人居留地と神戸』に掲載	旧神戸外国人居留地遺跡 画像データ 1点 『報告書』 22頁 写真17	1
33	(株)TBS ビジョン制作本部制作1部	BS-TBS 『美しい日本に出会う旅』で放送	湯山遺跡 画像データ 3点 『ゆの山御てん』 fig.19・57・62	3
34	神戸市立博物館	神戸市立博物館常設展示総合案内に掲載	遺構・遠景等写真/遺物写真/図版・加工画像 データ 35点	35
35	株ピー・アール・オー	銅の広報誌「銅誌」に掲載	西求女塚古墳 画像データ 6点 『報告書』 図版20上(5号鏡)・図版24上(9号鏡) 図版26上(12号鏡)・図版28上(6号鏡) 図版30上(11号鏡)・図版32上(7号鏡)	6
36	NHK プラネット近畿総支企画事業センター	シンポジウム「神戸大学のミリョク」内で使用の動画の映像資料とするため。	五色塚古墳撮影映像資料 1点(申請者撮影)	1
37	神戸市立博物館	神戸市立博物館刊行の「博物館だより102号」に掲載するため。	兵庫城内側石垣 検出状況 画像 1点 『現地説明会資料』 2頁 「I区 城内側石垣」	1
38	西神ニュータウン研究会	『神戸の住宅地物語』に掲載するため。	天王山古墳群 空中写真 画像データ 1点 「摂津国名所港屏風」模写 画像データ 1点 (平成22年度 埋蔵文化財センター夏企画展リーフレット「中世の港湾都市神戸」の表紙)	2
39	株学研教育出版	学研教育出版発行 ①中学校社会科 歴史映像教材(ビデオ・DVD) 『再現アニメ・実写で見る 日本の歴史シリーズ』 第1巻 「日本の成り立ち」(全6巻) ②小学校社会科6学年向け歴史教材ビデオ 『わくわく歴史たんけんシリーズ』(全10巻) 第1巻 「米づくりの始まりと国の統一」	五色塚古墳 画像データ 3点	3
40	株小学館クリエイティブ	『一冊でわかる イラストでわかる 図解古代史』に掲載するため。	五色塚古墳空撮写真 画像データ 1点	1
41	兵庫県立考古博物館	風土記1,300年記念特別展『播磨風土記 一神・人・山・海』の図録・パネルに掲載するため。	五色塚古墳空中写真 1点 『報告書』 図版 2-1	1
42	姫路市教育委員会 生涯学習部 市史編集室	『姫路市史第1巻下 本編考古』へ掲載するため。	『新方遺跡』 図66(63頁)・図70(68頁)・図105(99頁)・図106(100頁)・図108(101頁) 『大開遺跡発掘調査報告書』 図31(50頁) 『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』 図版 7・14	8
43	株アッシュ	『万葉集を旅する』に掲載。	処女塚古墳 画像データ 1点	1
44	個人	灘区80周年史編集委員会『灘の歴史』小学生版に掲載するため。	滝の奥遺跡 有茎尖頭器(槍先) 画像データ 1点 都賀遺跡 繩文早期土器 画像データ 1点 篠原遺跡 遷光器土偶 画像データ 1点 西求女塚古墳 銅鏡集合 画像データ 1点 原野・沢遺跡 繩文後期土器 画像データ 1点 楠・荒田町 弥生土器集合 画像データ 1点 五色塚古墳 空中写真 画像データ 1点 西求女塚古墳 空中写真 画像データ 1点 西求女塚古墳墳丘復元図 画像データ 1点	9
45	朝日学生新聞社	朝日小学生新聞社会科学習コーナーでの銅鐸解説に使用のため。	北青木銅鐸写真 1点	1
46	株青幻舎	『空間快楽室内 気持ちのいい聖地 関西編』に掲載。	五色塚古墳 画像データ 3点	3
47	株創元社	大阪商工会議所主催「第4回 なにわなんでも大阪検定」の過去問題集へ掲載するため。	五色塚古墳 画像データ 1点	1
48	神戸市立博物館	『神戸市立博物館常設展示総合案内』に掲載。	深江北町遺跡出土遺物 画像データ 2点 埋蔵文化財センター図録『古代のメインロード』 34頁 複弁十九葉蓮華文軒丸瓦・円面鏡・土器類 「駅」銘墨書き土器	2

表6 写真資料貸出一覧(3)

No.	申 請 者	利用目的・内容	資 料 名	資料 点数
49	株吉川弘文館	『事典 墓の考古学』に掲載するため。	五色塚古墳空撮写真 画像データ 1点	1
50	株旺文社	『中学入試でる順 歴史年表』に掲載。	五色塚古墳 画像データ 1点	1
51	神戸市都市計画総局 総務部 経営管理課	神戸三国志ガーデン ジオラマ館特別企画展 『三国時代の日本 卑弥呼と弥生時代展』でのチラシ・展示パネル・ガーデンオープン2周年イベント 全体告知ポスターに掲載するため。	画像データ 11点 西求女塚古墳 出土鏡群 『報告書』巻頭図版7 西求女塚古墳 遠景 『報告書』図版2-2 西求女塚古墳 5号鏡 『報告書』図版20 西求女塚古墳 6号鏡 『報告書』図版28 長田神社境内遺跡 SA区全景 『報告書』図版4-1 長田神社境内遺跡 SB06 『報告書』図版5-1 長田神社境内遺跡 仿製鏡『地下に眠る神戸の歴史展XⅠ』11頁 大手町遺跡 絵画土器 『神戸考古学 BEST50』13頁 北青木遺跡 銅鐸出土状況 『北青木銅鐸』巻頭写真10 桜ヶ丘銅鐸 復元品写真 本山銅鐸 復元品写真	11
52	(株)フクト	『夏の生活 3年社会(2013年度)』に掲載。	五色塚古墳 空中写真 1点	1
53	神戸市立博物館	『神戸市立博物館常設展示総合案内』に掲載。	湯山遺跡 画像データ 1点 『報告書』写真62 SX34	1
54	百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議	百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議 ホームページに掲載するため。	五色塚古墳 画像データ 1点 『報告書』図版3-1	1
合計				360

表7 資料掲載一覧

No.	申 請 者	利用目的・内容	資 料 名	資料 点数
1	個人	『考古学研究』への掲載のため	篠原遺跡出土繩文土器写真 3点	3
2	國學院大學	『東日本の弥生時代青銅器祭祀の研究』(平成24年5月 雄山閣 刊行予定)への掲載のため	森北町遺跡出土 銅鏡片 1点	1
3	個人	『みずほ43』(平成24年 大和弥生文化の会 刊行予定)への掲載のため	大開遺跡 SK444出土土器 1点	1
4	NHK エンタープライズ	NHK大河ドラマ『平清盛』内「清盛紀行」で放送	祇園遺跡 出土遺物	3
5	兵庫県立考古博物館	特別展「卑弥呼がいた時代」シンポジウム「卑弥呼がいた時代」の資料集に掲載	西求女塚古墳出土6号鏡(画文帶神獸鏡)実測図 『報告書』145頁 図99	1
6	NHK エンタープライズ	NHK大河ドラマ『平清盛』内「清盛紀行」で放送 第46回(予定)	玳波天目小碗・出土土師器小皿・瓦	3
7	(株)ジャパン通信情報センター	「文化財発掘出土情報」2012年10月~11月号(予定) 「各地の動向」に掲載	祇園遺跡 現地説明会資料及び記者提供資料	2
8	神戸市立中央図書館	『KOBE の本棚 - 神戸ふるさと文庫だより -』 第72号に掲載	花隈城跡第3次調査 出土瓦 『平成18年度神戸市埋蔵文化財調査年報』 85頁	1
9	個人	播磨考古学研究集会実行委員会刊行 『播磨考古学研究集会 第13回大会記録集』 「播磨における前期古墳の展開過程」(平成25年1月刊行予定)への掲載のため	天王山4号墳 出土鉄器 8点 天王山5号墳中央棺 出土鉄器 3点 西神第55地点 2号墳 出土鉄器 2点 堅田神社境内 1号墳 出土鉄器 1点	14
10	株雄山閣	『季刊考古学』 122号	五色塚古墳 平面図 『報告書』 付図1	1
11	個人	奈良文化財研究所 保存科学研究集会においてパワーポイントで発表するため(平成25年1月17日) 「弥生・古墳時代における麻布の製作技術」	西求女塚古墳 鏡に付着した布の写真 1点 『西求女塚古墳 発掘調査報告書』 図版46・50の鏡	1
12	個人	尼崎市立小田公民館で行なわれる『2013年出土錢貨報告会』で発表するため(平成25年2月2日) 「兵庫津の出土錢貨」	兵庫津遺跡出土錢貨関連資料 ①『第14・20次報告書』掲載図面・錢貨拓影 ②第26次出土天保通宝拓影・写真 ③『第52次報告書』「銀貨押印紋軒丸瓦」拓影・写真	3
13	個人	『出土錢貨』第32号への掲載のため 出土錢貨研究会 2013年刊行予定	兵庫津遺跡出土錢貨関連資料 ①『第14・20次報告書』掲載図面・錢貨拓影 ②第26次出土天保通宝拓影・写真 ③『第52次報告書』「銀貨押印紋軒丸瓦」拓影・写真	3
14	個人	『西相模考古』第22号(平成25年5月刊行予定)に掲載予定の論文「高尾山古墳出土鐵鏡の位置(仮題)」執筆のため	西求女塚古墳出土鐵鏡 2点(i102・i103) 『西求女塚古墳発掘調査報告書』P. 161 図109-掲載資料)	2
合計				39

表8 特別利用一覧 (1)

No.	申 請 者	利 用 目 的・内 容	資 料 名	資 料 点 数
1	個人	第19回 古代寺院史研究会での研究報告。	深江北町遺跡 第9次調査出土 墨書き器 39点 『報告書』156頁 表37 木簡 4点 『報告書』75頁・96頁	43
2	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	古墳時代の銅鏡についての論文執筆のため。	西求女塚古墳出土 1号鏡(半肉彫獸帶鏡) 1点 『報告書』 図版34	1
3	奈良文化財研究所	論文執筆のため。	吉田南遺跡 動物遺存体 (SD11 他) 小路大町遺跡 ウシ 楠・荒田町遺跡 ウシ 郡家遺跡 城の前地区 魚骨 兵庫津遺跡 第33・45次 人骨	17
4	個人	明石文化博物館「発掘された明石の歴史展」展示図録掲載のため。	高塚山古墳群 2号墳 線刻壁画 馬 1点 『報告書』12頁	1
5	姫路市埋蔵文化財センター	姫路市で刊行する発掘調査報告書作成のため。	大開遺跡出土土器(大開遺跡発掘調査報告書1993掲載) SD401出土土器3点(図版76の319・321・322)	3
6	(株)グループ現代	NHK 大河ドラマ『平清盛』の関連番組「清盛紀行」の制作のため。	祇園遺跡 出土土器・瓦 二葉町遺跡 出土土器	3
7	奈良文化財研究所	論文執筆のため。	吉田南遺跡 動物遺存体 (SD11 他)	11
8	奈良文化財研究所	ストロンチウム安定同位体分析 炭素・窒素同位体比分析	小路大町遺跡 馬齒 吉田南遺跡 馬齒(ラベルなし) 上沢遺跡 第35次 馬齒(R040) 御藏遺跡 第31~1次 馬齒 御藏遺跡 第45次 馬齒 吉田南遺跡 動物遺存体(河川・D11出土の貝以外)	6
9	奈良文化財研究所	論文執筆のため。	兵庫津遺跡 第33次 10点 2・3・5~9号・ST310号人骨 兵庫津遺跡 第45次 16点 ST01~03・05・06・08・09・12~14・19・20・22・25・28・29号人骨	26
10	個人	自由研究のため。	兵庫津遺跡 第53次 鉄製鉤針 18点 『兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書』 64頁 写真145	18
11	個人	個人研究(第13回播磨考古学研究集会記録集執筆)の資料収集のため。	天王山5号墳中央棺出土鉄器 2点 西神第55地点2号墳出土鉄器 3点	5
12	神戸国際観光コンベンション協会内 神戸フィルムオフィス	NHK 大河ドラマ『平清盛』の関連番組「清盛紀行」の制作のため。	祇園遺跡 琥珀天目小碗・出土土師器小皿・瓦	3
13	個人	明石文化博物館「発掘された明石の歴史展」展示図録掲載のため。	高塚山古墳群 第9号墳 横穴式石室構築材 線刻画石 『報告書』43頁 fig.106	1
14	奈良文化財研究所	論文執筆のため。	兵庫津遺跡 第33次 10点 2・3・5~9号・ST310号人骨 兵庫津遺跡 第45次 16点 ST01~03・05・06・08・09・12~14・19・20・22・25・28・29号人骨	26
15	文化庁文化財部美術学芸課	初期器財埴輪の研究のため。	小壺古墳(表採) 7点 『報告書』図5~99 350~353・図5~101 371~373 五色塚古墳(表採) 11点 『報告書』図5~99 355~358・360 図5~100 362・363・365~368 白水瓢塚古墳 15点 『報告書』第58図 178・179・第80図 239~251	33
16	個人	卒業論文作成のため。	旧神戸外国人居留地遺跡 レンガ 9点 『報告書』表17 煉瓦No18・20・42・45・155・472・1068・1011・2514	9
17	大手前大学史学研究所	韓国・国立伽耶文化財研究所等の研究者(全7名)による見学のため。	新方遺跡 出土木製品 15点 不明木製品 『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』 50頁 広鍬 『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』 57頁 又鍬 『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』 45頁 広鍬 『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』 46頁 鋤 『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』 46頁 縫棒 『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』 43頁 縫道具 『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』 43頁 鋸歯文帯環状木製品 『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』 58頁 椀 『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』 57頁 木製鉢 『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』 43頁 刀形木製品 『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』 44頁 直柄平鍬 『木器集成図録原始編』 01905 小型臼 『木器集成図録原始編』 08512 織機 『木器集成図録原始編』 09713 漁労具 『木器集成図録原始編』 10835	15
18	個人	兵庫県出土装飾付須恵器集成のため。	東石ヶ谷2号墳出土須恵器(装飾付壺) 『平成13年度 神戸市埋蔵文化財年報』	1

表9 特別利用一覧 (2)

No.	申 請 者	利用目的・内容	資 料 名	資料 点数
19	個人	修士論文作成のため。	篠原遺跡出土縄文土器 49点 1994「篠原式の提唱—神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討」 『縄文晚期前葉－中期の広域編年』掲載分 図11-47・50 図12-54・56 図14-103・110・111 図17-159・176 図20-223・225・233 図23-308 図26-341・347・350 図27-356・358・359 図30-407-410 図34-509・511 図36-543 図38-590 図40-609・614・615 図41-618 図43-663・676・689 図48-786 図51-848 図54-911・922・927 図56-936-940 図57-941・942 図58-943・944・946	49
20	個人	修士論文作成のため。	五色塚古墳 出土遺物 15点 『報告書』 図5-104 遺物番号394~408	15
21	個人	修士論文作成のため。	玉津田中遺跡 石杵 1点 『平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報』 197頁 平成23年度 神戸市埋蔵文化財センター企画展リーフレット 『神戸の地宝』 4頁	1
22	個人	備前焼茶道具についての研究および博士論文執筆のため。	湯山遺跡 備前焼陶器 2点 『報告書』 49頁 図10・13	2
23	個人	土器に残存する圧痕の観察のため。	大開遺跡 出土遺物 913点 『報告書』 第4遺構面 1~189 第3遺構面 1~724	913
24	個人	論文執筆のための資料調査。	敲石・磨石・砥石 大開遺跡 『大開遺跡発掘調査報告書』 頭高山遺跡 『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』 『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』 『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』 『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』 『平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報』 西神NT62地点A遺跡 『昭和56年度 神戸市埋蔵文化財年報』 西神NT65地点遺跡 『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』 『平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報』 北神NT4地点遺跡 『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』 『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』 城ヶ谷遺跡 『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』 『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』 『平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報』	71
25	個人	近畿地方の江戸時代人骨における形質人類学的研究のため。	兵庫津遺跡 第33次調査出土人骨 (1号・4号・ST219) 兵庫津遺跡 第45次調査出土人骨 (ST02・ST04・ST07・ST10・ST11・ST15~18・ST21~23・ST25~27・ST30) 以上19点	19
26	個人	学術論文執筆のため。	西求女塚古墳出土鉄鏡 65点 小札 1点	66
合計				1358

表10出土資料等貸出

No.	申 請 者	利用目的・内容	資 料 名	資料 点数
1	出雲弥生の森博物館	特別展「よみがえるな！－中村古墳のお葬式－」で展示。写真はパネル及び図録に使用	狩口台きつね塚古墳 馬具 9点 同 集合写真 1点	10
2	神戸市立博物館	特別展『国宝桜ヶ丘銅鐸の謎に迫る』で展示するため	西求女塚古墳出土（レプリカ）等 139点	139
3	兵庫県立考古博物館	平成24年度企画展「はかせからの挑戦状 古代人のデザインを探れ」で展示	西求女塚古墳出土銅鏡（6・7号）（複製品） 2点 大手町遺跡出土絵画土器 1点	3
4	兵庫県立考古博物館	考古博物館5周年・史跡大中遺跡発見50周年記念 特別展『卑弥呼がいた時代』で展示	出土遺物 西求女塚古墳5号鏡他 22点 白水瓢塚古墳出土鏡他 20点 写真 西求女塚古墳関連 10点 白水瓢塚古墳関連 3点	55
5	奈良文化財研究所 環境考古学 研究室	論文作成で使用	兵庫津遺跡 第33次調査出土人骨（2号・3号・5号～9号・ST309） 兵庫津遺跡 第45次調査出土人骨（ST01～ST06・ST08・ST09・ST12～ST14・ST19・ST20・ST22・ST25・ST28・ST29）	25
6	徳島市立考古資料館	特別企画展『卑弥呼の鏡とその周辺』で展示	出土遺物 西求女塚古墳出土鏡（複製品）2点（5号鏡・6号鏡） 写真 西求女塚古墳5号鏡他関連写真 7点	9
7	尼崎市教育委員会	尼崎市立田能資料館『弥生の鉄－石器から鉄器へ－』 展での展示および写真資料のパンフレット、広報資料への掲載	出土遺物 新方遺跡出土軋輪鑄造鉄斧片他 計13点 写真 石斧柄装着復元（『神戸考古百選』 P.20所収） 資料調査時撮影写真 計6点	19
8	明石市教育委員会	企画展『発掘された明石の歴史展』で展示使用	毬沙門1号墳出土空玉他 196点	196
合計				456

4. 普及啓発事業

体験発掘 平成24年1月よりNHK大河ドラマで平清盛が取り上げられ、平氏に関連する遺跡が所在する兵庫区等では地元が盛り上がりをみせていた。こうした情勢の中で文化財課として2つの事業を企画した。1つはKOBE de 清盛「体験！発掘調査」－兵庫津遺跡を発掘しよう－、1つは「清盛ゆかりの地から届け！子供たちの夢と思い」である。

兵庫津遺跡 兵庫津遺跡の体験発掘は、中央市場西側跡地にオープンした歴史館の協力を得て、同跡地で実施していた確認調査地区を会場として開催した。期間は4月3日から5月19日の火曜日、木曜日、土曜日、の午前10時から11時、午後14時から15時の合計43回（内1回は雨天のため中止）、各回15名を目安に募集を行なった。参加者は大人281名、小人205名の486名にのぼった。受付は歴史館で行ない、その見学後、すぐ西側の調査地で学芸員の説明を受けながら体験発掘を行なった。

参加者は就学前児童から高齢者まで幅広く、家族で参加されることが多かった。自らが取り上げた遺物の説明を受け、江戸時代の人々の生活を直接体感し、調査の手順の一部も経験する機会となった。アンケートの結果は、有意義であったとする感想が大半を占めた。しかし、もっと機会を増やして欲しい、1回の時間が短い等さらなる充実を希望する声も聞かれた。

雪御所遺跡・祇園遺跡 平氏関連遺跡である雪御所遺跡には湊山小学校が、祇園遺跡には平野小学校があり、小学校としても古い歴史を有しているが、地域の歴史にも関心が高い学校である。平成24年3月に両校の運動場に対して地中レーダー探査を行ない、湊山小学校では昭和62年度に実施した際に検出していた石垣状遺構が少なくとも10m以上続くことが判明した。平野小学校では明確な遺構は推測できなかったが、南側に隣接する旧楠幼稚園校庭での試掘調査の結果、平安時代後半の土坑状の遺構が存在することがわかった。



fig.12 体験発掘 兵庫津遺跡



湊山小学校・平野小学校体験発掘

学校側でも総合学習等で「平清盛」をテーマとして取り上げた。5月15日には埋蔵文化財センター見学、6月7・8日は6年生のフィールドワークによる歴史学習、6月10日の日曜授業参観に文化財課学芸員による出土品を持ち込んだ出前授業、7月9日～8月10日までの各40m²の発掘調査中の7月24日に高学年生による体験発掘を行なった。

さらに湊山小学校全児童が大河ドラマ出演者に手紙を送ったところ、7月11日、平清盛役の松山ケンイチさん、平重盛役の窪田正孝さん、平經盛役の駿河太郎さん、平宗盛役の石黒英雄さんの4人が特別授業のサプライズゲストとして参加された。4人を前に自分たちの歴史学習の発表や質問コーナーなど貴重な授業となった。出演者もゆかりの地で小学

生に興奮を持って迎えられ、平氏関連の出土品を手に取るという貴重な体験となった。この特別授業の一部は、報道関係にも公開され取り上げられた。

企画展示の開催

企画展示・体験講座・学校連携・地域連携等を中心に、各種事業を展開した。平成24年度の埋蔵文化財センターへの入館者数は39,567名であった。

平成24年度も別表（表11）のとおり、4回の企画展示を開催した。春季の企画展示では、日本の歴史を学習する小学校6年生が、埋蔵文化財を通じて、歴史に親しみやすくなる展示を行なっている。特に春季は、神戸市埋蔵文化財センターに多くの小学校が校外学習の場として利用している。冬季の企画展示では、小学校3年生が学習する「ちょっとむかしの暮らし」をテーマに展覧会を開催し、小学生のみならず一般の観覧者にも好評を得ている。



fig.13 企画展示「古代の神戸」



fig.14 企画展示「昭和のくらし・むかしのくらし7」

各種講座の開催

体験考古学講座 銅鐸づくり・勾玉づくり・土器づくり・鏡づくり・ガラス玉づくり等、古代の技術を学びながら、親子参加型の9講座11回開催の体験講座を行なった。講座の中の「豎穴住居をつくろう」は、平成21年度から開催している講座である。子どもたちを中心として茅葺職人の指導を得ながら、藁の編み方・縄のくくり方を学び、実物大の豎穴住居を木材で組み上げ、わら葺きの住居を参加者全員で完成させるというものである。体験講座の参加者数は、のべ580名であった。

歴史講演会の開催 各季の企画展示に因んだテーマや24年度の各遺跡の発掘調査成果速報等を学芸員がわかりやすく解説する講演会で、受講生は全講座で303名であった。

さらに秋季企画展において10月14日京都大学大学院教授上原真人氏を招き、「瓦が語る清盛びいきの世界」と題して特別講演会を開催した。83名の参加があった。



fig.15 特別講演会

表11 平成24年度の企画展示

展覧会名	開催期間	日数	入館者数
古代の神戸 一狩獵採集の時代から王の誕生まで	4月14日(土)～6月3日(日)	48日	12,097名
古代の技術を復元	7月21日(土)～9月2日(日)	38日	3,553名
清盛の生きた時代	10月6日(土)～11月25日(日)	44日	5,872名
昭和のくらし・昔のくらし7	1月14日(月)～3月3日(日)	43日	8,639名

表12 歴史講演会

月 日	講演名	入館者数
5月19日(土)	神戸市域の高地性集落について	33名
7月28日(土)	ものづくりのあれこれ	29名
10月27日(土)	清盛の生きた時代	75名
12月1日(土)	神戸市西区の古墳をたずねて	63名
1月19日(土)	昭和の残映	46名
2月16日(土)	神戸市発掘調査報告会	57名

学校連携事業

大学との連携

連携協定を結んでいる神戸学院大学と博物館学芸員課程の実習として資料貸出を実施した。また同大学図書館において「古代の伊川谷」のテーマで館外展示を行なった。

神小研社会科部との連携

神戸市小学校教育研究会社会科部との連携については、毎年、コミスタこうべ（中央区）にて開催される第11回『神戸市小学校社会科作品展』（9月15～24日）において優秀作品を30点を選定し、「埋蔵文化財センター賞」を授与、表彰した。

小学校への出張講座・出張授業

小学校に出張して、勾玉づくり・土器作りの体験考古学講座を17校で行ない、出張授業を6校で行なった。出張講座・授業の利用者は2,343名である。

地域連携事業

地域行事への参加

北区道場町連合自治会より、道場町文化祭での展示依頼があった。平成24年11月2・3日に神戸市農村環境改善センターにて「道場展 丘の上の古墳—塩田北山東古墳から続く丘陵上の古墳—」と題し展示を行なった。また長田区NPO法人KOBE鉄人PROJECTと都市計画総局の依頼により、KOBE三国志ガーデン企画展「三国時代の日本卑弥呼と弥生時代展」として、3月23日～6月30日に館外展示を行なった。

「櫛谷川まつり」（9月8日）「もっともっと押部谷！！リバーウォーク」（11月23日）等、地域の活動に参加し、埋蔵文化財センターのパネル展示や遺跡の説明等を行ない、文化財の普及啓発に務めた。

おおとし山まつりの開催

文化財保護月間でもある11月に垂水区役所と連携して、11月4日に大歳山遺跡公園において開催した。恒例の竪穴住居の公開や古代衣装の試着、地域の協力を得て実施した古代米のおにぎり試食、勾玉づくり等、古代体験を満喫する一日となった。参加者935名であった。

西区地域学の開催

西区役所と連携して行なう事業で、「神戸市西区の古墳をたずねて」と題して12月1日（土）に神戸市埋蔵文化財センターで講演会を開催し、翌日12月2日（日）には、「古墳をたずねる」バスツアーで天王山古墳群や王塚を見学した。参加者は41名であった。

また西図書館とは、各季の企画展でのイベントやスタンプラリーなどさまざまなかたちで連携を図り、両施設の活用促進を行なっている。



fig.16 出張授業



fig.17 体験考古学講座「土器づくり」



fig.18 おおとし山まつり



fig.19 体験考古学講座「竪穴住居をつくろう」

表13 平成24年度 埋蔵文化財出土遺物整理一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延調査面積	実施期間	調査内容	調査原因
1	篠原遺跡 第30次調査	神戸市教育委員会	石島三和	m ²	24.5.1~25. 3.29		出土遺物整理・報告書作成	共同住宅建設
2	祇園遺跡 第14次調査			m ²	24.4.1~ 25.3.31			
3	祇園遺跡 第15次調査	神戸市教育委員会	阿部 功	m ²	24.4.1~ 25.3.29		出土遺物整理・報告書作成	電力管理設工事
4	戎町遺跡 第68次調査			m ²	22.4.1~22. 12.28			
5	二葉町遺跡 第23次調査	神戸市教育委員会	須藤 宏	m ²	24.5.1~25. 3.29		出土遺物整理・報告書作成	共同住宅建設
6	若松東遺跡 第1~6次調査			m ²	24.4.1~ 25.3.31			
7	上沢遺跡 第4・5・10・12次調査	神戸市教育委員会	富山・斎木・横田明・家塚英詞	m ²	24.4.1~ 25.3.31		出土遺物整理・報告書作成	個人・共同住宅建設〔国庫補助事業〕
8	上沢遺跡 第53・54次調査			m ²	25.1.4~ 25.3.31			
9	出合遺跡 第45・46次調査	神戸市教育委員会	須藤・内藤・浅谷・藤井・阿部功	m ²	24.4.2~25. 3.29		出土遺物整理・報告書作成	宅地造成・集落基盤整備
10	端谷城出土 遺物保存処理			m ²	24.4.1~ 25.3.29			

表14 平成24年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延調査面積	実施期間	調査内容	調査原因
1	深江北町遺跡 第14次調査	東灘区深江北町1丁目地内	神戸市教育委員会	谷 正俊	364m ² 783m ²	24.4.4～ 24.8.7	古墳時代から近世にかけての堤間湿地とその堆積を検出した。耕作痕、水田畦畔、土坑等を検出した。	阪神電車立体交差
2	深江北町遺跡	東灘区深江北町1丁目41-42	神戸市教育委員会	富山直人	900m ² 4,000m ²	24.10.29～ 24.12.25	古墳時代から中世にかけての水田面を5面検出した。	共同住宅建設
3	西岡本遺跡	東灘区西岡本6丁目7-2	神戸市教育委員会	井尻 格	20m ² 20m ²	24.5.7～ 24.5.8	弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面を検出、土坑3基とピット6か所を検出した。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕
4	本山北遺跡 第5次調査	東灘区岡本1丁目136-16	神戸市教育委員会	中谷 正	15m ² 15m ²	24.5.30	弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴建物を検出した。	共同住宅建設〔国庫補助事業〕
5	本山北遺跡 第6次調査	東灘区岡本1丁目136-18	神戸市教育委員会	阿部敬生	30m ² 30m ²	24.6.11～ 24.6.15	古墳時代後期以降の遺構を検出した。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕
6	郡家遺跡	東灘区御影郡家1丁目10-17	神戸市教育委員会	阿部敬生	50m ² 150m ²	24.9.21～ 24.10.12	遺構面を3面検出、古墳時代前期から後期にかけての遺構面及び遺構、古墳時代後期遺物包含層から多くの遺物が出土した。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕
7	郡家遺跡	東灘区御影郡家2丁目305番5	神戸市教育委員会	谷 正俊	210m ²	24.10.15～ 24.11.22	古墳時代後期の竪穴建物2棟、掘立柱建物1棟、中世の掘立柱建物1棟、犁溝遺構、中世ピット群、土石流痕跡等を検出した。	共同住宅建設〔国庫補助事業〕
8	郡家遺跡	東灘区御影郡家2丁目305番3	神戸市教育委員会	丹治康明	42m ²	24.8.13～ 24.8.16	古墳時代から平安時代後期の遺物包含層を検出した。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕
9	住吉宮町遺跡 第50次調査	東灘区住吉宮町7丁目15番	神戸市教育委員会	口野博史	483m ²	24.6.27～ 24.8.28	2面の遺構面を検出し、中世から近世の掘立柱建物1棟、土坑、溝等、古墳時代後期の古墳1基、箱式石棺1基、掘立柱建物2棟、土坑、流路状遺構等を検出した。	保育園建設
10	御影郷古酒蔵群 第5次調査	東灘区御影町1丁目432	神戸市教育委員会	黒田恭正	2,760m ²	24.5.18～ 24.9.27	木村酒造の江戸時代から明治時代にかけての建物の変遷を追うことができる資料が得られた。	介護老人保健施設建設及び共同住宅建設
11	篠原遺跡 第31次調査	灘区篠原北町2丁目26番・27番	神戸市教育委員会	阿部敬生 内藤俊哉	650m ² 1,300m ²	24.4.12～ 24.6.5	2面の遺構面を検出し、1面は中世頃で土坑、ピット等を検出した。2面は弥生時代中期後半頃の竪穴建物、ピット、溝等の遺構を検出した。竪穴建物からは多量のサヌカイト片が出土した。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕
12	日暮遺跡 第35次調査	中央区日暮通2丁目365	神戸市教育委員会	西岡巧次	350m ² 350m ²	24.4.23～ 24.6.4	奈良時代溝状遺構、ピット、杭列等を検出した。	共同住宅建設
13	日暮遺跡 第36次調査	中央区筒井町3丁目638、639	神戸市教育委員会	丹治康明	6m ² 6m ²	24.10.31～ 24.11.1	遺物包含層を検出した。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕
14	日暮遺跡 第37次調査	中央区日暮通1丁目389	神戸市教育委員会	佐藤麻子	40m ² 80m ²	24.11.22～ 24.12.14	2面の遺構面を検出し、第1面は、平安時代から中世にかけての遺構面でピット等を検出、第2面は平安時代頃の遺構面で柱穴、溝状遺構等を検出した。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕
15	日暮遺跡 第38次調査	中央区東雲通1丁目340、341、346、347	神戸市教育委員会	黒田恭正	78m ² 78m ²	25.3.19～ 25.3.28	古墳時代から平安時代の遺物包含層上面を検出(次年度継続)	共同住宅建設〔国庫補助事業〕
16	雲井遺跡 第35次	中央区琴緒町2丁目374	神戸市教育委員会	丹治康明	30m ² 30m ²	24.10.2～ 24.10.12	弥生時代後期末～古墳時代前期、弥生時代中期、弥生時代前期末～弥生時代中期前半の3面の遺構面を検出し、弥生時代中期の玉作り工房と考えられる竪穴居住等を検出した。	共同住宅建設
17	雲井遺跡 第36次	中央区雲井通3丁目391-4一部、391-5一部	神戸市教育委員会	丹治康明 井尻 格 井上麻子	58m ² 116m ²	25.2.14～ 25.2.26	2面の遺構面を検出し、第1面は、中世以降の遺構面で溝状遺構を検出、第2面は弥生時代頃の遺構面でピット、落ち込み状遺構等を検出した。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕
18	花隈城跡 第5次調査	中央区下山手通3丁目15-20、21	神戸市教育委員会	西岡巧次	210m ² 210m ²	24.8.13～ 24.8.31	古墳時代後期の掘立柱建物1棟、古墳時代の竪穴建物1棟、縄文時代後期落ち込み状遺構を検出した。	共同住宅建設
19	下山手遺跡 第6次調査	中央区下山手通7丁目1番2号	神戸市教育委員会	阿部敬生	1,950m ² 4,000m ²	24.10.24～ 25.3.4	3面の遺構面を検出し、弥生時代中期の竪穴建物1棟、古墳時代後期の竪穴建物1棟、飛鳥時代の竪穴建物1棟、掘立柱建物4棟、井戸1基等を検出した。	店舗建設
20	楠・荒田町遺跡 第52次調査	中央区楠町7丁目5-2	神戸市教育委員会	富山直人	30m ² 30m ²	24.8.20～ 24.8.27	近世から中世にかけての遺構面と近世以降の溝状遺構を検出した。	病院施設建設
21	楠・荒田町遺跡 第53次調査	兵庫区荒田町3丁目1-6、1-7	神戸市教育委員会	閑野 豊	420m ² 1,260m ²	24.9.27～ 24.11.30	3面の遺構面を検出、1面江戸時代頃、2面平安～鎌倉の遺構面、井戸1、建物4、木棺墓2等、木棺墓から和鏡などが出土。3面は弥生中期から古墳後期の遺構面、竪穴建物、土坑等を検出。	共同住宅建設
22	楠・荒田町遺跡 第54次調査	兵庫区荒田町2丁目1-5、1-10	神戸市教育委員会	黒田恭正 井尻 格	808m ² 808m ²	24.9.25～26.24、 10.22～24.11. 14・24.12.10～ 25.1.17	弥生時代中期の方形周溝墓と考えられる溝と明治時代のマッチ工場の遺構を検出した。	病院施設建設
23	楠・荒田町遺跡 第55次調査	兵庫区荒田町1丁目7-2	神戸市教育委員会	丹治康明	10m ² 10m ²	24.11.8	弥生時代遺物包含層を検出した。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕
24	祇園遺跡 第16次調査	兵庫区下三条町13番、19番4、19番6	神戸市教育委員会	井尻 格	40m ² 80m ²	24.7.9～ 24.8.22	平安時代末遺構面及び土師器皿の集積を検出した。	範囲確認調査
25	祇園遺跡 第17次調査	兵庫区下三条町19番3	神戸市教育委員会	川上厚志	780m ² 780m ²	25.1.10～ 25.3.28	一部平安時代末遺構面及び室町時代、近世圍場遺構を検出した。	学校建設
26	雪御所遺跡 第2次調査	兵庫区雪御所町2	神戸市教育委員会	井尻 格	55m ² 55m ²	24.7.17～ 24.8.22	第1次調査時の続きと考えらる中世後半以降の石垣を検出した。	範囲確認調査
27	雪御所遺跡 第3次調査	兵庫区淡山西22番3	神戸市教育委員会	閑野 豊	200m ² 200m ²	24.8.8～ 24.9.4	弥生時代末頃の竪穴建物1棟、平安時代末落ち込み状遺構等を検出した。	共同住宅建設

No	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延調査面積	実施期間	調査内容	調査原因
28	兵庫松本遺跡 第24次調査	兵庫区大井通1丁目1-4	神戸市教育委員会	口野博史	16m ²	24.10.22～ 24.10.25	弥生時代遺構面、溝状遺構と古墳時代の遺構面を検出し、2面の遺構面を検出した。	市営住宅拡充工事
					16m ²			
29	兵庫津遺跡 第57次調査	兵庫区中之島2丁目	神戸市教育委員会	丹治・富山・ 川上・佐藤	4,640m ²	24.4.1～ 24.12.27	兵庫城築城期の石垣を検出、以降兵庫勤番所にいたる変遷が追える遺構が確認された。また各調査区でも中世から近世にかけての町屋とそれに伴う遺構、遺物を検出した。	汚染土壤除去・範囲確認調査
					12,104m ²			
30	兵庫津遺跡 第58次調査	兵庫区門口町1丁目3他	神戸市教育委員会	谷 正俊	75m ²	25.3.5～ 25.3.25	4面の遺構面を検出、調査地は町屋裏手空閑地で、砂採取土坑や廃棄用土坑等を検出した。	共同住宅建設
					300m ²			
31	唐崎城跡・尼崎 字園古墳群第1 次調査	北区道場町塩田3083番 地	神戸市教育委員会	口野博史	1,658m ²	24.12.4～ 25.3.22	弥生時代中期堅穴建物1棟、古墳時代後期堅穴建物6棟、掘立柱建物5棟、箱式石棺2基、中世の遺構等を検出した。	施設建設
					1,658m ²			
32	小坂遺跡 第2次調査	北区八多町中字坂本山607の 一部、609番2	神戸市教育委員会	山口英正	85m ²	24.11.19～ 24.12.6	中世頃の集石遺構、溝遺構、土坑等を検出した。	宅地造成
					85m ²			
33	山田・中遺跡 試掘調査	北区山田町中字合ノ元、 堂ノ向5番地	神戸市教育委員会	富山直人	80m ²	25.3.13～ 25.3.25	遺構、遺物ともに確認されなかった。	公園建設
					80m ²			
34-1	大橋町東遺跡 第3次調査	長田区大橋町3丁目4・ 5	神戸市教育委員会	西岡 巧 中谷 正 閑野 豊 須藤 宏	370m ²	24.4.2～ 24.5.18	2面の遺構面を検出した。弥生時代から古墳時代の遺構面では、堅穴建物1棟、掘立柱建物1棟等、中世の遺構面では、ピット、溝状遺構等を検出した。	市街地再開発
					740m ²			
34-2	大橋町東遺跡 第4-1次調査	長田区大橋町3丁目4・ 5	神戸市教育委員会	閑野 豊	660m ²	24.5.29～ 24.7.18	古墳時代の遺構面を検出し、掘立柱建物1棟、溝状遺構2条等を検出した。	市街地再開発
					660m ²			
34-3	大橋町東遺跡 第4-2次調査	長田区大橋町3丁目4・ 5	神戸市教育委員会	佐藤麻子	290m ²	24.9.21～ 24.10.19	2面の遺構面を検出した。上層は中世から近世にかけての耕作痕等の遺構、下層では、古墳時代井戸、繩文時代晚期のピット及び自然流路等を検出した。	市街地再開発
					580m ²			
34-4	大橋町東遺跡 第4-3次調査	長田区大橋町3丁目1	神戸市教育委員会	谷 正俊	250m ²	24.12.26～ 25.1.29	2面の遺構面を検出した。第1面は、平安時代頃で溝、耕作痕、土坑等の遺構を、第2面は、古墳時代の土坑、ピット、耕作痕を検出した。	市街地再開発
					500m ²			
35	松野遺跡 第44次調査	長田区日吉町3丁目27番・ 26番・12番・19番の一部	神戸市教育委員会	閑野 豊	70m ²	24.7.26～ 24.8.1	古墳時代後期遺構面と遺構を検出した。	事務所建設
					140m ²			
36	若松町遺跡 第7次調査	長田区若松町11丁目25- 1-4～26	神戸市教育委員会	丹治康明	30m ²	24.7.11～ 24.7.13	室町時代頃の耕作痕を検出した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
					30m ²			
37	戎町遺跡 第69次調査	須磨区寺田町2丁目125- 4	神戸市教育委員会	阿部敬生	110m ²	24.7.27～ 24.8.31	弥生時代中期の遺構面が2面検出した。第1面では、堅穴建物1棟、土坑1基等の遺構、第2面では、溝状遺構2条、落ち込み状遺構1基、ピット50基等を検出した。	共同住宅建設
					220m ²			
38	大手町遺跡 第9次調査	須磨区大手町4丁目12- 10	神戸市教育委員会	阿部敬生	50m ²	24.6.21～ 24.7.19	弥生時代後期の堅穴建物2棟、溝状遺構1条、ピット等を検出した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
					50m ²			
39	大田町遺跡 第17次調査	須磨区大田町6丁目1 ～7、40～42	神戸市教育委員会	口野博史	250m ²	24.4.16～ 24.6.5	遺構面は6面検出した。近世耕作痕、堅穴建物1棟、古墳時代後期溝状遺構、古墳時代水田遺構、弥生時代溝状遺構等を検出した。	病院建設
					1,340m ²			
40	古川町遺跡 第2次調査	須磨区小寺町3丁目1番	神戸市教育委員会	山口英正 阿部 功	2,300m ²	24.4.2～ 24.9.21	3時期の遺構が検出し、中世から近世にかけての耕作痕、奈良時代から平安時代の掘立柱建物、井戸、木棺墓、古墳時代後期頃の堅穴建物1棟、大壁造り建物3棟等の遺構を検出した。	市営住宅建設
					2,300m ²			
41	押部遺跡 第4次調査	西区押部谷445-1	神戸市教育委員会	口野博史	55m ²	24.6.12～ 24.6.19	鎌倉時代後期頃の掘立柱建物1棟、溝状遺構、落ち込み状遺構、ピット等を検出した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
					55m ²			
42	玉津田遺跡 第38次調査	西区宮下2丁目9 (宮下公園)	神戸市教育委員会	山口英正	210m ²	24.10.3～ 24.10.25	遺構、遺物ともに稀薄で、古墳時代中期頃の畦畔を検出した。	大規模貯水槽設置工事
					210m ²			
43	玉津田遺跡 第39次調査	西区平野町中津字橋爪 152番1	神戸市教育委員会	阿部敬生	100m ²	25.3.11～ 25.3.18	弥生時代後期から古墳時代前期にかけての溝状遺構を検出した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
					100m ²			
44	枝吉遺跡 第2次調査	西区枝吉4丁目98番1	神戸市教育委員会	富山直人	60m ²	24.9.28～ 24.10.19	庄内並行の土坑と15世紀後半の溝状遺構を検出した。枝吉城に隣接するものか。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
					60m ²			
45	今津遺跡 第24次調査	西区玉津町今津字測ヶ上 165-1、165-2、165-3、16- 6-5の一部	神戸市教育委員会	井尻 格	10m ²	24.12.20～ 24.12.21	弥生時代中期頃の遺物包含層を検出した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
					10m ²			
46	新方遺跡 第50次調査	西区河西原字野手309番 の一部、310番	神戸市教育委員会	西岡巧次	69m ²	22.6.11～ 22.7.13	弥生時代と古墳時代の2面の遺構面を検出した。弥生時代の溝状遺構や落ち込み状遺構、古墳時代の堅穴建物1棟、溝状遺構、土坑等を検出した。	共同住宅建設 (国庫補助事業)
					200m ²			
47	新方遺跡 第51次調査	西区玉津町新方字北方 342-1	神戸市教育委員会	口野博史	56m ²	24.9.3～ 24.10.15	古墳時代2面、奈良時代から平安時代の遺構面1面、計3面の遺構面を検出した。溝状遺構、落ち込み状遺構、ピット等を検出した。	共同住宅建設 (国庫補助事業)
					156m ²			

報告書刊行済

調査面積合計
延調査面積合計

22,083m²
41,565m²

31遺跡、47調査

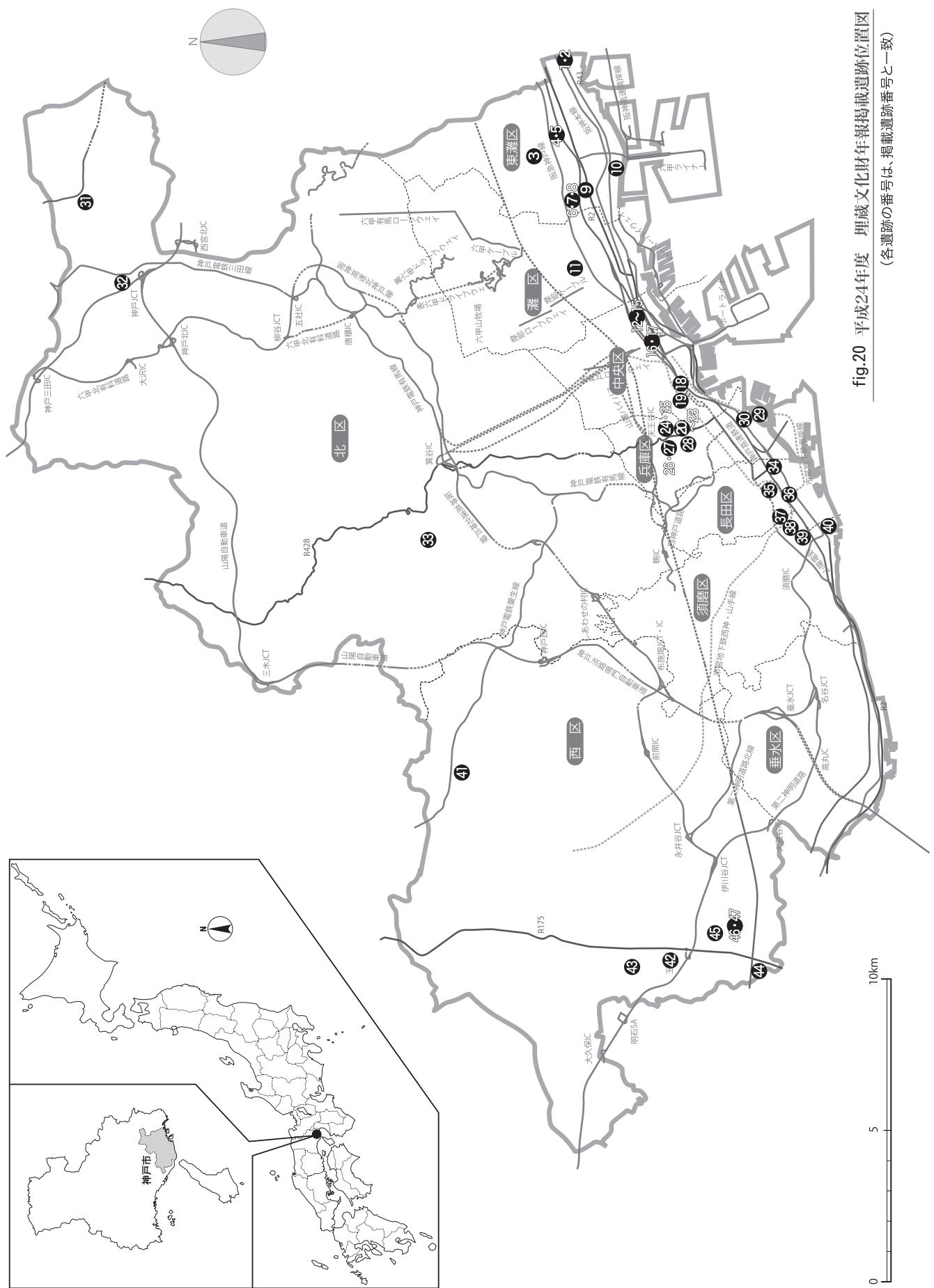




fig.21 調査地点位置図(1) 1 : 50,000



fig.22 調査地点位置図(2) 1 : 50,000



fig.23 調査地点位置図(3) 1 : 50,000



fig.24 調査地点位置図(4) 1 : 50,000



fig.25 調査地点位置図(5) 1 : 50,000

II. 平成24年度の発掘調査

1. 深江北町遺跡 第14次調査

1. はじめに

深江北町遺跡は神戸市域の東端に位置し、芦屋市との市境を跨いで遺跡が存在する。芦屋市側は津知遺跡と称しているが、本来同一の遺跡と考えられる。この遺跡は大阪湾を巡る沿岸流によって形成された浜堤上に立地し、現在の海岸線からは、約500m離れている。また、場所はまだ確定されていないが、この付近を古代山陽道が通過していたことはほぼ間違いない、これまでの発掘調査成果により「葦屋驛家」がごく近辺に奈良～平安時代前半頃まで存在していたことが出土資料等から窺える。今回の調査では、遺構が集中した浜堤上からは古墳時代後期の祭祀遺物群や飛鳥時代～平安時代初めまでの竪穴住居、掘立柱建物等を確認している。その周辺の湿地からは大量の木片・各種の木製品とともに木簡・墨書き土器が出土した。また第9次調査では、承和の年号が入った米の支給伝票木簡や「九九八十一・八九七十二」と書かれた木簡や、「驛・大垣」等と墨書きされた土器が発見され



ていることが特筆され、葦屋驛家に深く関わる施設が近辺に存在していたことを示唆する有力な資料を提示している。また、各種土錘・蛸壺等の漁具が多く出土し、海との関わりが深い人々の集落遺跡であることも指摘できる。

2. 調査の概要

この調査は阪神電気鉄道本線の高架化工事に伴い、深江北町遺跡の範囲を東西に横断する形で行なわれており、浜堤から堤間湿地に変化するという様な起伏に富んだ地形を確認している。また、平成23年度の同事業に伴う調査では浜堤上で、飛鳥～平安時代の集落跡を確認している。

調査は、平成23年度の調査地の東側に位置する高架橋梁の基礎部分1箇所あたり約41～54m²の計7箇所を、シートパイルで囲って発掘する方法をとっている。また、調査区の呼称は、現地調査中に事業者側と意思の疎通を容易にするため、工事にあたって、各橋台に工事番号として付している呼称名を、そのまま踏襲している。なお、この調査の詳細は神戸市教育委員会発行の『深江北町遺跡第12・14次調査埋蔵文化財発掘調査報告書』が刊行されており、そちらを参照していただきたい。

3. 各調査の概要

P 2 区 阪神電車軌条の盛土、近世の耕作土以下は中・近世頃の洪水の堆積層が厚く堆積し、その下に奈良時代頃の土器を含む湿地層、シルトと細砂で構成される海の影響を受けた層が堆積する。

出土遺物としては「辛万（呂）」と書かれた墨書き器や舟形木製品、漆容器が出土している。

P 3 区 阪神電車の軌条下には近世・近代耕作土、P 2 区から連続する近世洪水砂層がある。その下は奈良・平安時代の湿地層、奈良時代頃の水田面と畦畔検出層があり、それ以下で古墳時代の土器が出土する濁筋（黒灰色・暗灰色・灰色中砂）を確認した。

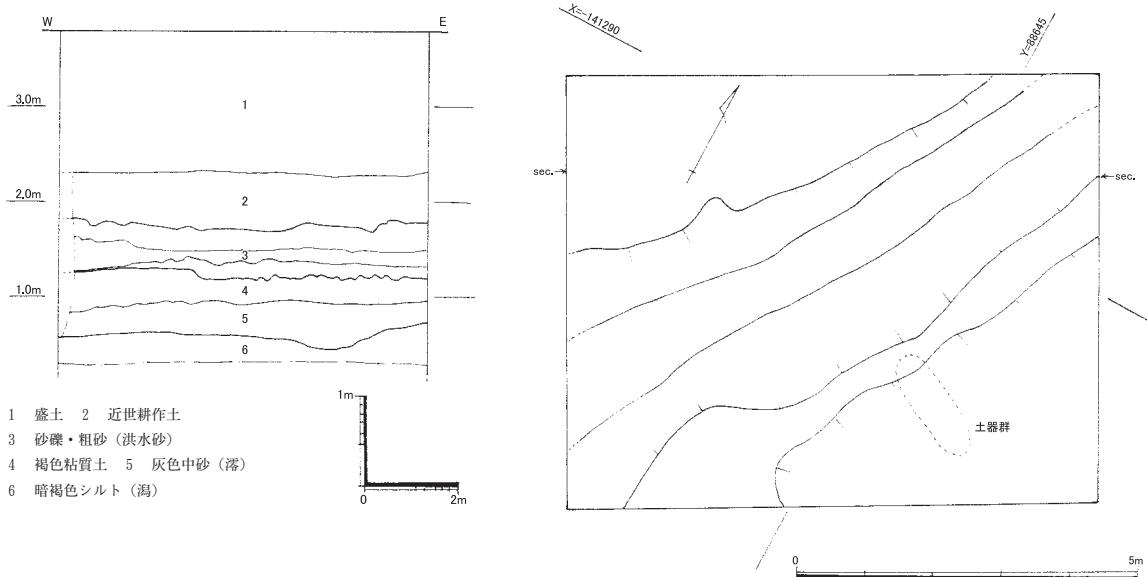


fig.28 P 3区黒灰色中砂面濁筋平面図

奈良時代の水田畦畔は幅約0.4～0.5m、高さ0.1m程度で、ほぼ東西方向に延びる。畔の一部分が洪水の砂礫で抉られて消失していた。水田面にはヒトの足跡やウシと思われる偶蹄目の足跡が確認でき、その一部は歩行の状態がわかるものもある。

水田層の下はよく淘汰された中砂が厚く堆積する。その堆積過程で北東から南西方向の濁筋が開いていた時期があり、その濁筋の岸辺に古墳時代前期の土器群（小型丸底形壺、甕形土器、壺形土器）がまとまって出土した。水辺での祭祀跡と考えられる。

P 4 区 阪神電車軌条下の盛土、近代・近世耕作土の下は中世耕作土（暗灰色砂質土）、奈良時代頃の洪水層、奈良時代頃の水田層（褐色粘質土）を確認した。水田層では畦畔を確認していないが、隣接した調査区の水田畦畔確認層とほぼ同じ高さの同質の層である。この面には調査区の中央を南北方向に洪水砂が流れた跡が残されており、水田面には動物の足跡を確認した。遺物としては舟形木製品が出土している。

P 5 区 阪神電車軌条の盛土、近代・近世・

中世耕作土の下は、奈良・平安時代頃の湿地層、洪水砂、奈良時代頃の水田層が堆積する。水田畦畔は幅約0.8~1m、高さ0.1m程度で、南北方向に延びる。水田層面ではヒトとウマ？の足跡が多数残されていた。また、畦畔の東側に中砂がレンズ状に堆積している箇所があり、精査したところ、土坑（SK01）であることが判明した。径約2.1m、深さ0.8mの二段掘りで、上層は中砂で埋められ、下層はシルトが堆積していた。水田面から掘り込まれており、灌漑用の水を溜める施設（溜井）と考えられる。出土遺物としては「飯」と書かれた墨書き土器や木錘、舟形、曲物の底板がある。

P 6 区 阪神電車軌条の盛土、近代・近世・中世の耕作土が連続し、奈良・平安時代頃の湿地層を確認する。以下は中砂層が堆積し、杭列、柵、落ち込み、流路を確認した。流路は、深さ0.1~0.2m程度で、やや深みになる箇所には植物遺存体が溜まっていた。流路からは古墳時代後期の土器片が出土している。

調査区北半部で杭が6本、ほぼ直線に並んで検出した。西側の杭には丸材を横に配し、柵としていた。これらは上層の奈良時代の遺物を含む土層から打ち込まれたものと考えられる。この層では畦畔等は確認できなかったが、土の状況からみて水田層であった可能性が高く、杭・柵などもそれに伴う遺構であると思われる。

出土遺物としては水田層の下層（黒灰色粗砂混じりシルト層）で「□[飯カ]男」と書かれた墨書き土器や「戸主椋人廣男戸馬□」と墨書きされた木簡が出土している。また、浮木、漆容器、曲物の蓋板、箸、馬形、楔状品等の木製品が発見された。

P 7 区 阪神電車の盛土下、近代・近世・中世耕作土、奈良・平安時代頃の湿地層（黒灰色粗砂混じり粘質土）、洪水層（灰色粗砂）、湿地層（黒灰色シルト）の堆積が確認された。

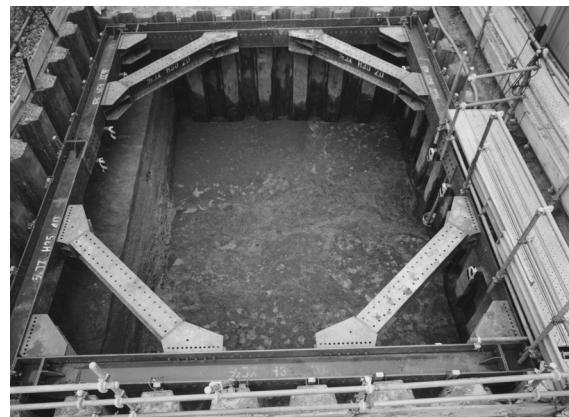


fig.29 P 4 区第1遺構面全景（北から）



fig.30 P 6 区杭列検出状況（南東から）

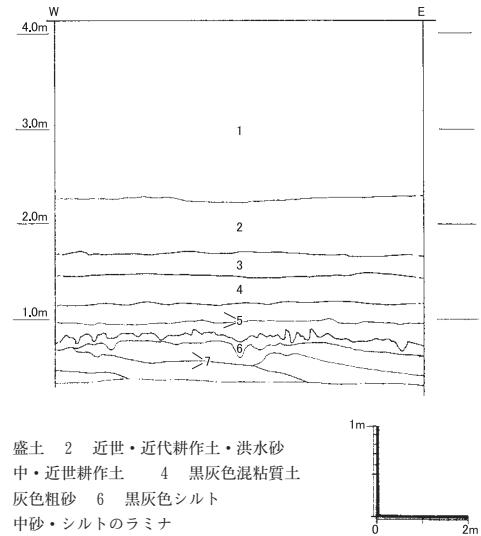


fig.31 P 7 区北壁断面実測図

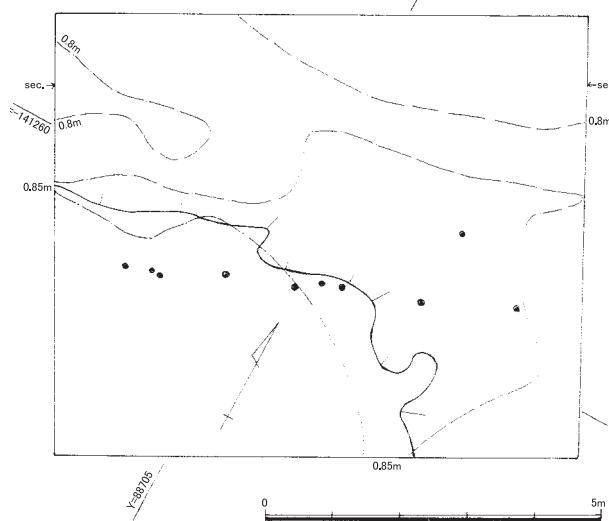


fig.32 P 7 区杭列検出状況平面図

黒灰色シルト上面では直線に並ぶ杭10本を確認したが、検出面よりも上層（おそらく奈良・平安時代の湿地層）から打ち込まれたものと思われる。

P 8 区 阪神電車軌条の盛土、近代・近世耕作土の下、幾度かの洪水による細砂～砂礫層が確認される。中世耕作土(暗灰色粘質土)の下は黒灰色粗砂混じり粘質土が堆積し、その下は洪水の砂礫に覆われた状態の奈良時代の水田層（黒灰色粗砂混じりシルト）を確認し、東西方向に延びる畦畔を確認した。また、水田層の上面では、ヒトや偶蹄目の動物の足跡を多数検出した。

水田層の下は主に砂礫・粗砂層が堆積する。これらを南北方向に削って砂礫混じりのシルト層が小川状に検出されており、この中には自然木や古墳時代後期頃の土器が混じっている。

4. まとめ

今回の調査では、前年度の調査によって明らかになった浜堤の北側に位置する堤間湿地（ラグーン）の状況が確認できた。当初は、沼状の深い湿地が拡がっているのではないかと想定したが、調査の結果、奈良時代頃の水田が相当広範囲に営まれていたことが判明した。しかし、その営々と築かれた古代の人々の営みも、一時の自然の暴威によりたちまち消え去ったという事実は、各調査区で発見された水田遺構がいずれも洪水堆積物に埋もれていたことにより、明らかとなつた。

また、低湿地の土壤であるため、今回の調査でも土器類とともに木簡、木製品、漆製品が出土し、その中でも、舟形木製品と文字が書かれた資料（木簡・墨書土器）が注目される。



fig.33 P 8 区畦畔検出状況（西から）

2. 深江北町遺跡 第15次調査

1. はじめに

深江北町遺跡は、六甲山南麓の芦屋川左岸、標高2.0m～5.0mに位置している。これまでに14次に及ぶ調査が行なわれており、弥生時代の掘立柱建物や土器棺墓・円形周溝墓、古墳時代の竪穴建物などが確認されている。中でも第9次調査では、奈良時代前半から平安時代前期にかけての真北方向をとる多数の掘立柱建物と共に、「驛」と書かれた墨書き土器や木簡、瓦・綠釉陶器などが出土している。この調査によって、「芦屋驛家」を推定する上で重要な資料を得ることができた。

今回の調査地は、平成23年度に実施した第13次調査地の西に隣接している。

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事によって埋蔵文化財が影響を受ける部分について実施した。盛土および旧耕作土については重機によって掘削を行ない、遺構については人力により検出等を行なった。残土の仮置きなど調査地の都合上、一部を分割して調査を実施した。調査の結果、古墳時代から中世の遺構を5面にわたって確認した。

一部に攪乱を受けているものの、遺構面は比較的良好に遺存しており、GL-0.5m前後の第3層明褐色細砂混シルト上面が第1遺構面（中世）、6層灰色細～中砂混シルト上面が第2遺構面（平安時代）、8層暗灰褐色シルト上面が第3遺構面（古墳時代末期）、10層暗褐灰色シルト上面が第4遺構面（古墳時代後期）、15層黒灰色極細砂混シルト下面が第5遺構面（古墳時代前期～中期）となる。

第1遺構面 中世に営まれた水田遺構を検出した。

水田の平面形状は南北方向では、幅5～7mで東西方向に長い長方形を呈し、南に下がる棚状の水田面を形成している。畦畔の残存は悪く不明である。水田の方位はほぼ現地表の地割に近いものである。

第2遺構面 平安時代に営まれた水田遺構を検出した。第2遺構面の水田も第1遺構面の水田と同様に南北方向は、幅5～7mで、東西方向に長い長方形を呈し、南に下がる棚状の水田面を形成している。東西方向の規模は調査区内で、南北方向の畦畔が検出されていないものがほとんどで、明らかではない。ただし、一部で、南北8m、

T.P+4.40m	盛土	T.P+4.0m
T.P+3.94m	黄灰色中～細砂混シルト	
T.P+3.76m	明褐色細砂混シルト（第1水田面）	
T.P+3.60m	淡褐色中～粗砂	
T.P+3.40m	淡青灰色中～粗砂	
T.P+3.36m	灰色中～細砂混シルト（第2水田面）	
T.P+3.28m	黄灰色粗砂	
T.P+3.05m	暗灰褐色シルト（第3水田面）	T.P+3.0m
T.P+2.95m	暗青灰色中～細砂混シルト	
T.P+2.73m	暗褐色シルト（第4水田面）	
T.P+2.64m	暗灰色細砂混シルト	
T.P+2.53m	青灰色中砂	
T.P+2.48m	黒灰色極細砂	
T.P+2.42m	淡黃茶色中～粗砂	
T.P+2.31m	黒灰色極細砂混シルト（第5水田面）	
T.P+2.20m		

fig.34 南壁断面模式図



fig.35 第2遺構面足跡検出状況

東西13mと規模のわかる水田もある。大区画の圃場内と小畦畔で区画する水田もある。水田の方位は、大区画水田は、ほぼ現地表の地割に近いものであるが、大区画内部における小規模水田の区画は地形に合わせる形を取っており、必ずしも現地表の地割に沿うものばかりでもない。



fig.36 第1～4 遺構面平面図

第3遺構面 古墳時代末期に営まれた水田遺構を検出した。調査区の東端付近で地形が大きく西側に下がり、それを境に東側の水田畦畔は削平を受けて失われているが、調査区西半部分では、水田畦畔が残存している。

水田は7m×3mの規模のものの他、さまざまであり、形状は不定形である。水田の方位は、ほぼ現地表の地割に近いものもあるが、まちまちであり、全体として、現地表の地割とは異なる方位の水田と考えられる。

第4遺構面 古墳時代後期に営まれた水田遺構を検出した。この水田面は、第13次調査で検出した、第4面と同じ水田面と考えられる。

東側では、第13次調査に続く水田面が確認できたが、東側の大畦畔とそれに伴う水路(SD401)を境に、西側では洪水砂による削平のため、溝等の深みのある遺構以外はほとんど確認できていない。なお、この水田面は、第13次調査時には古墳時代前期と考えられていたが、遺物の再確認の結果、13次調査での第4面出土遺物の中にも相当量須恵器が含まれることが判明し、今回の調査成果とあわせて、古墳時代後期(TK47型式併行期前後の時期)の水田と考えられる。



fig.37 第4遺構面全景写真（南から）

第5遺構面 古墳時代前期から中期にかけて営まれた水田遺構を検出した。この面は、第13次調査において、断ち割り調査で、第4遺構面の下層に水田面の可能性のある黒色粘土層が確認されている面に相当する。

この水田面は、西側の北から南に蛇行しながら流れるSD501を境に、東側では洪水砂による削平のため明確な水田面を確認できていない。そのため、調査区東半では、面の連続性をトレントにて確認するにとどめた。この面の水田で規模の最大のものは、5m×3mを測る。水田の方向は現地表の地割に近い方位に蛇行して流れるSD501に沿うため、一見現地表の地割に近い方位をとる。

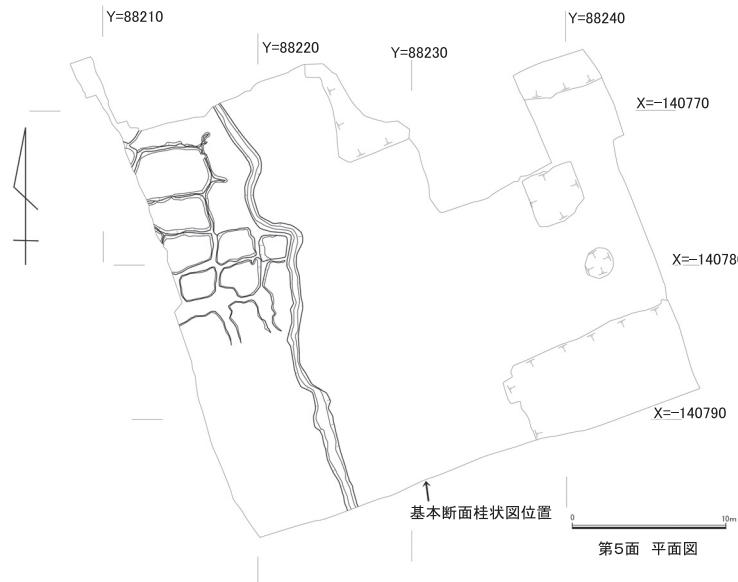


fig.38 第5遺構面平面図

3.まとめ

今回の調査では、古墳時代から中世にかけての計5面の水田面を確認した。水田畦畔の方向は、平安時代以降は、ほぼ現地表の地割方向と一致しており、現地表の地割が形成されたのが平安時代と考えられる。

その上で、深江北町第9次調査の真北方向をとる建物群の存在を考えると、建物群の時期は、平安時代前期までとされていることから見て、現地表の地割方向が確実に遡れるのは、平安時代後半以降であろう。なお、平安時代前期まで遡れるかは、第9次調査周辺の調査の進展を待って今後の課題となろう。

また、古墳時代の水田では、地形に沿いながら、水田区画を決定しており、規模も時期が遡ると共に小規模なものへの変化がたどれた。これは、土木技術ならびに水田造成上の労働力の集約において、地形に制限された小規模な水田経営から、水田の生産性と作業の効率化を求めて、徐々に水田面積を広げるという方向性が読み取れるものと思われる。

3. 西岡本遺跡 第10次調査

1. はじめに

西岡本遺跡は、六甲山系より流れ出す住吉川によって形成された扇状地左岸の北西から南東方向への傾斜地形に立地する。

この地域は、昭和30年代まで横穴式石室をもつ古墳時代後期の群集墳が存在していたことが知られているが、急速な宅地化によってその実態は不明であった。昭和63年に実施された第1次調査では横穴式石室墳10基をはじめとする縄文時代～中世にかけての遺構や遺物が確認された。

その後9次にわたる発掘調査によって古墳時代を中心とする遺構・遺物が検出されており、また本山浄水場内で行なわれた、第4・5・6次調査においては平安時代中期～中世初頭の掘立柱建物や土坑とともに多量の遺物が出土した。

2. 調査概要

今回の発掘調査は、個人住宅建設に伴い試掘調査を行なった結果、古墳時代の土器と弥生土器が出土した。埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲のうち、敷地の南半分は既に地形が削平を受けていたため、残りの約20m²について発掘調査を実施した。調査地の標高は約73mを測る。

発掘調査は、盛土・耕作土・旧耕土を重機により除去し、それ以下の層は人力により遺構・遺物の検出作業を行なった。

基本層序 調査地の基本層序は、盛土・耕作土、近世から中世の旧耕作土である淡灰色砂質土・淡灰黄色砂質土・淡灰褐色砂質土の順で堆積し、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層である黒褐色シルト層となる。そして黄茶色シルトの遺構面で土坑とピットを検出した。

遺構 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構面では、土坑3基とピット6基を検出した。

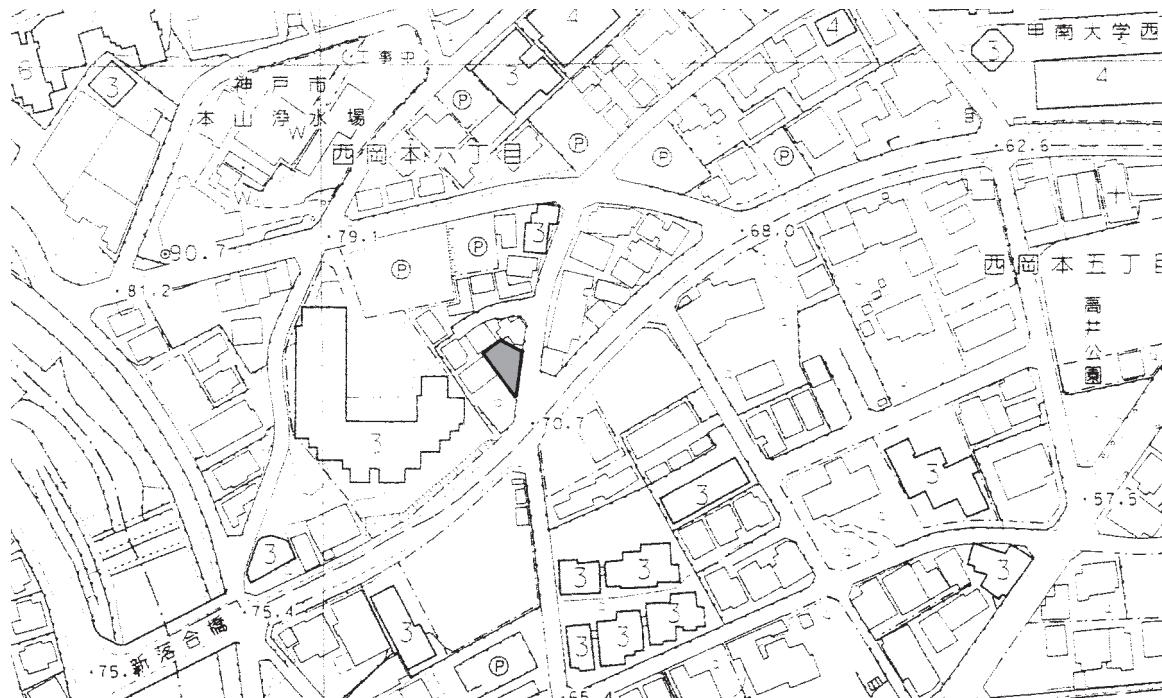


fig.39 調査地位置図 1:2,500

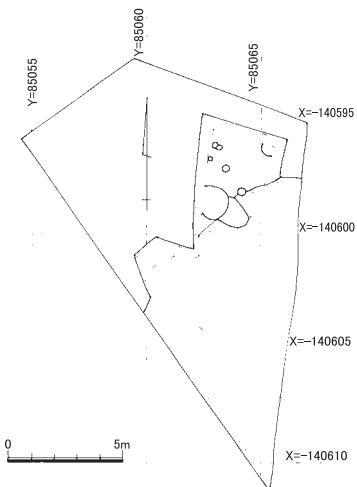


fig.40 調査範囲位置図

SK01 調査区の南端で検出した橢円形の土坑である。土坑は調査区外の西側に広がるため全体規模についてはわからないが、長径1.2m以上、深さ約0.8mを測る。埋土である黒褐色シルトからは、弥生時代後期の土器が出土している。

SK02 SK01を切る形で検出した橢円形の土坑である。土坑の東側2/3以上搅乱されていて全体規模についてはわからない。長径1.4m、遺構面からの深さ約1.0mを測る。埋土である黒褐色シルトからは、弥生時代後期の土器が出土している。

SK03 調査区の北東隅で検出した土坑である。土坑は調査区外の西側に広がるため全体規模についてはわからないが、長さ0.6m以上、深さ約0.2mを測る。埋土である黒褐色シルトからは土師器が出土している。

ピット 6基のピットを検出したが、特にまとまっていない。これらのピットは、径0.2~0.5m、深さ0.1~0.3mである。P03は、黒褐色シルトの埋土から時期不明の土師器片が出土している。

3.まとめ

調査地は、第1次調査地の東側、第3次調査地の南隣接地に位置する。そのため、中世、弥生時代後期～古墳時代初頭、縄文時代早期の遺構が検出されることが予測できた。今回の調査は、調査面積が狭いにも関わらず、遺構が密集して検出された。特にSK01・02は切り合って、垂直ぎみに深く掘られているが使用用途についてはわからなかった。調査地の東側と南側については、車道により敷地より低くなってしまっており旧地形を窺い知れないが、北西から張り出してきている丘陵上に当該期の遺構が展開していたことが調査でわかった。

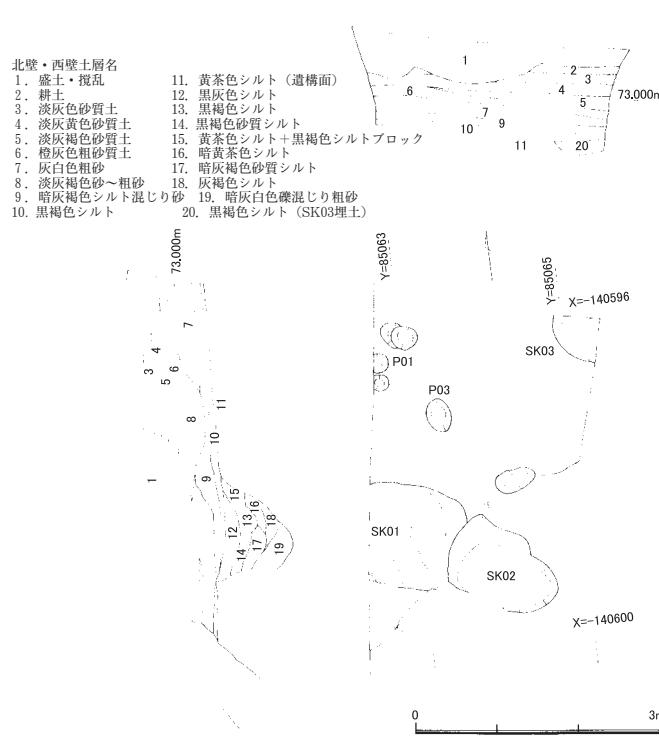


fig.41 調査区平面図及び土層断面図



fig.42 SK01・SK02検出状況



fig.43 調査地全景 (南から)

4. 本山北遺跡 第5次調査

1. はじめに

本山北遺跡は、平成3年に店舗建設に伴い発見された遺跡である。早くから市街地化された地域であるが、損壊を受けながらも弥生時代末～古墳時代初頭と古墳時代後期の堅穴建物がそれぞれ2棟確認されている。その後、数回の発掘調査でも同様の状況が確認されている。

周辺には、古墳時代前期の古墳であるヘボソ塚古墳が存在しており、当該遺跡との強い関連性が指摘される。

2. 調査概要

当該地で先行して実施された試掘調査では、現地表面下0.4mで遺物包含層を確認している。新規建物南端に予定されている深基礎部分（幅3m×長さ5m）が埋蔵文化財に抵触するため、発掘調査を実施した。

重機により盛土・旧耕作土までを掘削し、人力により遺物包含層および遺構の検出・掘削を実施した。従前の建物に関連する掘りこみなどで、調査対象地の半分程度は損壊していた。基本層序は、現地表面から GL-0.3mまでは盛土、GL-0.45mまでは旧耕作土、GL-0.55mまでは褐灰色極細砂（遺物包含層）で、その直下層上面が遺構面となる。

検出した遺構は竪穴建物1棟(SB01)で、調査区が狭小であったことや、攪乱などにより詳細な規模等が不明である。

SB01 床面には柱穴などは認められなかったが、西側のみではあるが壁面・周壁溝を確認しているため、竪穴建物と考えられる。周壁溝の幅は0.2mで、床面には張床などは認められなかった。なお、床面直上で弥生時代末～古墳時代初頭のほぼ完形の壺形土器が1点出土している。断面観察でも上層からの掘り込みなどは認められず、建物に伴う遺物と考えられ、建物廃棄時に置かれていたものと推測される。なお、遺構検出面から床面までの深さは0.25m程度である。



fig.44 調査地位置図 1:2,500

3. まとめ

今回の調査では、周辺の調査成果と同様に竪穴建物を確認し、周辺が弥生時代末から古墳時代初頭の居住域の中心であったことを追認した。また、現況南側道路面がほぼ遺構面となっており、宅地化される中で、当該地周辺は切土など地形の改変が著しいながら、遺構等が残存していることが判明した。

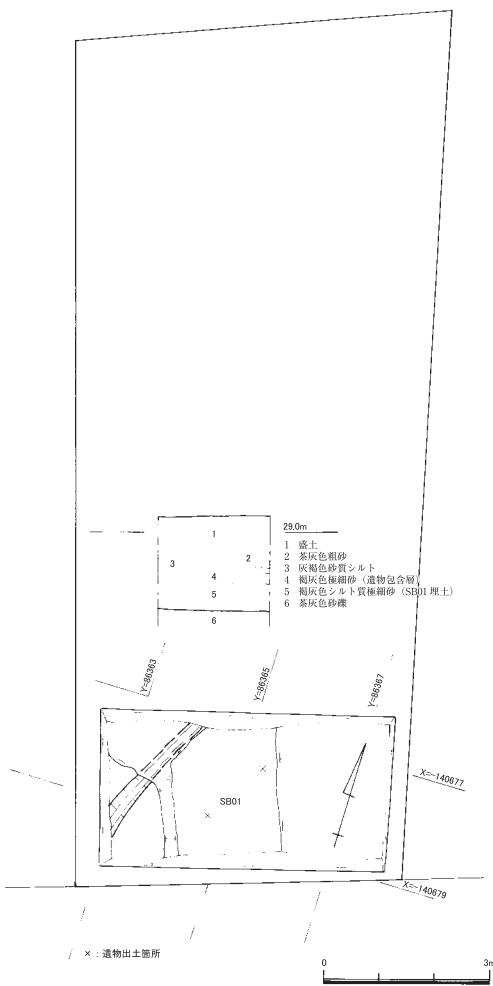


fig.45 調査範囲位置図・調査区平面図
及び北壁部分断面土層図



fig.46 調査区全景（北東から）及び遺物出土状況

5. 本山北遺跡 第6次調査

1. 調査の概要

今回の調査は個人住宅の建設に伴って実施したもので、南側道路に隣接する駐車場部分を対象とした。調査の結果、遺構面を1面確認し、溝、土坑、落ち込みを検出した。

SD01 調査区内を北西から南東方向に流れる溝状の遺構である。北・南側とも調査区外に延びているため全体の規模については不明であるが、検出した規模は、最大幅1.5m、深さ約0.1mを測る。

南端部付近で須恵器・土師器が出土しているが、いずれも碎片で極少量であるため、時期については特定できなかった。

SK01 調査区南端中央で検出した、平面形が橢円形を呈する土坑で、西半部は攪乱によって上部が削平されている。検出した規模は長径0.86m、短径0.73m、深さ0.41mを測る。須恵器・土師器が出土しているが、いずれも碎片であるため時期については特定できなかった。

SK02 調査区北端中央で検出した土坑で、南東部が1段深くなっている。柱穴の可能性も考えられたが、判断材料に乏しく、ここでは土坑として報告する。長径0.73m、短径0.53m、深さ0.05mを測る。須恵器・土師器の碎片が極少量出土している。

SX01 調査区北西隅で検出した落ち込みで、北西側に向かって落ち込んでおり、調査区外へと延びている。西側隣接地で実施された第5次調査では攪乱を受けていることもあり確認されていない。よって本来の形状や規模については不明である。調査区内での最大の深さは0.2mを測る。遺物は出土していないため、時期については特定できない。

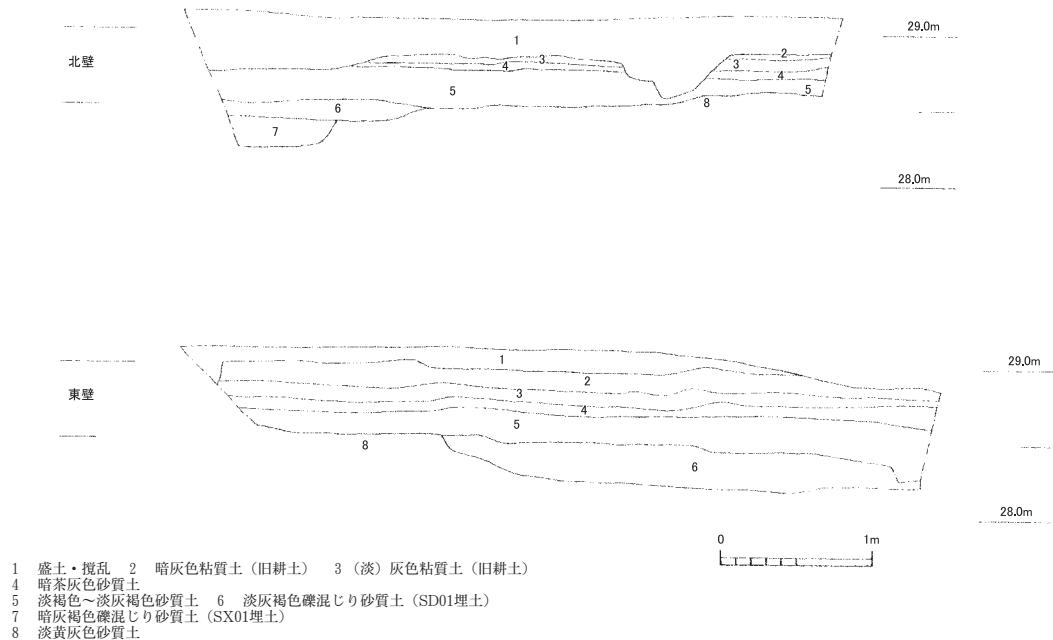


fig.47 調査区北・東壁土層断面図

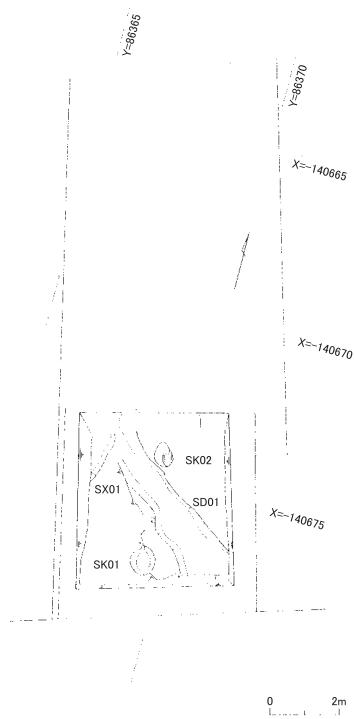


fig.48 調査範囲位置図及び調査区平面図



fig.49 調査区全景（西から）



fig.50 調査区北壁土層堆積状況

2.まとめ

今回の調査では溝や土坑、落ち込みを確認した。SX01を除く各遺構からは須恵器・土師器が出土しているがいずれも碎片で少量のため時期については古墳時代後期以降という以上に明らかにすることはできない。西側隣接地で実施された第5次調査において確認された弥生時代末から古墳時代初頭頃の遺構は確認することができなかったが、今回の調査は対象地の南側の約3分の1程度において実施したものであるため、北側の未調査部分に当該時期の遺構が広がっている可能性も十分考えられる。また古墳時代後期の遺物についても、今回の調査地の北東約60mの地点で実施された第4次調査でも比較的多く出土しているようであり、各時期ごとの集落域の広がりについて今後も的確に捉えていく必要がある。

本山北遺跡の調査は今回の調査が第6次調査であり、徐々に遺跡の概要が知られるようになってきており、今回の調査においても一定の成果を得ることができた。今後周辺地における調査の進展に伴ってさらに成果が得られるものと考えられる。

6. 郡家遺跡 第88次調査

1. はじめに

郡家遺跡は、神戸市東灘区御影町郡家～御影中町に所在する、弥生時代～中世に至る集落遺跡である。遺跡は六甲山南麓の石屋川と住吉川により形成された複合扇状地上に立地している。遺跡の範囲は、南北約1km、東西約0.5kmに広がっており、神戸市域においても有数の遺跡として知られている。

当遺跡については、大蔵地区において規格性のある大型の掘形を持つ柱穴から構成される掘立柱建物群が見つかっており、奈良時代～平安時代において菟原郡衙の有力な推定地として考えられている。

今回の調査対象地は、当遺跡の範囲のほぼ中央付近に位置しているが、調査があまり行なわれていない地区であり、その様相があまり明らかになっていない地区に位置している。

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴って、工事の影響を受ける部分について発掘調査を実施した。調査範囲は、図3に示したとおり調査対象地の大半を占めているが、掘削残土を対象地内に仮置きして実施するため、残土置場を確保しながら4分割（南側より、1～4区と呼称）して調査を実施した。なお、北端部については既存の井戸が2基存在し、その保護のため、掘削を行なえなかった部分がある。



fig.51 調査地位置図 1:2,500

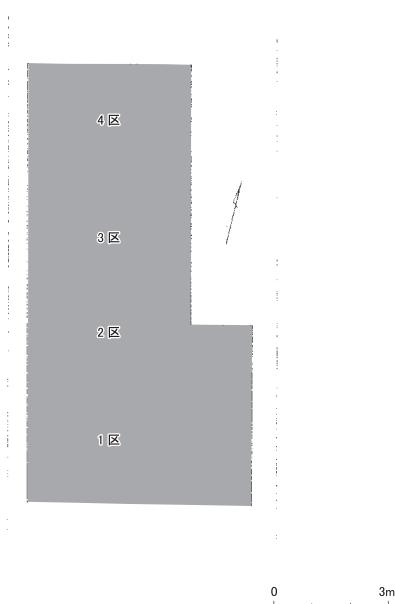


fig.52 調査範囲位置図

調査の結果、1区は全域が既存の地下室にあたっており、遺構・遺物は確認されなかったが、他の調査区では3面の遺構面を確認した。

ただし、3区においては、遺構の掘り込まれた層位について断面観察した結果、第1遺構面の遺構が、第2遺構面よりも上位の土層から掘削されていることを確認したため、fig.54・55にそれぞれ振り分けて図示している。また、2区においては、第1・2遺構面においては遺構が確認されず、第3遺構面において南東側に落ち込む旧地形を検出した。この段落ちよりも北側の調査区において、遺構を検出したことから、この一段高い部分に居住域が広がっているものと考えられる。

第1遺構面 第1遺構面では、3区から4区中央にかけてピット3基を検出したほか、4区全域において東西方向に一定の間隔で並走するスキ溝を

確認している。

ピット 3区から4区にかけての調査区東半部で3基のピット(P01、03、05)を検出した。P01・05は直径約0.2m程度で、深さはP01が0.09m、P05は0.38mを測る。P03は直径0.25m、深さ約0.5mを測る。調査区の東端付近で偏った位置で確認しており、調査区内では掘立柱建物としてのまとまりは認められない。建物を構成する柱穴となるものであれば、その建物は今回の調査区よりも東・北方向にかけて展開するものと考えられるが、全体の様相等の詳細は不明である。P03から須恵器・土師器の小片が少量出土しているが、明確な時期は不明である。

スキ溝 4区で東西方奥に流れる7条の溝を検出した。これらの溝は0.5~0.7m程度の間隔で並走している。現在の土地区画の方向に近い主軸方向を指向している。南端で検出し

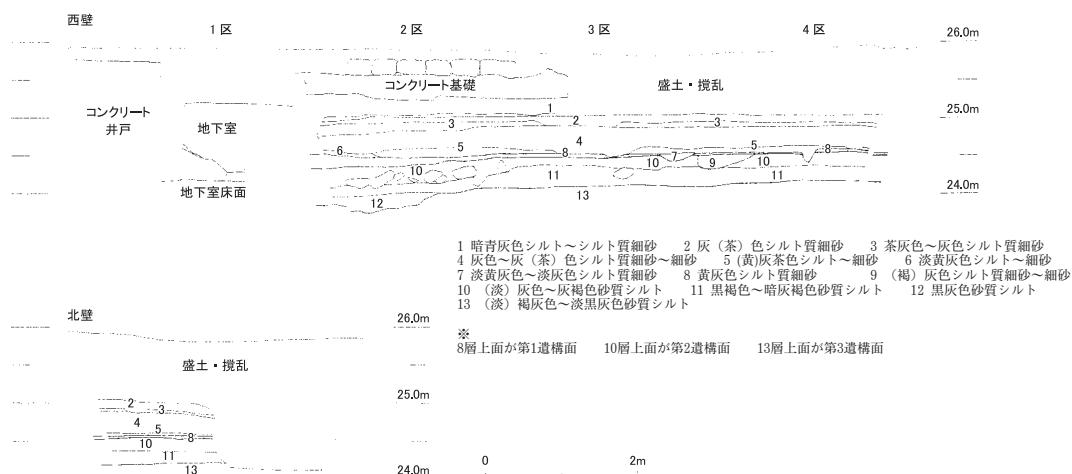


fig.53 調査区西・北壁土層断面実測図

た溝のみ、やや幅が広く、切り合い関係をもち、またやや主軸方向に違いが見られることなどから、他の溝との時期や性格の違いが想定されるが、出土遺物からは判断できない。出土遺物から、古墳時代後期頃の遺構と考えられる。

第2遺構面 第2遺構面では、3区から4区の調査区西半部分でピット3基、調査区南部で並走する溝状の落ち込み3条、その溝状の落ち込みに切られる、土坑状あるいは溝状を呈する落ち込みを検出した。

P02・04 P02・04は長径約0.5m、短径約0.4m、深さ約0.3mを測る同規模のピットで、両者の中心間の距離は、約1.9mを測る。以上の検出状況から、両者はともに同一の掘立柱建物を構成する柱穴である可能性が高いものと考えられるが、今回の調査結果のみでは断定できない。建物であれば、今回の調査区の西側に展開するものと考えられる。P03から須恵器・土師器の小片が少量出土しているが、明確な時期については不明である。

SX01 4区南東隅付近で確認された土坑状あるいは溝状を呈するものと考えられる落ち込みである。調査区の東側に延びているため全体の規模や形状は不明である。調査区内での規模は、幅0.95m、深さ0.11mを測る。遺物は、須恵器・土師器の小片が少量出土しており、古墳時代後期頃の遺構と考えられる。

落ち込み 幅0.25m前後、深さ0.1mの同規模で、北西—南東方向に主軸方向を持ち、並走する3条の溝状の落ち込みを検出した。長さは1m以内の短いもので、第1遺構面で検出したスキ溝とは異なるものである。性格は不明である。

第3遺構面 第3遺構面では、3区から4区の調査区東端部分でピット3基検出した。また3区南端から2区北西隅において南東方向に落ち込む旧地形を検出した。第1～3遺構面全体を通して、遺構はほぼこの落ち込みよりも北側の標高の高い位置で検出していることから、この標高の高い地区が継続的に居住域として土地利用されていたものと考えられる。

P101～P103 P101は、直径約0.4m、深さ0.12m、P102は直径約0.3m、深さ0.16mを測り、3区に隣接して検出している。P103は径約0.25m、深さ0.13mを測

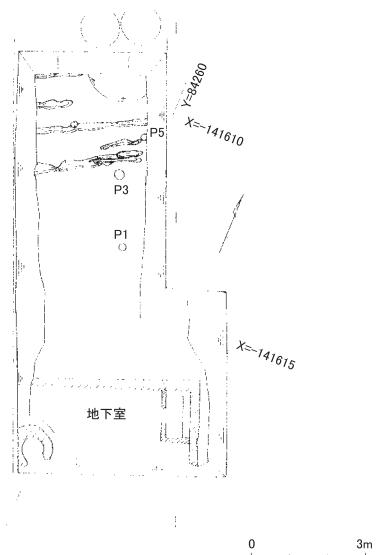


fig.54 第1遺構面平面図

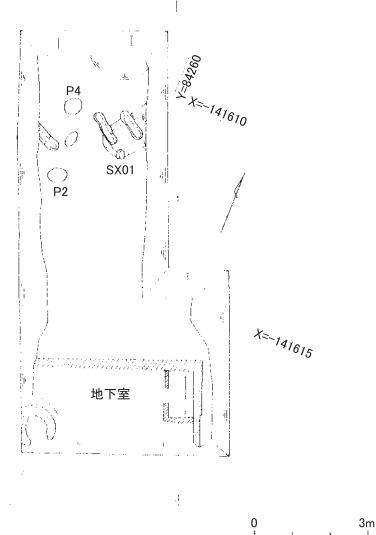


fig.55 第2遺構面平面図

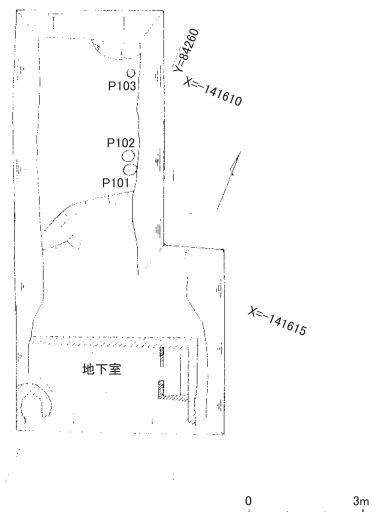


fig.56 第3遺構面平面図



fig.57 3区遺構面全景（東から）



fig.58 4区第1遺構面全景（北から）



fig.59 4区第3遺構面全景（北から）

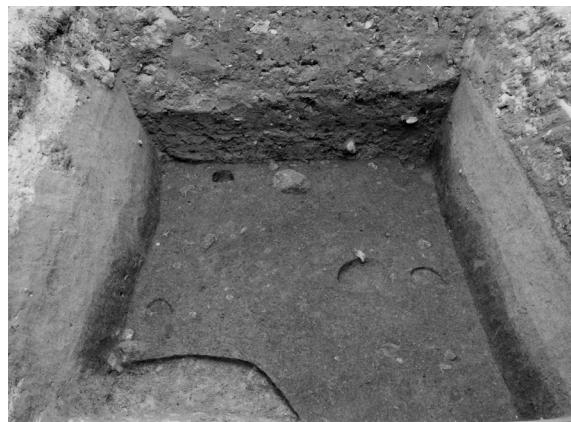


fig.60 4区第4遺構面全景（北から）

り、4区で検出した。

P102とP103の中心間の距離は約2.2mを測る。現段階では3基のピットに調査区内で有機的な関係は認められない。掘立柱建物としてのまとまるものかどうかは、周辺地における今後の調査成果を待って検討したい。P101から土師器片1が出土しているが小片であり、時期については不明である。

3.まとめ

今回の調査では1区においては既存の地下室により埋蔵文化財が失われていたが、2～3区では3面の遺構面を確認し、それぞれ遺構を検出した。また遺物包含層も良好に遺存しており、古墳時代後期を中心とする時期の土器が多量に出土した。

第3遺構面で検出したピットからの遺物は少量のため断定はできないが、土師器のみが出土していることから、須恵器出現以前の時期である古墳時代前期まで遡る可能性も考えられる。第3遺構面の遺物包含層である黒灰色砂質シルト（fig.53-12層）から須恵器が出土していないことも上記の想定の可能性を示しているのかもしれない。遺物は、28ℓ入コンテナ6箱分出土している。大半は遺物包含層（fig.53-10、11、12層）からの出土だが、10、11層からは須恵器壺蓋・壺身・高壺・壺、土師器壺・甕等があり、古墳時代後期と考えられる。12層出土の遺物には平底や丸味を帶びた壺・甕の底部、甕口縁や体部片があり、古墳時代前期頃と考えられる。磨耗が顕著ではないものが多く、近隣に居住域が広がっている可能性を示唆するものである。

7. 郡家遺跡 第89次調査

1. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設事業に伴う発掘調査であり、建物基礎等によって埋蔵文化財が損壊を受ける部分（敷地の半分弱の面積）の調査を行なった。調査は掘削残土の仮置き場の都合で、調査範囲を3分割し、実施した順に1～3区と呼称した。その中で2・3区については建物基礎等の形状からトレンチ調査とし、2区は1～5トレンチ、3区は6～10トレンチにそれぞれ地区割りを付した（fig.61参照）。

基本層位 当該地付近は六甲山南麓の小河川によって形成された扇状地に位置し、標高36m前後を測る。付近の地形は概ね北から南に下がっている。現況は敷地全体に1.5mほどの盛土を行ない駐車場、宅地として利用されていた。その下には近代の耕作土（黒灰色粘質土・暗灰色砂質土）が、さらに下には中・近世の耕作土（黄灰色・黄灰褐色砂質土）が堆積していた。

調査地南半分（2・3区）の下層には古墳時代の土器を含む（茶）褐色砂質土が残存するが、北半分（1区）では後世の耕作により削られていた。遺構はさらにその下層の黄灰褐色～茶褐色混礫砂質土上面で確認された。現況地表面から遺物を含む層または遺構検出面までは、調査地北半分で約-1.8m、南半分で約-2.2m程度である。

1区 調査の結果、古墳時代後期末頃の竪穴建物1棟（SB03）、掘立柱建物1棟。（SB01）、中世の掘立柱建物1棟（SB02）、洪水による土石流路（西端落ち込み）1条、2区で記述する犁溝等を確認した。

SB03 1区東半部で検出された竪穴建物である。北半分は調査範囲外になっているが、3.6m×5m以上の長方形の形状を有すると考えられる。深さは0.2～0.25m残存しているが、床面は遺構検出面下にある土石流の堆積層まで掘り込んでいるため、均一なレベルがとられていない。南東部分の床面の一部を浅く掘りくぼめて、焚火をした形跡があり、焼土と炭化物が確認された。床面には浅いピットが2基確認されたのみで、上屋を支える明瞭な柱穴は検出されなかった。床面近くから出土した土器からみて、古墳時代後期末頃（6世紀末～7世紀初頭）の遺構と判断される。

SB01 1区中央部で確認された掘立柱建物である。梁行2間×桁行4間の概ね南北方向

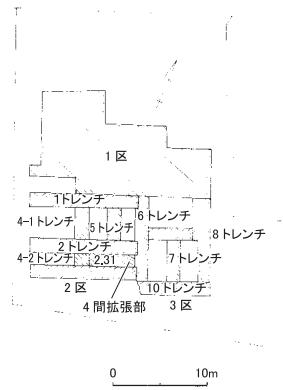


fig.61 調査範囲位置図

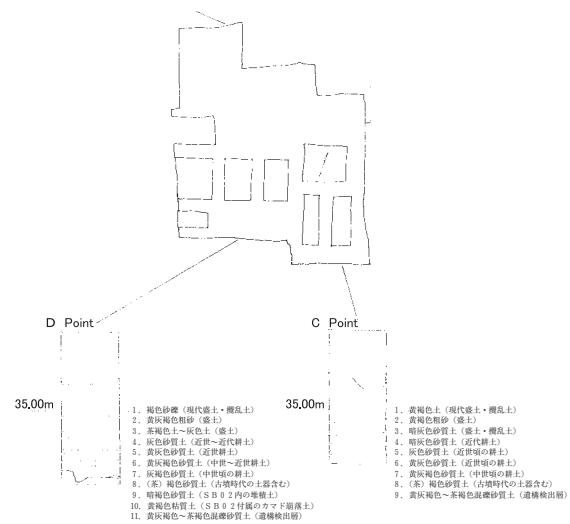
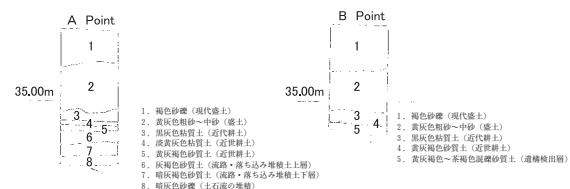


fig.62 基本層序模式図

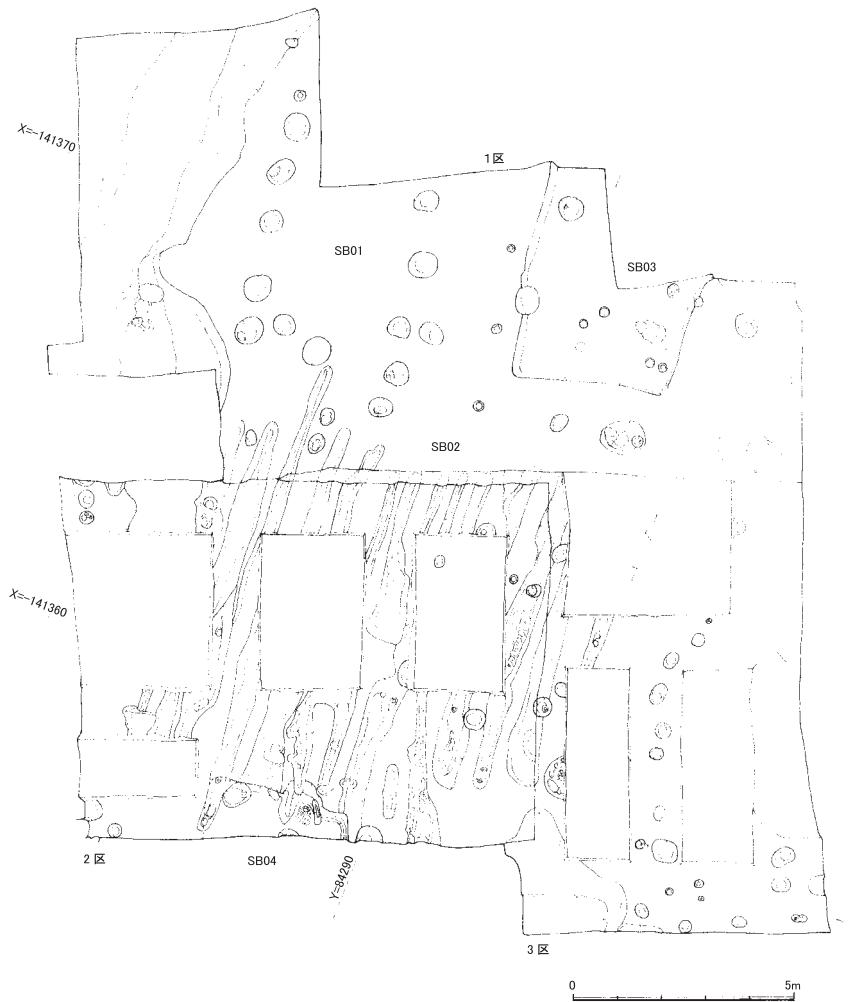


fig.63 調査区平面図

の側柱建物となっている。柱掘形内から出土した遺物は少量で微小なものがほとんどであるため、正確な時期を判定する材料に乏しいが、概ね古墳時代後期末頃と思われる。なお、竪穴建物（SB03）と掘立柱建物（SB01）は建物の棟方向がほぼ同じであるが、距離が2m足らずと近すぎるため、同時存在を想定するのは難しいと考えられる。

SB02 1区東半部で確認された2間×2間の縦柱の掘立柱建物で、柱穴の一部が竪穴建物（SB03）の堆積土を掘り込んで造られている。柱穴の大きさが直径20～40cm程度であり、埋土が他の柱穴と異なる灰色砂質土であるため、明瞭に区別できた。南東隅の柱穴から残存長21cm、幅1.6～3cm程度の小刀（切先と中茎の一部を欠失）が1振り出土した。建物の時期は中世と推定している。

西端落ち込み 1区西端部をほぼ南北方向に流れる流路状の落ち込みが確認された。上層には灰褐色系砂質土が0.4m程度堆積し、古墳時代後期の土器片を含んでいた。下層では粗砂・砂礫・巨礫が厚く堆積し、河川の氾濫による土石流の跡と判断される。

2区 当区では古墳時代後期の竪穴建物（SB04）1棟、畠耕作に伴う犁溝多数、西端部では1区の続きである流路状の落ち込みの一部が検出された。

SB04 2区南端部で検出した竪穴建物で、3トレンチと4-2トレンチでその一部が検出されたため、トレンチ間を拡張して調査を行なった（2・3トレンチ間拡張部）。住居は一辺3.5m程度の大きさがあると思われるが、大半が調査地外に位置し、また西側は後世の

犁溝に削られているため、正確な規模は不明である。北辺の東に偏った部分に $1.1 \times 1.1\text{m}$ のカマドを有する。カマドは上部が崩落して周囲に流れ出し、原形を留めていなかったが、焚口部分と西側の袖の基底部が残存していた。焚口部分には焼土と炭化材、甕の底を支えるために使用したとみられる長さ20cm程度の細長い川原石が立った状態で確認された。

またカマドの西側の床面には薄い炭化材の層が確認され、水洗選別を行なったところ、種実の炭化物や微細な魚骨と思われるものが少量確認された。また、堆積土上面で滑石製紡錘車の破片1点を確認している。これらの出土遺物から、建物の時期は古墳時代後期と考えられる。

犁溝 1区南端および2区から3区東端にかけて、南北方向にほぼ直線で、複数の溝が平行に検出された。幅は0.2~0.8m、深さ0.05~0.3m程度とかなりばらつきはあるが、畠耕作に伴う犁などを用いた痕跡と考えられる。ただし、深いものは排水等の機能を考慮する必要があるかもしれない。

また、溝底に牛馬の足跡状の凹凸があるものも確認されている。犁溝の時期は竪穴住居SB04の堆積土を切る溝があることから、古墳時代後期以後、鎌倉時代以前のものと判断される。

3区ピット群 1区の東端で見出された古墳時代以前の土石流堆積によって調査地の過半が覆われており、検出された遺構は埋土が灰色~黄灰(褐)色砂質土からなる中世耕土層から切り込まれたピットがほとんどである。

限られた範囲のトレンチ調査であるため、建物としてまとめることは見出しえなかった。ピット内から出土した土器片から見ると、概ね鎌倉時代のものと判断される。

3.まとめ

この度の調査では、古墳時代後期の竪穴建物2棟、掘立柱建物1棟、中世の掘立柱建物1棟、時期の詳細が不明な犁溝群、中世のピット群、土石流の痕跡などを確認した。



fig.64 1区全景 (北西から)



fig.65 2区全景 (北西から)

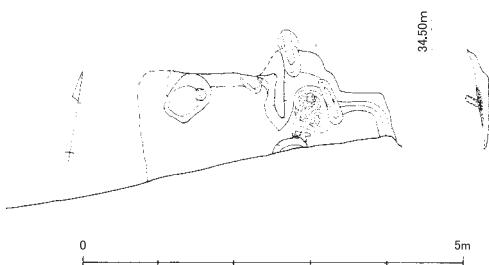


fig.66 SB04平・断面図



fig.67 SB04カマド検出状況 (南から)

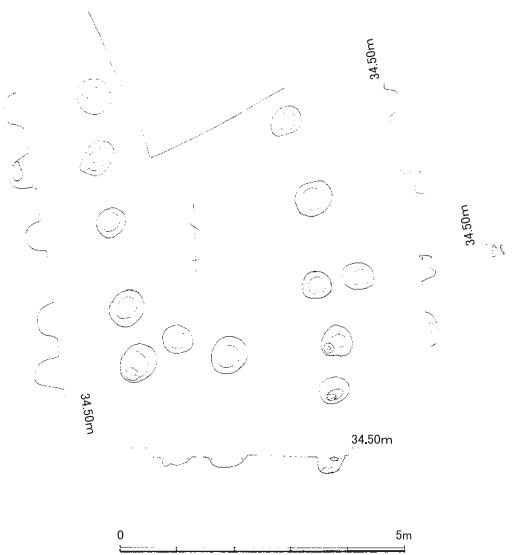


fig.68 SB01 平・断面図



fig.69 SB01 検出状況（南から）

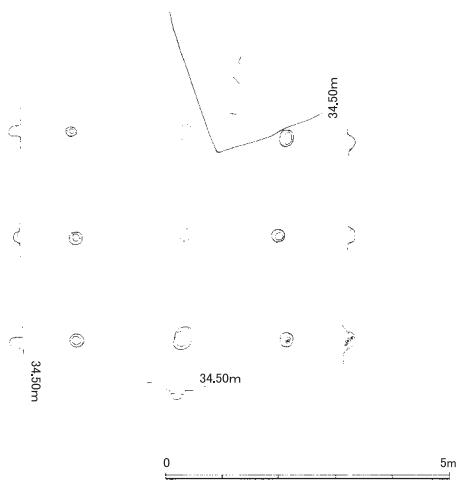


fig.70 SB02 平・断面図



fig.71 SB02 刀子出土状況

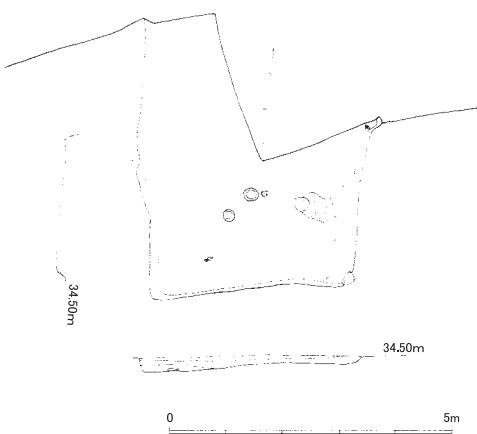


fig.72 SB03平・断面図



fig.73 SB03 検出状況（南から）

9. 住吉宮町遺跡 第50次調査

1. はじめに

住吉宮町遺跡は、昭和60年にJR住吉駅の南西で、共同住宅建設に伴い発見された遺跡である。大小さまざまな調査を重ね当調査が50回目（第50次）の調査となる。

当遺跡は、国道2号線沿いに東西にひろがり東西約800m・南北約600mの範囲の遺跡である。六甲山地から流れる石屋川と住吉川により形成された標高20m前後の複合扇状地上に位置する。弥生時代から中世におよぶ複合遺跡であり、幾度となく繰り返された洪水によって形成された遺跡である。今回の調査対象地は、現状の遺跡範囲のほぼ中心あたりであろう。

住吉宮町遺跡の特徴として昭和60年の第1次調査や駅周辺の再開発事業（第5、9、32次）などで発見された古墳群があげられる。これまでに約80基の古墳が検出されており、近接して築造された古墳群は、まもなく洪水砂によって地上に痕跡を残すことなく埋もれてしまった。

当遺跡内では、この古墳群以前の弥生時代の周溝墓や竪穴建物なども発見されている。また古墳群と相前後する時代の竪穴建物（第9、13次）やさらに新しい時代では、奈良時代の掘立柱建物や井戸（第14、23次）なども発見されている。

なお当調査の成果は、平成25年度に「住吉宮町遺跡第50次発掘調査報告書」を刊行しており、詳細については同報告書を参照されたい。

2. 調査の概要

調査対象地は、前述の第1次調査地の北東約50m、第46次調査地の北側約20mにあたる。市立住吉幼稚園と西接し、南北道路を挟んで東側は、本住吉神社境内である。

発掘調査は、建設工事用土留め工事及び現代盛土層掘削、残土搬出作業などを行なった後に着手した。また建設工事にあわせ調査区域内で北半約330m²と南半約150m²に分けて調査を行なった。

調査の概要 遺構面は2面検出された。第1遺構面では、掘立柱建物1棟、耕作痕、溝状



fig.74 調査地位置図 1:2,500



fig.75 調査範囲位置図

遺構4条、土坑10基、落ち込み状遺構6箇所、ピット59箇所が検出された。他に土石流と考えられる堆積が3条観察された。第2遺構面では、箱式石棺(ST202)を主体部とする方墳1基と箱式石棺(ST201)1基が検出された。他に掘立柱建物2棟、流路状遺構1条、溝状遺構1条、土坑12基、落ち込み状遺構5箇所、ピット72箇所が検出され

た。遺物量は、28ℓ入コンテナボックス11箱、14ℓ入コンテナボックス4箱であった。

基本層序 基本層序は、調査区南半西壁ではアスファルト、碎石(旧駐車場舗装材)、現代盛土(淡黄褐色泥砂、花崗岩碎石、灰色泥砂(旧耕土)、灰褐色泥砂、赤褐色泥砂、茶褐色泥砂、褐色泥砂(第1遺構面)、褐色泥砂、濃赤褐色泥砂、白色礫砂、黄色砂(中央流路、上面が第2遺構面))となる。断面の南側で第1遺構面を切る噴砂が検出された。第1遺構面北半SX102の西北側でも噴砂が検出された。層位からともに同時期の噴砂と考えられる。

第1遺構面の標高は、21m前後、第2遺構面20.6m前後である。第1遺構面と第2遺構面の高低差は概ね0.4mほどである。

東西方向の断面は、南半、北半調査区の調査時の法面となり断面実測を行なうことが不可能であったため、遺構平面図の標高と調査区南半西壁実測図などから東西方向の断面合

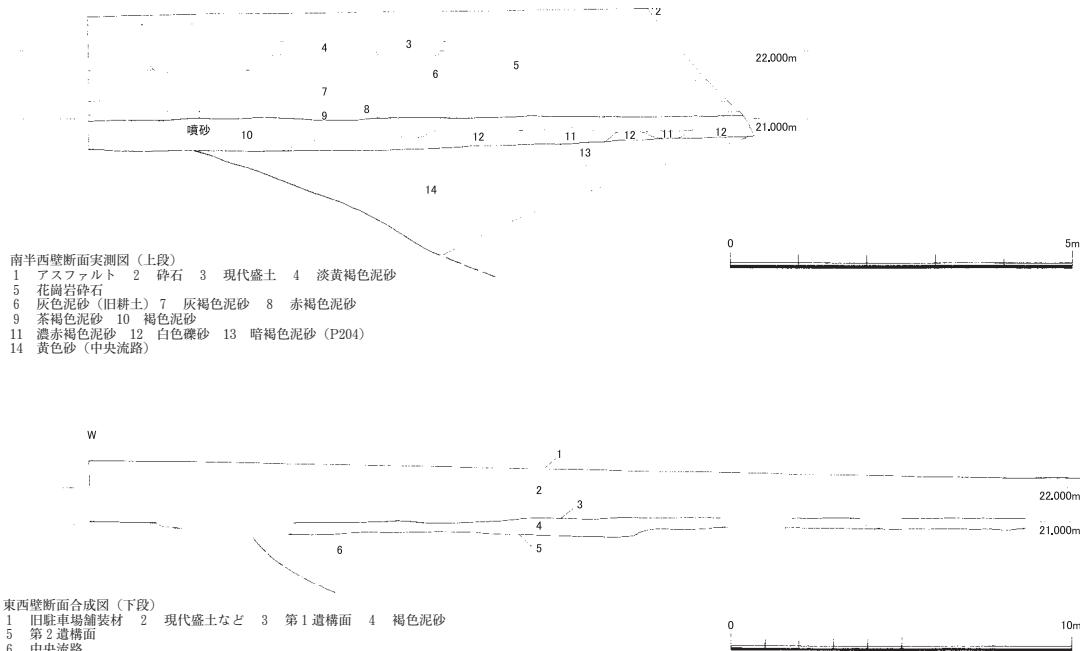


fig.76 調査区土層断面実測図

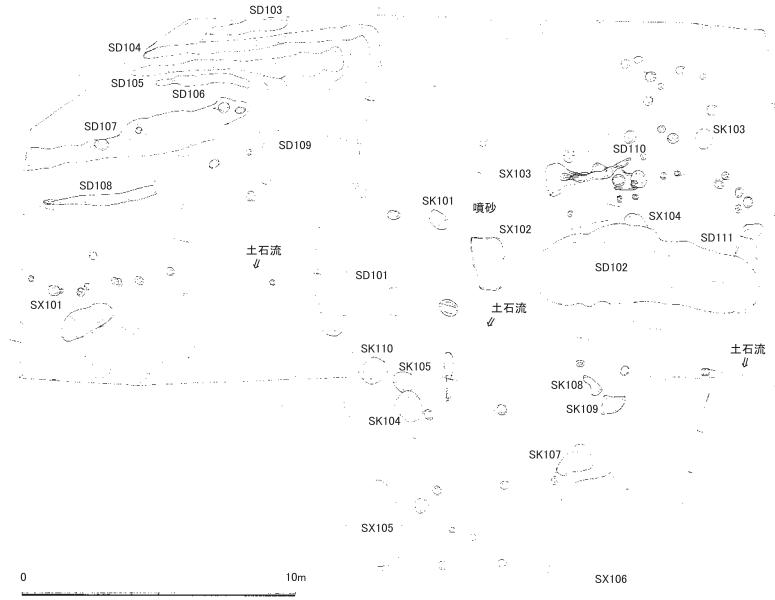


fig.77 第1遺構面平面図

成図を作成した。これらから第1遺構面、第2遺構面は、北から南に、東から西に向かって下がっていくことがわかる。(断面実測図、断面合成図参照)

SD102の底面や北半北東部攪乱坑などを利用して下層の遺構、遺物の有無を確認する作業を行なった。現地表下約4mでは、遺構遺物は確認されなかった。

第1遺構面 検出された遺構は、掘立柱建物1棟、溝状遺構11条、土坑10基、落ち込み状遺構6箇所、ピット57箇所が検出された。

SD101、SD103～109は、東西方向と南北方向に検出された、幅約0.4～1.4m、深さ約0.1～0.2mの耕作痕と考えられる溝状遺構である。少量の土師器、須恵器片が出土した。SD104からは少量の土師器、須恵器片と近世磁器片が出土した。SD101、SD103～109は、近世頃の遺構と考えられる。他にSD101北端部底やSD105東端部底などで、円筒埴輪片が出土した。下層の土石流内に含まれたものが出土したと考えられる。

SD102は、東西8.4m、南北2.8m、深さ約2.2mの規模の遺構である。土師器、須恵器片、近世陶器片、瓦片が出土した。当初は溝状遺構と考えていたが、東西にひろがる近世の落ち込み状遺構である。

SD110は、幅約0.3m、深さ約0.1mの規模で、少量の土師器片が出土した。

SD111は、幅約0.8m、深さ約0.1mの規模で、SD102に切られる。少量の土師器、須恵器片が出土した。出土した土師器皿から15世紀頃と考えられる。

SB101は、南半で検出された1間×2間の掘立柱建物である。東西柱間2.2～2.6m、南北柱間2.8～2.9mである。西南隅とその北側柱穴では、花崗岩の割石が礎石として検出された。SB101を構成する柱穴からは少量の土師器、須恵器片とP150からは鉄釘1点が出土した。層位や建物の形状などから近世頃の遺構と考えられる。

SK101、SK102は、北半中央で検出された東西0.8m、南北0.5m、深さ約0.2mの楕円形の土坑である。SK101からは少量の土師器、SK102からは少量の土師器と須恵器甕片が出土した。SK103は、直径0.7m、深さ0.3mの円形の土坑で少量の土師器、須恵器片が出土した。

SK104、SK105は、南半西端で検出された土坑である。SK104は、SK105を切る。SK104は、東西1.0m、南北1.2m、深さ0.5mの楕円形で、上層から土師器皿、須恵器甕が出土した。SK105は、直径0.7m、深さ0.4mの円形で、土師器、須恵器片と鉄釘が出土した。出土遺物より15世紀頃と考えられる。

SK106は、南半西部で検出された、直径0.5m、深さ0.1mの浅い円形土坑である。少量の土師器片が出土した。

SK107～109は、南半中央で検出された、不定形の土坑である。深さは、0.1～0.3mである。遺構の周辺は、径1m前後の転石によりその形状は、不定形となっている。

SK110は、南半中央で検出された東西0.8m、南北1.0m、深さ約0.2mの土坑である。土師器、須恵器片が出土した。

SX101は、北半東で東西2.0m、南北0.9m、深さ約0.2mの規模で検出された不定形の落ち込み状遺構である。土師器、須恵器片が出土した。中世頃の遺構と考えられる。

SX102は、北半中央で東西1.2m、南北2.0m、深さ約0.05mの規模で検出された方形の落ち込み状遺構である。この直下にSK204・SK206が検出された。またSX102の西側で、南北方向に長さ約1.5mの噴砂が検出された。SX103は、SD110に切られる東西に細長い落ち込み状遺構である。SX104は、SD102に切られる落ち込み状遺構である。SX102～SX104は、SD111と同様の堆積土であることから15世紀頃の遺構と考えられる。

SX105は、南半東で東西2.0m、南北3.1m、深さ約0.7mの規模で検出された不定形の落ち込み状遺構である。土師器、須恵器片と鉄釘が出土した。出土遺物より15世紀頃と考えられる。

SX106は、南半東で東西約4m、南北約5m、深さ約0.1mの規模で検出された落ち込み状遺構である。東側は搅乱を受け、南側は調査区外であるため一定時期の流れ込み堆積と考えられる。

ピットは、57箇所検出されたが散在しており、現状ではSB101以外にまとまるものは見出せない。

第2遺構面 検出された遺構は、古墳1基、箱式石棺1基、掘立柱建物2棟、溝状遺構1条、土坑12基、落ち込み状遺構5箇所、ピットが72箇所検出された。

中央流路より東側ではST201以外の遺構は古墳時代より新しい年代の遺構である。

中央流路東側の主な遺構から述べると、

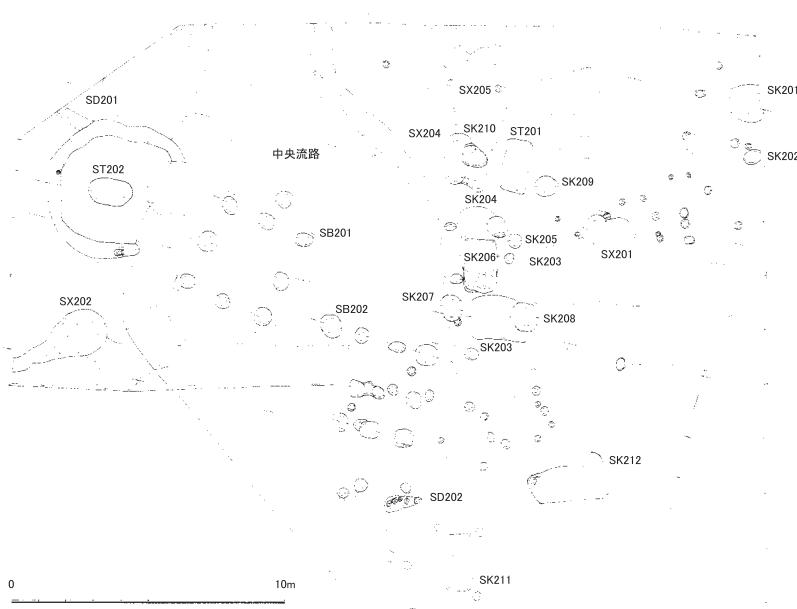


fig.78 第2遺構面平面図

まずST201は、北半中央で検出された東西0.8m、内法0.3から0.4m、南北1.8m、内法1.4m、深さ約0.3mの箱式石棺である。掘形規模は、東西1.0m、南北1.9m、深さ約0.3mである。

北辺は、箱式石棺を構成する石材の中で最も大きな石で小口を形成している。南辺は、南辺を構成する石の東西に東西辺を構成する石で挟んで形成している。東西辺は、概ね台形状の石の長辺を上にして5石ずつ並べ、これに二段目の石を

積んでいる。内部には、径0.2m厚さ0.1m足らずの扁平な石が1個検出された。棺底からは浮いた状態の石で、現状では性格不明の石である。棺内には落ち込んだ石がなく、石材の天端がほぼ水平に仕上げられていることから、木材の蓋が存在したのではないかと考えられる。内部の堆積土壌をすべて現地で水洗作業を行なったが、何も検出されなかった。石材はすべて花崗岩である。主軸は、ほぼ真北を示す。

SK201は、北半東で検出された直径1.4m、深さ約0.5mの円形の土坑である。SK202は、北半東で検出された東西0.6m、南北0.5m、深さ約0.3mの楕円形の土坑である。少量の土師器、須恵器片と鉄製刀子が出土した。両遺構の時期は13世紀頃かと考えられる。

SK203は、直径0.6m、深さ0.3mの円形の土坑で、土坑北側で花崗岩の割石が出土した。この割石には矢穴が一個所あり、長辺0.28m、短辺0.24m、厚さ0.05mの花崗岩である。矢穴石と土師器、須恵器片より15世紀以降の遺構と考えられる。

SK206は、SK204（東西1.4m、南北2.9m、深さ0.2m）の下層に検出された東西1.4m、南北1.2m、深さ0.9mの方形の土坑である。堆積土には焼土、炭が多量に含まれ、径0.1から0.5mほどの石も投棄されたように多く出土した。また土師器、須恵器片と釘多数も出土した。SK204とともに遺構の性格は不明であるが、投棄用の土坑とも考えられる。

SK208は、SX203を切り外径1.1m・内径0.6m・深さ0.4mの規模で、径0.3mほどの花崗岩を円形に組んだ遺構である。遺構内からは須恵器の甕片などが出土した。遺物から遺構の時期は、13世紀頃遺構かと考えられる。遺構の性格については、今後の課題したい。

中央流路は、最大幅約12m、深さ約0.3mの土石流状堆積である。古墳時代の土師器、須恵器片が出土した。この堆積土を掘削するとSB201、SB202などの遺構が検出された。

SB201は、柱間1.6m、2間×2間の側柱建物である。SB202は、柱間東西1.2m、南北1.6m、2間×3間の側柱建物である。それぞれピットからは少量の古墳時代の土師器、須恵器片が出土した。

中央流路西側では、箱式石棺を主体とする丸みを帯びた小型方形墳が検出された。一辺約4mの方形墳で、周溝外径4.8～5.2m、周溝幅0.5～0.6m、深さ0.3～0.4mで断面U字形である。列石、葺石、埴輪列はない。

周溝西辺では、須恵器壊蓋が内側よりにやや浮いた状態で出土した。周溝南辺では、土師器甕が東西方向に横たえた状態で一個体出土した。両遺物内の土壌を現地で水洗作業を行なったが、何も検出されなかった。



fig.79 第2遺構面全景（東から）

箱式石棺は、東西方向を主軸とし、東西1.2m、内法0.8m、南北0.6から0.7m、内法0.3m、深さ約0.25mの規模である。掘り方規模は、東西1.6m、南北1.0m、深さ約0.3mである。

東西辺を一石、南北辺を二石ずつで構成している。蓋石は二石である。石棺の石材は裏込めに用いた一石（变成岩）を除いてすべて花崗岩である。石棺内の土壤をすべて現地で水洗作業を行なったが、何も検出されなかった。

これまでの住吉宮町遺跡での、小型古墳を列記すると、1次調査11号墳（周溝南北外径約5.0m）、2次調査6号墳（周溝東西外径約6.0m、南北約5.0m 長方形墳）、17次調査3号墳（周溝外径2.4m）、8号墳（周溝外径5.52m）などがある。古墳群の構成などについて今後検討すべき課題であろう。

中央流路西側で、古墳以外には溝状遺構（SD201）や不定形な落ち込み状遺構（SD202）が検出された。

ピットは、72箇所検出されたが散在しており、現状ではSB201、SB202以外にまとまるものは見出せない。

第1遺構面と第2遺構面の標高差は0.4mあるにもかかわらず、特に東半に関して遺構に大きい時期差が見出せない。これは、第2遺構面に時間差なく、土石流による堆積物がもたらされた結果と考えたい。



fig.80 古墳検出状況

3.まとめ

今回の調査では、2面の遺構面が検出された。遺構面の間の堆積については、周辺の調査成果を含め、今後の検討課題としたい。

先述したが、第2遺構面の小型方形墳やST201については、古墳群の構成や成り立ちを考えるうえで数多くの課題を示していると考えられる。

今後検討すべき課題も数多くあるが、古墳の発見をはじめ住吉宮町遺跡を考察する上において多くの成果があった。

10. 御影郷古酒蔵群 第5次調査

1. はじめに

今回の調査地は六甲山の南麓に東西に長く延びる沖積地の南縁、石屋川・天神川と住吉川の河口部の東西方向の浜堤上に位置している。

当地は江戸時代の宝暦2（1752）年創業と伝えられる「木村酒造株」の跡地で、灘五郷の内、神戸市に所在する魚崎郷、御影郷、西郷のうち御影郷に位置する。平成7年の阪神・淡路大震災により多くの酒蔵が失われ、これを受けて平成10年度にはこれらの酒蔵群を神戸を代表する近世から近代の生産遺跡（産業遺跡）と位置づけ、埋蔵文化財包蔵地として登録している。

木村酒造㈱も震災被害を受け木造の蔵などが倒壊し、保管されていたダンボール箱10個分の江戸時代後期を中心とする酒造関係・家政関係の文書類約4,000点が、神戸大学大学院人文研究科地域連携センターに送られ、整理作業が進められることとなった。ただし、平成23年現在、史料は神戸市文書館、神戸大学文学部古文書室、伊丹酒造組合に分散保管され、近世文書の一部も木村酒造㈱が保管することとなったと報告されている。

これらの文書史料から近世の古いものに御影からの「出造り」とあり、木村酒造(株)はもと御影の嘉納家と関係を持ち、酒株を譲られて独立し、後に石屋村に転居したのではないかと推定されている。



fig.81 調査地位置図 1:2,500

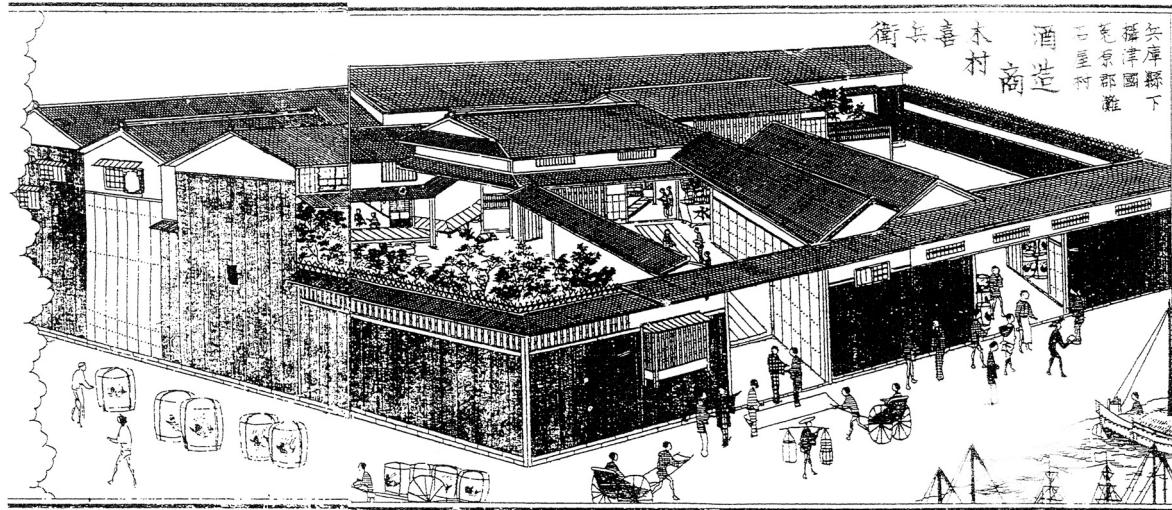


fig. 82 明治17（1884）年刊行『豪商名所独案内の魁』より

さらに石屋村の酒蔵には「内蔵」「西蔵」「東蔵」「新場蔵」及び「川西蔵」等数棟があつたこと、江戸積みの廻船を持っていたこと、天保期には大坂の両替商に余剰金を入れ利益を得ていたことなどが明らかにされている。

また、明治17（1884）年に刊行された『兵庫県下有馬武庫苑原 豪商名所独案内の魁』には「酒造業木村喜兵衛」の酒蔵が「滝鯉」の酒樽とともに掲載されており、木村酒造株が当地の豪商、有力者であったことが確認される。

平成24年、当該地に介護老人保健施設（北半の調査区、I区に該当）の建設及び宅地（南半の調査区、II区に該当）造成の計画があがり、平成24年2～3月にかけて試掘調査を実施しその結果、遺構・遺物を確認した。これを受け、事業者及び関係機関との協議の上、平成24年5月から発掘調査を実施することとなった。

計画された建造物との関係からI区は第2面（最終遺構面・推定江戸期）まで、II区については東西方向の街路部分のみ第2面まで発掘調査を実施する事となった（fig.83）。

2. 調査の概要

<酒蔵及びその他建物の時期的変遷の復元>

調査対象地は搅乱も多く、かつ、現在出土遺物等の整理作業が実施できていないため、ここでは下記地形図などと発掘調査で検出した遺構と

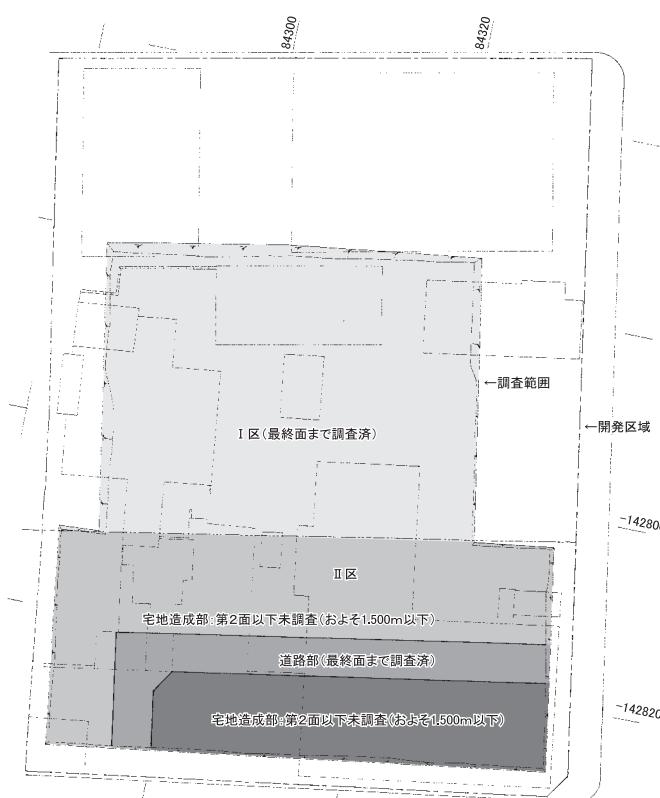


fig.83 調査完了範囲図

を照合し、酒蔵やその他の建物の時代的変遷の復元を以下に試みる。

当該地区の地形図には S=1:10,000、S=1:3,000、S=1:2,500がありその年代は、明治18(1885)年、昭和7(1932)年、昭和45(1975)年、昭和56(1981)年、平成9(1997)年及び平成19(2007)年がある。また、これ以外に前述の明治17(1884)年刊行の『兵庫県下有馬武庫菟原 豪商名所独案内の魁』の絵図(fig.82)、昭和28(1953)年の航空写真、平成24年解体時の既存建物測量図(現況図)なども参照する。

今回の調査地の西に隣接する平成18年度の御影郷古酒蔵群第4次調査地は、木村酒造株の滝鯉塙詰工場跡地であり、元々木村酒造株の敷地内で、酒蔵などが占地していた場所である。以下の記述は今回の第5次調査地を中心とするが、特に明治期以前に関しては第4次調査地にも言及する。

また、以下の記述は現代にも言及するが、復元される複数棟の建物の中で、近世～近代に存在した建物を取捨選択する上でこの作業は必要不可欠と判断したためである。なお、復元できた各建物は少なくともその時点で存在していたことを証明し得るので、創建の年代を示すものではない。

<平成19年時点の建物>

この時期の地形図と一致する建物はSB02・SB09とSB11である。SB02とSB09は平成24年時点にも存在している。SB11はSB10のもとの建物でSB10より一回り大きい(fig.86)。

なお第4次調査地ではこの時、南端の1棟のみ残っていたが、この建物の北辺ラインは江戸末～明治期と推定される石垣ラインと一致している。

<平成24年解体時の既存建物>

平成24年の発掘調査以前には、十数棟の建物が存在していたことが、現況図によって知られる。この既存建物と合致する遺構を今回検出しており(fig.83・86)、SB01、SB02、SB07～10がそれに当たる。このうちSB09はコンクリート基礎の南西隅を検出した。またSB08の南辺は後述する明治期の石垣(第4次調査地でも検出している)の東西ラインに一致しており、このラインが現在まで踏襲され、敷地中央のSB08・SB10など中心的家屋の立地の南端を規定したことを示している。

<平成9年時点の建物>

この時期の地形図と一致する建物はSB02・SB09とSB11で、この3棟がこの時点より存在したことが確認される(fig.86)。平成7年の震災時の航空写真では、SB02の東側にこれとほぼ同規模、同方向の建物が見られ、今回の発掘調査でもこの建物の東辺石列の一部と思われるものを検出したが、それと断定は出来ていない。

また、SB02以前の建物SB13をこれの西側で検出している。SB13は昭和56(1981)年の地形図に記載されていることより、SB02は昭和56年から平成2年までの期間に、SB13と主軸方向を一致させ、やや東にずらして建て替えを行なったものと考えられ



fig.84 I～II区全景(北から)

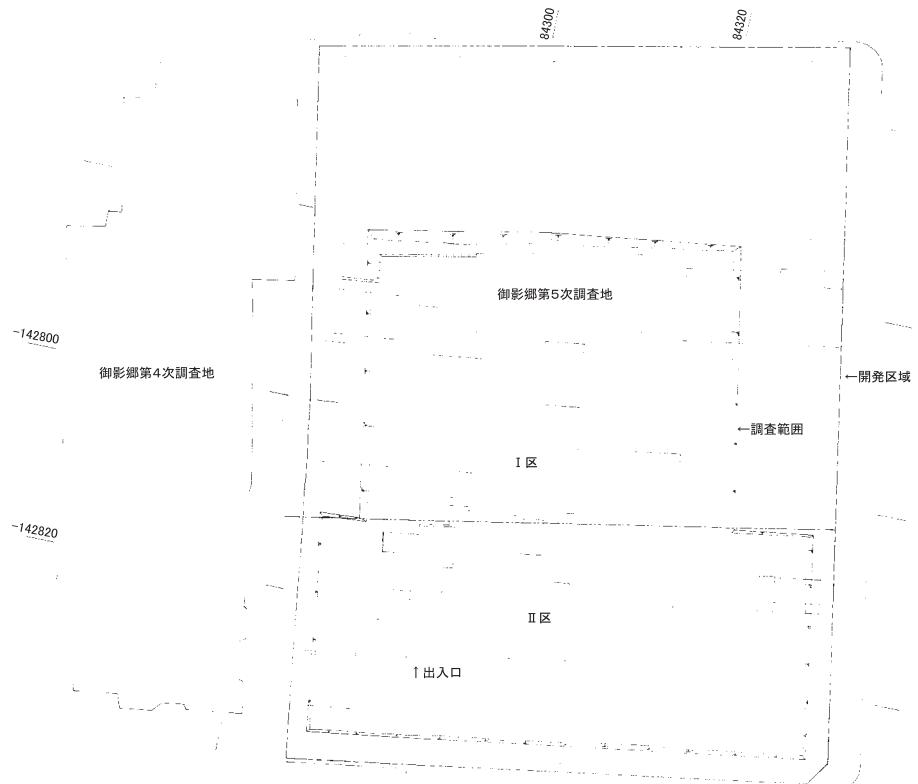


fig.85 平成24（2012）年 解体時現況図

る（SB13は図省略）。この時期の建物は西接する第4次調査地でも検出しているが、当該時期の釜場や槽場などの中心的酒造施設が東西両調査地のいずれに存在したかは、明確に出来ない。

<大正時代～昭和28年ころの建物>

昭和28年の空撮写真を参考に、各建物に使用された煉瓦から得られた時期を考慮し復元したものがfig.86である。ただし空撮写真が明瞭ではなく、推定の要素を多く含んでおり、今後の再検討が必要である。とくにSX02を囲む建物は写真にもなく、昭和28年時点では存在していない。SX02の使用煉瓦からみて、おそらくこれ以前に廃棄されたものと思われる。またSX03の東側は南北方向の細い路地を挟んで、別の街区（屋敷地or緑地）であった可能性が高い。当期に属す建物にはSB03～05、SE02、SX02及びSX03がある。

①SB03 (fig.88) SB03は煉瓦積みの地下室で、内法の東西3.3m、南北2.4m、深さ1.7mで南西隅に4段の階段を設ける。階段内部は煉瓦構造ではなく、土砂で充填される。床面、壁面および階段はモルタルで覆われる。煉瓦の組積法はイギリス積・オランダ積・フランス積などの定式をはずれ、長手を縦に積んだり、平を見せたりとなっている。また西壁最上段には炭滓煉瓦（ASH-BRICK、いわゆる桃色煉瓦ではなく、ボタを含む黒煉瓦）と思われる粗悪な煉瓦を使用している。

壁体を解体し統計処理の対象とした計1,365個の煉瓦のうち、赤煉瓦については60%以上が岸和田煉瓦株式会社と大阪窯業株式会社製のもので、前者のうち50%以上は機械成形によるものである。大阪窯業株式会社製煉瓦及びその他の赤煉瓦はすべて手抜き成形煉瓦である。

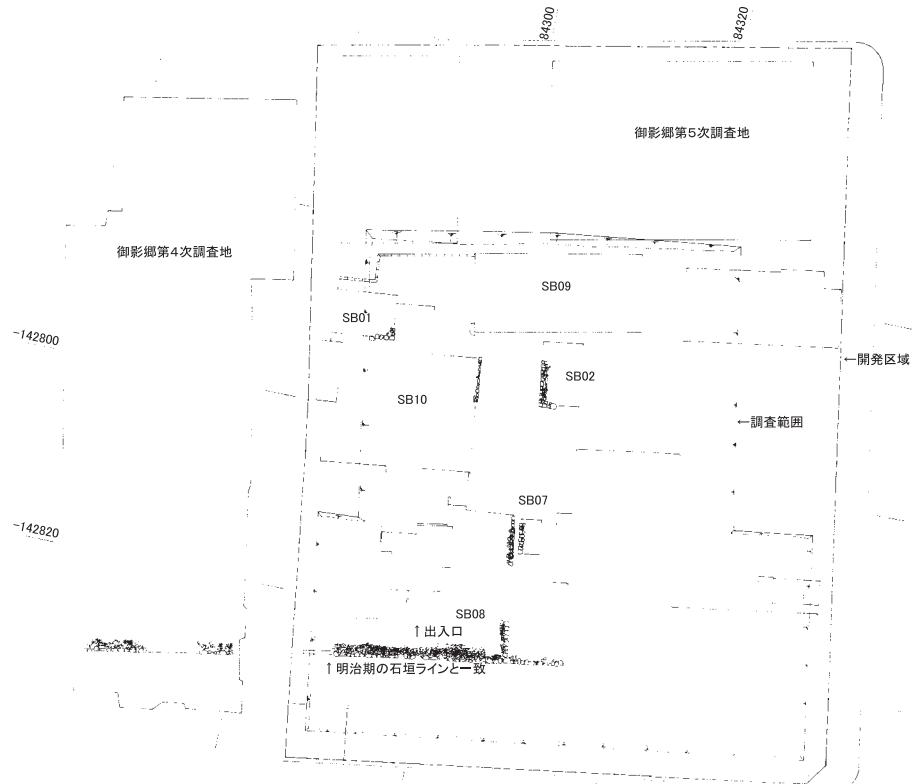


fig.86 平成24（2012）年 解体時既存建物と合致する検出建物

壁体には少量の耐火煉瓦を含む（約4%）。このなかには三石耐火煉瓦株式会社製のものと共に、「STAR-BRICK」の刻印を有するものがある。「STAR-BRICK」は大正5年、H. S. 耐火煉瓦製造所として創業し、昭和5年三石星煉瓦製造所、昭和11年三石星煉瓦株式会社、昭和40年ホシレンガ株式会社となり現在も続く会社の製品と考えられるものである。出土した耐火煉瓦がどの時点のものか断定は難しいが、「H. S. FIREBRICK ☆☆ MITSUSHI」銘のものは既に知られており、出土した煉瓦はH. S. 耐火煉瓦製造所時代のものではない。同社は昭和28年にJIS表示許可を得て製品にも「④」マークを印刻するようになるが、出土煉瓦にこの表記がないことから、昭和5年以降28年以前の三石星煉瓦製造所・三石星煉瓦株式会社製の煉瓦と考えておく。三石窯業株式会社は廃業年次が不明であるが大正5年の創業である。炭滓煉瓦（黒煉瓦）も山口県宇部では大正期に製造されていたことが報告されており、耐火煉瓦の年代観とも齟齬はない。

社印など		個数	%	備考
普通 煉 瓦	岸和田煉瓦（株）	555	40.66	内、50%以上が機械成形
	大阪窯業（株）	312	22.86	全て手抜き煉瓦
	岸和田・大阪以外 + 櫛描文	17	1.25	全て手抜き煉瓦
	櫛描文のみ	65	4.76	全て手抜き煉瓦
	○○○印	5	0.37	社印？全て手抜き煉瓦
	社印ナシ	356	26.08	
耐 火 煉 瓦	☆☆STAR-BRICK MITSUSHI		2.27	三石産
	三石耐火煉瓦株式会社④	15	1.10	
	<MO> MITSUSHI	6	0.44	
	三石窯（業株式会社）	1	0.07	
	○印	1	0.07	
	M A [F]または[R]…	1	0.07	
	計	1365	100	

表15 SB03出土煉瓦一覧表



fig.87 I区 SB03検出状況（西から）

ど残存していなかったが、階段部と推定される。東壁は破壊されているが、北、西壁は切石で構築し、南壁は明治期以前に築かれたと思われる石垣のラインに合わせ、石材も面を北側に反転し、これをを利用して築かれたと推定される。床面は検出時点では砂面となっていたが、南壁及び西壁壁面の下部（T.P1.5m）に水平に漆喰が帶状に付着し、本来床は漆喰が張られていたと考えられる。壁体の目張りは漆喰によるが、南壁の下端にはタタキが見られる。

③SB05 SB05はI区の北西部で検出した、切石積の地下室であるが、搅乱によって大きく破壊され、南東隅の一部を残すのみである。検出規模は東西約2m、南北約2.5mである。床面は細かい碎石が敷き詰められ、南東隅に漆喰で構築された方形の会所状遺構（水溜？、用途不明）を確認した。内法の一辺0.4mである。

SB05の北側の搅乱坑内には多量の海鼠瓦が含まれていたが、これを当該建物に使用されたものと考えるなら、時期的に溯源明治30～40年代に属する可能性がある。

④SE02 SE02はSB04の南側で検出した、井戸枠に加工石材を使用した井戸で、内径0.6mを測る。深さはT.P0.6mまで確認したが、崩壊の危険から底部の構造及びレベルは未確認である。石組みは5段分検出したが、下に少なくとも2段以上存在する。井戸の掘形は径約2mを測る。

⑤SX02 (fig.90) SX02はI区東辺

ただし、耐火煉瓦のなかで三石耐火煉瓦株式会社製のものや、赤煉瓦の中には、明治時代後半頃と考えられるものを含むので、SB03は、明治期に既に集積されていた建築材を、昭和に入ってから新しい時期の材料と共に利用し構築したとも考えられる。

②SB04 (fig.89) SB04はSB03の西側で検出された切石積の地下室で、内法の東西3.5m、南北3.4m、西壁やや北寄りに長さ約2mの突出部を設ける。突出部に石材は殆

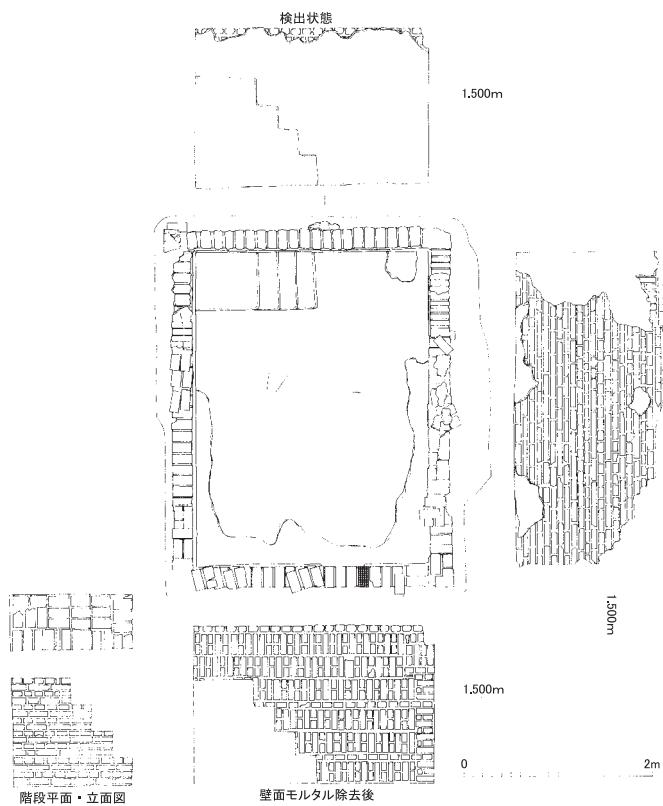


fig.88 SB03平面・立面図

で検出した特殊遺構で、用途などは不明である。基本的には地下室の構造で、南北両側に口径及び深さ約1.9mの桶を横倒しにして埋置し、桶内部の下部は板材を架構して水平な床面を作る。桶の構成材は残りが悪いが、口縁部に金属製の箍が一条、底部付近に3条残る。桶の口縁部には、炭滓煉瓦（黒煉瓦）を積み上げたモルタル塗りの薄い壁が立てられていたようだ、基底部分の一部が元位置を保って、また壁体の一部がSX02の埋土内に残存していた。桶上部を覆う構築物は検出されず、単純に埋め戻したものと推定される。

2つの桶の間はモルタル貼りの東西方向の通路で、幅0.8m、長さ2.1mを測る。通路の両側は階段となっており、いずれも南側の地上に続く。地上までの高さは1.7mである。通路と階段の境には南北方向の敷居状の板が置かれている。断面の形状は通路側が高いL字状を呈している。階段と通路の間の仕切り板を立てるための構造とも思われるが、使用法を含め不明である。

モルタル塗りの階段それ自体の構造材は確認できていないが、階段を囲む壁体は炭滓煉瓦（黒煉瓦）である。階段内側の壁体の基底ラインは水平ではなく、階段の傾斜に合わせて地山（海砂）上に構築されている。

なお、SX02は使用の途中で、両階段が最下部から1.2mまで埋められ、通路側に面を向けて小壁が立てられる。モルタルが通路に向く面のみに塗られる。おそらくこの小壁設置後、階段は完全に埋められたものと思われる。階段が使用できなくなつた後、どのように通路に下りたか、埋桶をどのように利用したかは不明である。SX02の廃棄なら階段を先に入念に埋める事は必要ではなく、その行為の意味は不明である。

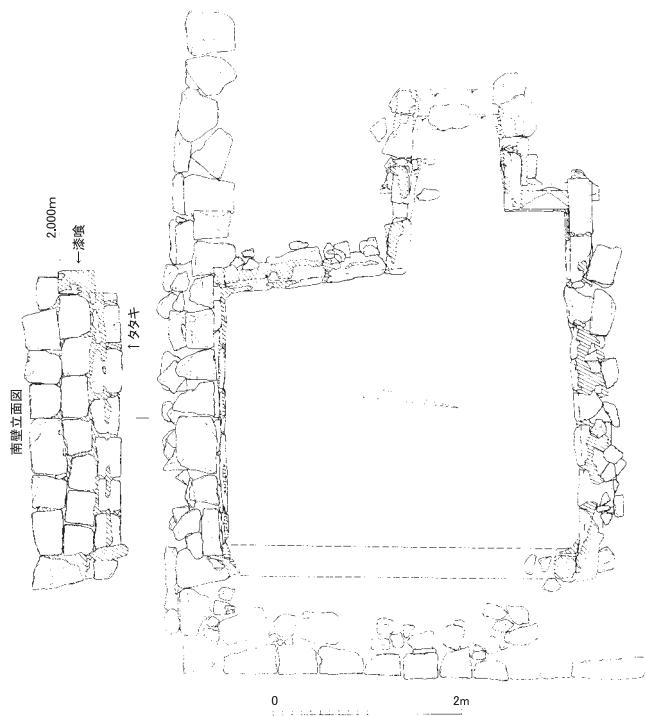


fig.89 SB04平面・立面図

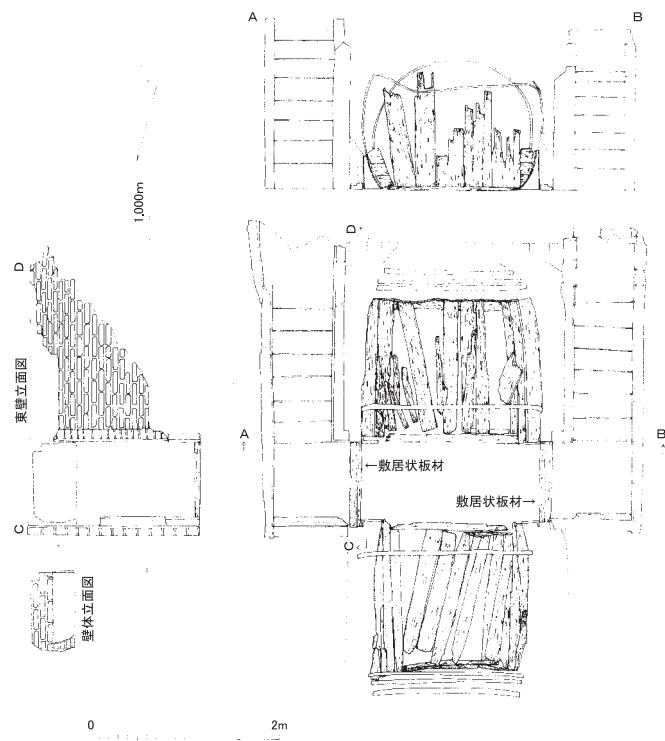


fig.90 SX02平面・立面図

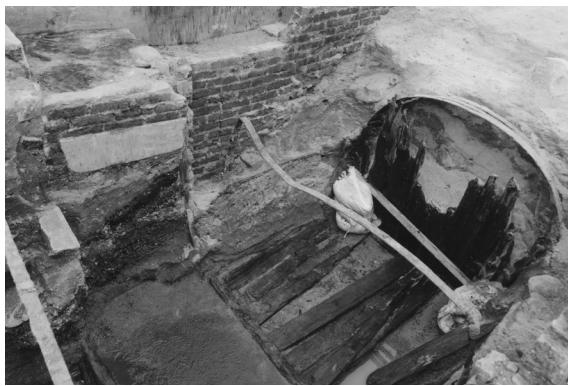


fig.91 SX02検出状況（西から）

うち機械成形煉瓦が約半数存在することはSB03の煉瓦と様相は基本的に変わらない。よって炭滓煉瓦や耐火煉瓦は含まないが、SB03、SX02などと時期的には大差ないものと思われる。

<明治17年～明治30年代ころの建物>

fig.92は明治17年刊行の『兵庫県下有馬武庫菟原 豪商名所独案内の魁』の絵図（fig. 82）を元に、第4次調査地で検出した煉瓦積の釜場遺構の年代観を考慮して、推定復元したものである。絵図は元より正確なものとは言えず、掲載された書籍の両頁にわたる絵も、完全に左右で接合しないが、復元した建物配置図を提示しておく。

絵図によれば、第4次調査地に計3棟、第5次調査地に計6棟の建物と両調査地にまたがって1棟（SB05）の建物が描かれる。



fig.92 明治17（1884）年～明治30年代頃

⑥SX03 SX03はⅡ区の南東隅付近で検出した、南北方向の通路状遺構である。幅1mで長さ5mを測るが、北端は搅乱により破壊され、全長は不明である。両側に煉瓦が2～3段積まれるが、本来の段数はわからない。

壁体を解体し統計処理の対象とした計88個の煉瓦のうち、無印のものが半数あり、あと25%を大阪窯業株式会社製、16%を岸和田煉瓦株式会社製が占める。後者のう

第5次調査地には東西方向の建物が3棟北半にあり、その南側に南北方向の建物が並列して描かれる。敷地南東隅には、門と一体で建てられた蔵建物（SB06）があり、内部に酒樽が見える。

第4次調査地には東西方向の建物が南北に並び、敷地南西部は庭園となっている。検出遺構と照合すれば、北端の蔵に「槽場」が、その南の中央の蔵に「釜場」があったことになる。ただし、明治17年段階では北端の蔵に「槽場」と「釜場」があったと考えられる。釜場の使用煉瓦から、その後明治30年代になって、「釜場」が南の蔵に構築されたと考えられる。煉瓦煙突が絵図の中央の蔵の屋根に見られないのは、推定の1つの根拠となる。

①SB05 両調査区にまたがってあるSB05の詳細については、明らかでない。前述のように、SB05の北側の搅乱坑内の海鼠瓦がこの建物に伴うと見るならば、当該時期に構築されたものと推定される。

②SX01 SX01は東西4.5m、南北9m以上、深さ約0.7mの地下室状遺構である。北端は破壊され、南北方向の全長は不明である。昇降施設は検出していない。これを内部に取り込む建物を復元したが、規模等不確実である。なおSX01は埋め戻され改修されつつ、昭和期まで機能していたと思われるが、詳細は不明である。底面より板材が部分的に出土し、本来板敷きの床であったと思われる。

③SB17・18 SB17・18は主軸を南北に向ける建物で、南辺は敷地南端の東西方向の石垣ラインと一致させている。両建物の間に南北方向の石列があり、2棟は中央の壁を共有していたとも考えられる。

④SE02 SE02はSB17の北側にあり、この時期にすでに機能していたものと考えられる。明治17年刊行の絵図には、ここに防火水槽と桶が描かれ、この推定を裏付けている。

⑤SB06 (fig.93) SB06は内法で東西・南北約6m、深さ1.6mの地下室状遺構である。北、西、南壁は破壊を被り残存状態が良好ではない。床面のレベルはT.P0.6mで湧水が見られた。床面の保存状態は良くないが、上面で炭の薄い層を検出した。また0.1m下に漆喰のやや疎らな層が見られた。使用石材は長方形の切石で、長さ1mのものも含んでいる。目張りは基本的に漆喰で、上面を漆喰と土を混合したもので覆っていた。石垣下部の目張りは一部粘土による箇所が確認された。

床面の東南隅で石臼の未成品と見られる、円形の石材が3点出土している。昇降施設は確認していない。

⑥敷地南辺の石垣 敷地南辺を区切る東西方向の石垣は当該時期に構築されたものと考えられ、西方の第4次調査地に続いている。ただし第4次調査地検出のものは、基本的に長方形に加工した切石積であるが、第5次調査地出土のものは自然石の一面のみ加工した割石で構築されており、若干の時期差を含むものと推定される。

⑦土管列 敷地南辺を区切る石垣の南側で、南北方向の土管列を検出した。検出順に東から土管列1、中央のものを土管列3、西端を土管列2とした。土管列1と3及び2の北半は使用している土管が共通し、土管列2の南半がこれと異なる。前者は手作り、後者は機械成形と見られる。いずれも刻印などではなく、常滑産ではなく近辺での製品と思われるが、現在その産地は明らかではない。

土管列1はSB06・SB19の東側を南北方向に走るが、SB06の東の土管列を超えた場所で、街区を画すると見られる石垣を検出したことから、土管列1は街区の境界線に沿って

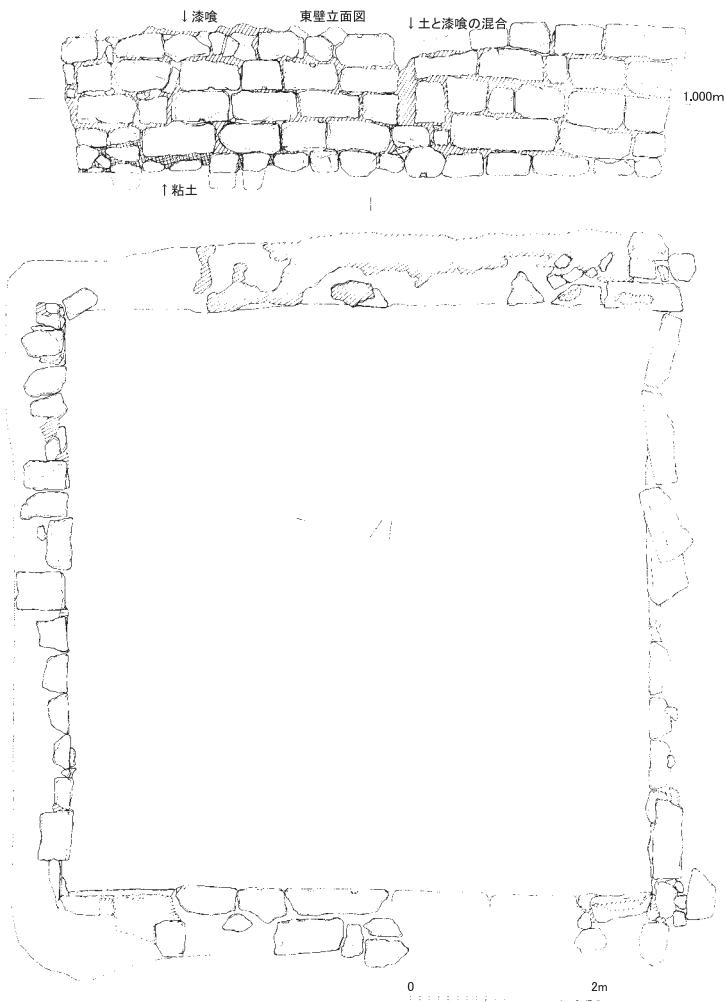


fig.93 SB06平面・立面図

設置されたものとも解釈される。土管列1は一本のみ土管列2南半と同じものを使用しており、口径の違いから設置時に生じた間隙部を井戸瓦で塞いでいた。井戸瓦の小口には「東明瓦菊」の刻印がある。

また土管穿孔部を塞ぐため、平瓦を用いた箇所がある。この平瓦の年代は明治末から大正期と思われる。平瓦は土管設置後で、また一定期間を経た時点でのものであることは明らかで、これより土管列は明治期に入るものと推定した。なお、第5次調査地のSB19・SB20に関しては、絵図になく明治17年以降のものと思われる。

<江戸時代末～明治時代前半期 ころの建物>

第5次調査地で江戸時代の遺物は出土しているが、現時点で当該時期と確定できる遺構は少

なく、井戸及び石垣の一部のみである (fig.94)。

①SE02 SE02は直径約1.7mの素掘りの井戸である。崩壊の恐れから底部を確認していないが、深さは2m以上と考えられる。SE02はこの後埋められ、北に寄せて石組みの井戸を構築している。

②石垣 II区西端で検出したもので、残存状態が悪く、東西約1.5mのみ確認した。第4次調査地にもこれと方位を一致させる石垣を検出しており、位置関係から見てこれと同一のものと思われる。

この時期の遺構は第4次調査地に集中する。北側に東西方向の酒蔵が2棟並び、南の蔵に釜場、槽場がある。その南は中庭で中央に井戸がある。庭の南に東西方向の半地下室を持つ建物があり、南端の石垣がその南約10m離れて築かれている。

<江戸時代後期以降の建物>

この時期の遺構も第5次調査地では少ない。I区西辺部で素掘り井戸とその南約15m離れて東西方向の石垣があった (fig.95)。

①SE01 SE01は直径約3mで、深さは1.5m以上である。埋土土層の状態から有機質の井戸枠があったものと考えられる。

②石垣 この石垣は当該時期に構築されたものと推定されるが、大正期にもSB04の南壁の一部として利用される。ただし西接する第4調査地ではこの石垣の延長ラインで検出さ

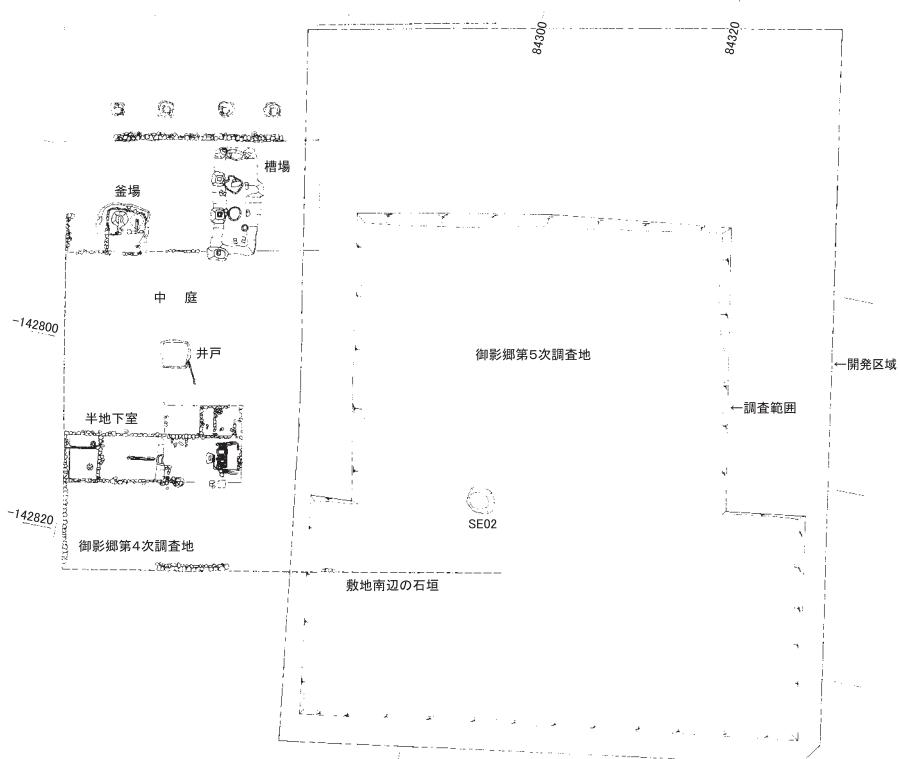


fig.94 江戸時代末～明治時代前半頃

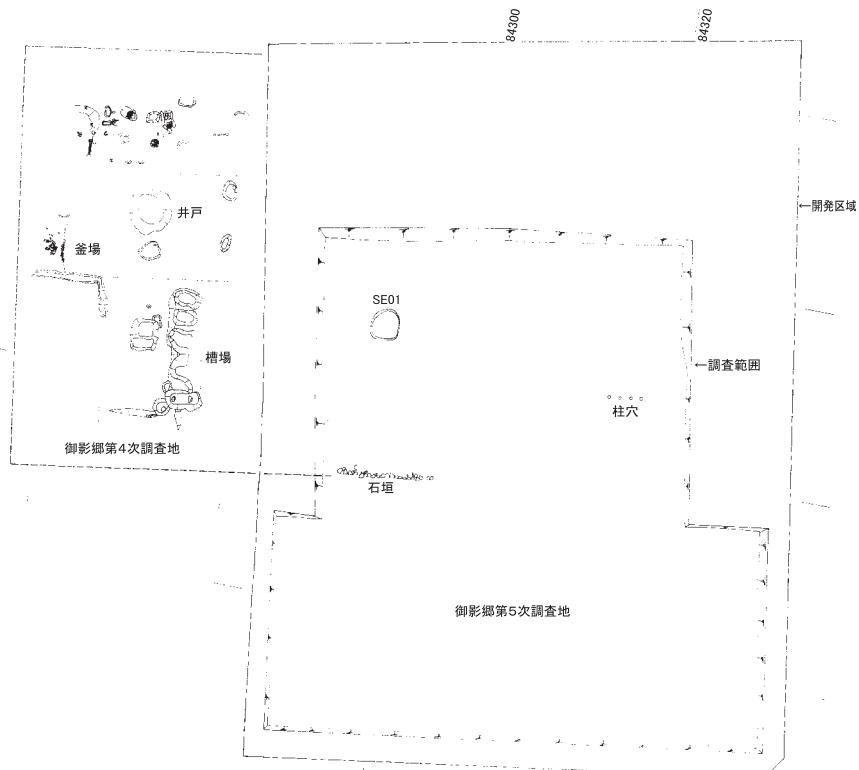


fig.95 江戸時代（18世紀中頃以降）

れず、部分的なものだった可能性もある。

また、I区東辺で東西方向に並ぶ計4基の柱穴を検出したが、性格は不明である。

この時期の遺構も第4次調査区に集中しており、釜場、井戸や槽場などが見られる。江戸時代の木村酒造株の実態は明らかにしえないが、所蔵文書には前述のように「内蔵」「西蔵」「東蔵」「新場蔵」及び「川西蔵」等が記されており、第4次調査地・第5次調査地で検出した遺構の範囲を、大きく超える規模を有していたことも、十分考えられる。

文書にある「川西蔵」が旧の御影町石屋字川西の地名と関係があるならば、現在ここは石屋川を越えた西側の御影塚町に相当する場所で、本来の木村酒造株が西へ広がっていた、あるいはその地域にも酒蔵を所有していたということも想定する必要があるものと思われる。

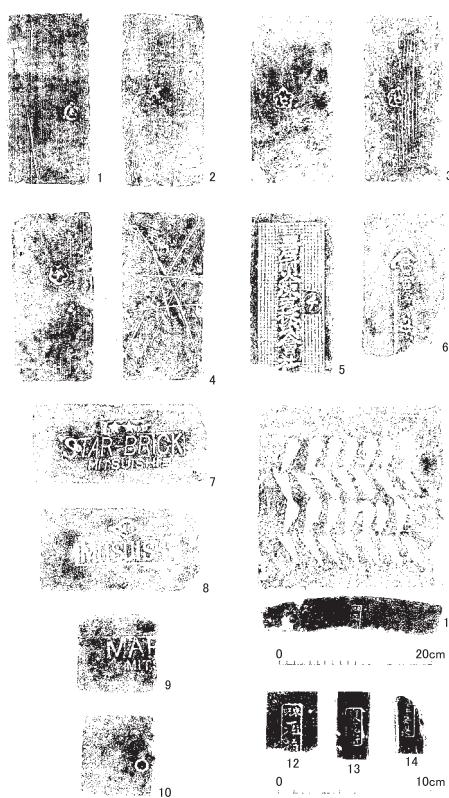
3. 出土遺物

出土遺物には近世～近代の陶磁器類、屋根瓦（「東瓦宗」の刻印を有するものを含む）、井戸瓦、海鼠瓦、土管、ガラス瓶、煉瓦、銭貨を含む金属器、石臼未成品や槽場の掛け石を含む石製品、幕末の敷瓦（タイル）、版木（酒瓶のラベル用？）、貝殻、土製品のほか、文書類（明治期の帳簿？、業界新聞、名刺など）などがある（fig.96）。既述のように現時点で整理作業などが実施できておらず詳細に関しては報告できないが、瓦類のうち、fig.96-11・12は土管列1に使用された井戸瓦で「東明瓦菊」銘がある。「東明」は石屋川を越えた西側の地区で、ここに瓦屋があったことが判明した。fig.96-14はSB02検出中出土のもので、「櫻井安製」の刻印がある。昭和2年刊の「日本瓦業総覧」には明石郡大久保村八木に櫻井安太郎の名前が記載され、この瓦が明石から搬入されたことが分かり、当時の生産・流通の実態を知るうえで資料となるものである。

4. まとめ

平成18年度の御影郷古酒蔵群第4次調査と今回の第5次調査で、江戸時代から続く木村酒造株の本来の範囲の大部分について、発掘調査を行なったことになる。調査によって得られた成果から、江戸～明治時代前半期では第4次調査地に中心があったが、年代が下がるにつれ、東と南側に敷地が拡充されていったことが推定できるようになった。江戸時代の文書に登場する「内蔵」「西蔵」「東蔵」「新場蔵」及び「川西蔵」の位置に関して不明な点が多いが、それ以後、現代に至るまでの大略の流れは把握できるものと考えられる。ただし、より正確な建物の変遷の復元は、今後の出土遺物や古文書を含む関係資料の検討が必要不可欠である。

当該地区の有力豪商であった木村酒造株の具体相を明らかにすることは、神戸の基幹産業の1つである酒造の発展過程を解明する上で大きな位置を占めており、今回の発掘調査はこの意味で多くの史料を提供することができ、非常に有意義なものだったと考えられる。



1～10：I区SB03出土煉瓦 11：II区土管列1 使用井戸瓦
12：II区土管列1 使用井戸瓦瓦印 13：I区SX02埋土中出土瓦印
14：SB02検出中出土瓦刻印

fig.96 出土遺物拓影

11. 篠原遺跡 第31次調査

1. はじめに

篠原遺跡は、六甲川と榎谷川の合流する北方の扇状地に位置する、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。とくに縄文時代晚期後半期の遮光器土偶や石棒類と共に出土した多量の土器は、この時期の標識土器として知られている。

さらに弥生時代の集落も確認されており、今回の調査地から100mほど南西の第12次調査においては、弥生時代後期の大溝が検出され、小形仿製鏡が出土している。

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。今回の調査については既に本年3月より着手しており、3月中に表土の掘削及び残土の搬出後、旧耕土や大型の搅乱の掘削を行い、併行して掘削深度までの土留め作業も行なっていた。

今年度は、さらに遺物包含層の掘削や遺構の検出・掘削を実施した。前述のように既に表土等の残土については搬出を行なっていたが、人力による掘削残土についても適宜搬出するため、掘削残土の仮置場を確保しながらの調査となった。そのため fig.98に示したように調査対象範囲を2分割（西側の調査区を1区、東側の調査区を2区と呼称）し、1区より調査を開始した。

調査地は、北東から南西にかけての傾斜地に位置している。この地形に沿うかたちで各土層が、北東側に薄く、南西側に厚く堆積する傾向にある。また地山面をはじめ各堆積土層には六甲山より流出したものと考えられる花崗岩を多く含んでいる。

第1遺構面 調査の結果、2面の遺構面を確認した。主に北半部では明黄灰色砂礫上面で、中央から南部では弥生時代中期の土器を含む遺物包含層である灰褐色系の細砂～シルト質

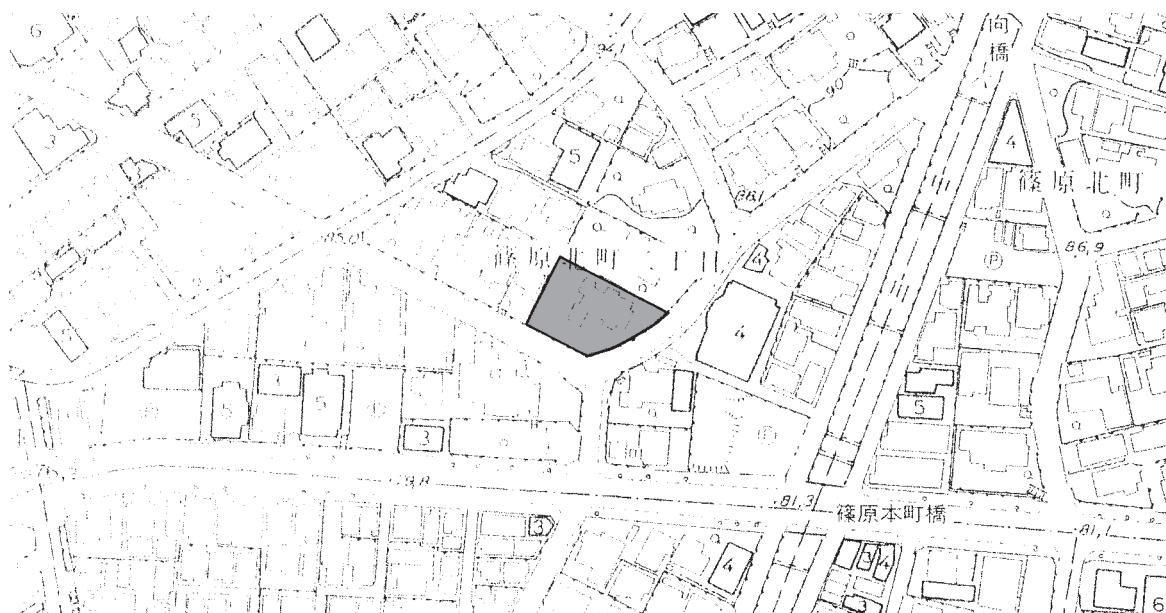


fig.97 調査地位置図 1 : 2,500

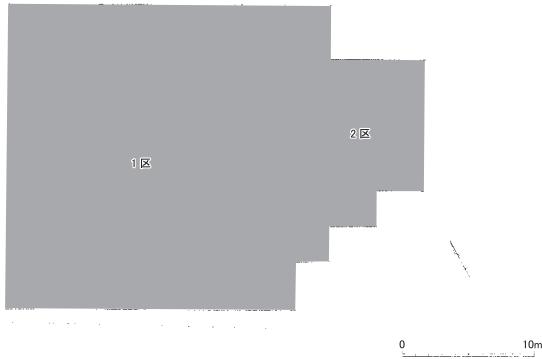


fig.98 調査範囲位置図

を整形によって平坦面を形成（この部分を中心区画と呼称）されている。ピットは直径0.2~0.4m前後のものが多く、深さが0.2mを測るものも一定程度認められることから、掘立柱建物の柱穴であるものも含まれていると考えられるが、調査区内でそのまとまりを把握することはできなかった。

そのほか調査区の西部を中心に土石流の痕跡が数ヶ所検出された。

第2遺構面 弥生時代中期後半と考えられる遺構面で、竪穴建物1棟のほか、溝状の落ち込みやピットなどを検出した。

SB01 1区南西隅で検出した竪穴建物で、平面形は円形を呈するものと考えられるが、西側が調査区外に延びていることと、南西部をSX05に切られていること、また後世の搅乱等により一部が削平されていることから全体の規模は不明である。調査区内で検出した規模は、直径は約5.4mを測る。床面までの深さは約0.35mを測る。床面の中央で中央土坑を検出したほか、建物内部でピットを13基検出している。埋土中からは弥生時代中期の土器やサヌカイト片が出土している。サヌカイト片は微細なものも多く含まれており、石器の加工等が行なわれていた可能性も考えられる。

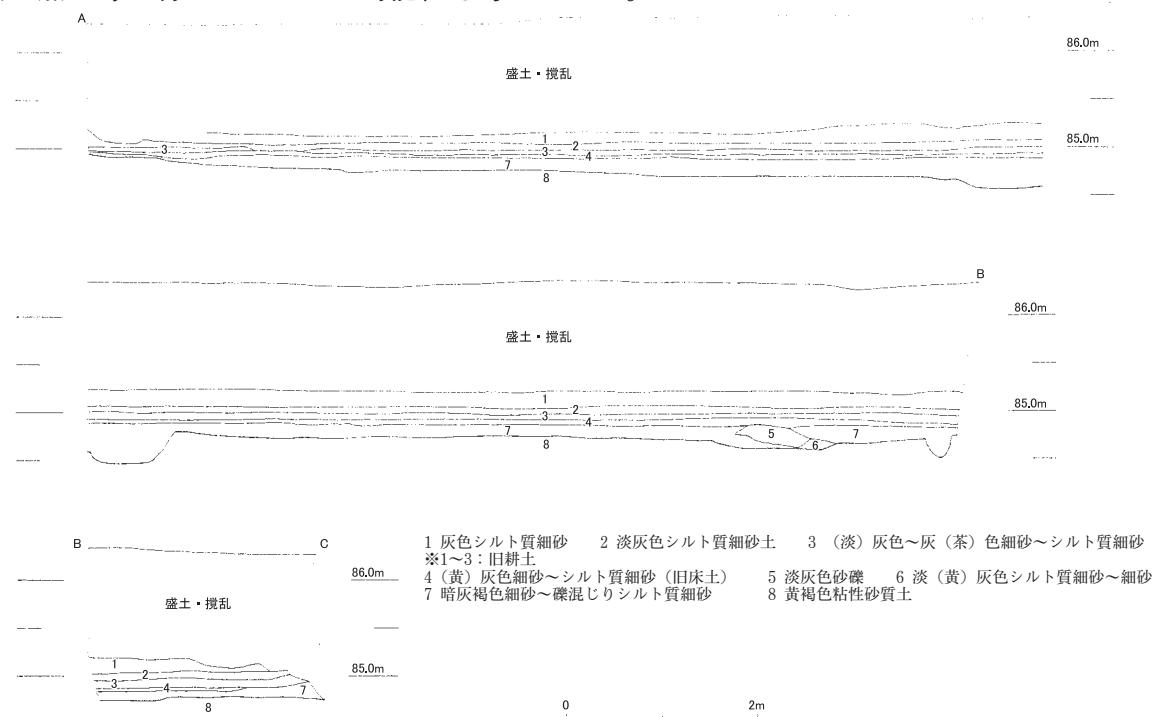


fig.99 調査区土層断面実測図

細砂層の上面で検出した。中世の遺構面と考えられる。検出した遺構は、土坑1基、ピット約40基などである。

SX06 2区西部、1区との境界付近で検出した。0.6×0.5m、深さ0.2mを測る。内部には人頭大までの礫が多く含まれる。中世の須恵器・土師器が出土している。

ピット ピットは調査対象地のほぼ中央からやや東側にかけて検出した。この部分については、東西12m、南北8m程度の範囲

中央土坑 直径0.9m、深さ0.4mを測る土坑で、弥生時代中期後半の土器とサヌカイト片が出土している。

ピット fig.101に示したようにピットを13基（SB01-P1～P13）検出している。このうちP1、9は深さ約0.4m、P3、7は深さ約0.5m、P11は深さ約0.6mを測るものでこれらのピットが主柱穴である可能性が高いと思われ、この場合柱穴位置の関係から、6本柱の建物であることが考えられる。ただし、このように6本柱の建物と想定した場合、残る1基の柱穴の可能性も考えられる P2は深さ約0.2mを測り、底面のレベルも以上の5基のピットよりも浅いため現段階では主柱穴の可能性は残るものとの断定はできず、調査区外に残る1基の主柱穴が存在する可能性をここでは考えておきたい。

SD01 SB01の北東側で検出した溝状の落ち込みである。幅約0.9～1.25mで、長さ約4.65mにわたって検出している。やや湾曲するような形状を呈する。北部～中央部にかけては深さ0.35m程度であるが、南端部は深くなっている、深さ約0.7mを測る。人為的な溝というよりは、急激な流れを伴う土石流などによって削られた痕跡と考えるのが妥当といえよう。

SD03 調査区中央やや東よりで検出した溝で、北東～南西方向に流れる。北側は削平により検出されず、南部は搅乱によって失われており、搅乱の南側では削平によるものか検出されなかった。検出した規模は幅0.6～1.2m、深さ0.14mを測る。弥生時代中期の土器が出土している。

SX01 1区中央付近で検出した落ち込みで、南側に一段落ち込むものであるが、南部は削平や流失のため判然としなかった。深さは0.6mを測る。弥生土器と考えられる土器片が出土している。

SX03 調査区中央付近で検出した落ち込みで、搅乱によって一部削平されているが、北半部は溝状を呈し、北西～南東方向に流れ、調査区中央で屈曲して南に延びたあと、長径2.5m、短径2.0m、深さ0.2mを測る平面形が方形を呈する土坑状の部分に注ぎ込んだあと、

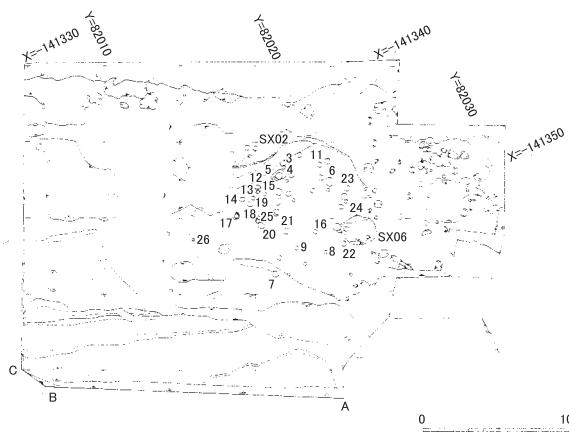


fig.100 第1遺構面平面図

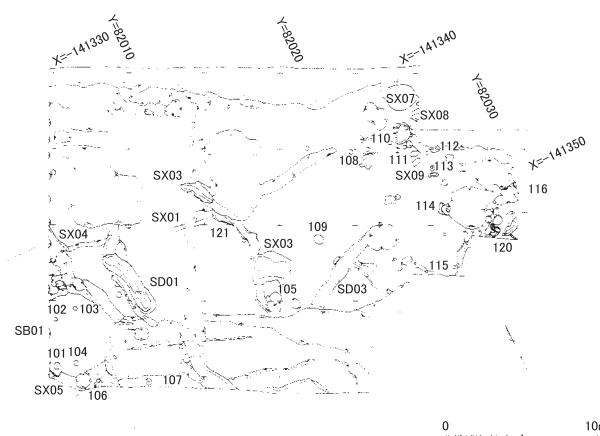


fig.101 第2遺構面平面図

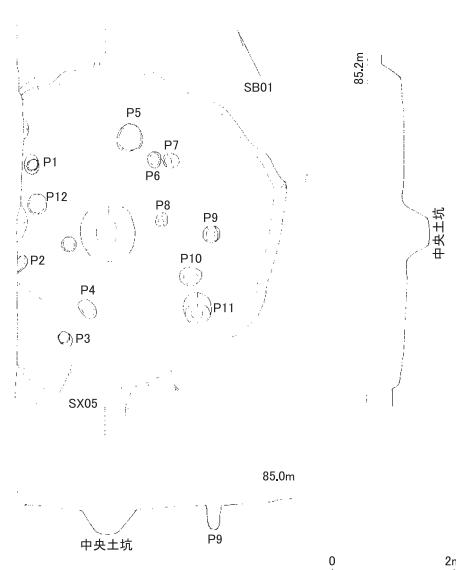


fig.102 1区 SB01平・断面図

さらに南側に流れる形状を呈している。人為的な遺構というよりは、水みちのような自然の落ち込みと判断される。

ピット ピットは約30基検出している。調査区南西部や北東部でやや多く検出しているが、全体的にみれば散在しており、調査区内で掘立柱建物としてまとまるものは確認できない。SB01の上面で4基のピットを確認しており、SB01との時期差があることは明らかであるが、出土遺物からは時期差を明確にすることはできない。

3.まとめ

今回の調査では2面の遺構面を確認した。出土遺物の整理作業が未了なため詳細について不明な点が多いが、第1遺構面は中世頃の時期のものと考えられ、第2遺構面は弥生時代中期後半頃のものと考えられる。特に第2遺構面において弥生時代中期後半頃の竪穴建物が検出されたことは、当該時期の集落が今回の調査地周辺ではこれまで確認されていなかったことから大きな成果といえる。竪穴建物は調査区の南西隅で確認しており、今回の調査地の西側に当該時期の居住域が広がる可能性を強く示唆するものと考えられる。竪穴建物からは土器のほかにサヌカイト片も多く出土している。先述のとおりサヌカイト片は微細なものも多く含まれており石器の加工等を行なっていた可能性も考えられる。



fig.103 1区 SB01検出状況（南西から）

12. 日暮遺跡 第35次調査

1. はじめに

日暮遺跡は、西郷川の右岸扇状地の先端部に位置し、1989年の日暮通1丁目における市営住宅建設工事に伴って実施された調査で発見された遺跡である。第1次調査では、古墳時代後期と考えられる堅穴建物3棟と平安時代後半の掘立柱建物12棟が検出されている。以後発掘調査は33次にわたって実施され、弥生時代前期、古墳時代前期から鎌倉時代後期の歴代にまたがる集落遺跡であると考えられてきた。なかでも古墳時代後期から奈良時代前期の掘立柱建物群と平安時代後半の掘立柱建物群は、比較的高い密度で分布している。

今回の調査地点は、昭和61年の市営住宅建設に伴う第1次調査地の西120mに位置し、分譲共同住宅建築にかかる工事に伴って調査を実施した。



fig.104 調査位置図 1 : 2,500

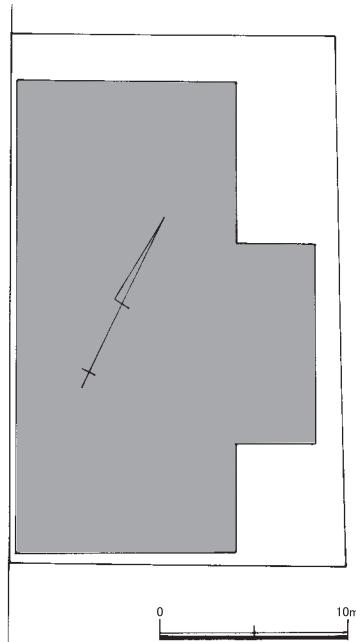


fig.105 調査範囲位置図

2. 調査概要

調査の概要

調査区北部では、旧建物の柱基礎・地中梁の除去工事により、中央に島状に遺物包含層を残す部分1ヶ所と調査区東北辺にのみ遺物包含層を残していた。南西部では、一部で遺物包含層を残すものの大部分が黄灰色砂層（礫含み）の地山層となっており、この層の上面で柱穴状のピットを検出した。東部・東南辺では遺物包含層がよく残存していた。

調査地の層序は、約0.2~0.3m前後の造成土、その下に厚さ0.18m前後の近現代の耕作土、中世以降の水田耕土灰褐色砂質土、暗灰褐色砂質シルト・暗褐灰色粘性砂質土の須恵器・土師器・瓦を包含する土層の順に堆積している。この遺物包含層の下の黒褐色シルト上面でピット・溝等の遺構を検出した。この黒褐色シルトからは遺物の出土はない。

調査区北部 9ヶ所の柱穴状のピットを検出した。そのうちの5ヶ所の柱穴はL字に並び、掘立柱建物1を形成すると考えられる。

調査区東北辺 6ヶ所の柱穴状のピットを検出した。ピットは直径0.2~0.4m前後の円形で、深いピットで深さ0.3mを残す。

調査区南西部 暗黄灰色砂に掘り込まれた状態で柱穴状のピット28ヶ所を検出した。柱穴は大型のものは一辺0.5m前後、深さ0.3m前後を計測し、抜き取り痕跡をもつものが多い。削平され、攪乱をうけているため建物としてまとまるものはない。

調査区東部・東南辺 調査区のうち比較的良好に遺物包含層を残すが、西側は旧建物で攪乱されていた。遺物包含層を除去した結果、東西溝2条(溝1・溝2)、溝と平行するとみられる杭列2条(杭列1・杭列2)を検出した。さらに茶褐色砂質土を除去した暗黄灰色砂上面でも4ヶ所のピットを検出した。

3. 主要検出遺構

掘立柱建物1 周縁を後世の攪乱によって滅失した東西2間以上、南北1間以上と推定さ

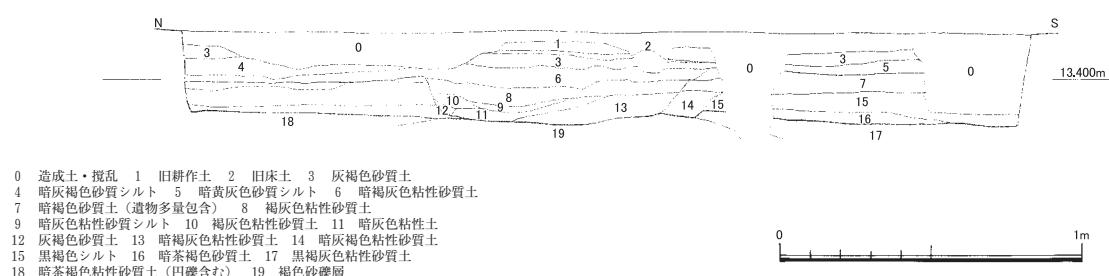


fig.106 東壁土層断面実測図

れる掘立柱建物である。東西3.4m、南北2.1m前後の規模を残している。柱の間隔は東西で1.7m等間、南北で2.1mを計測する。柱掘形は不整円形を呈するが、直径0.5m前後、深さは0.3mで柱痕跡は明瞭である。

柱掘形埋土内から須恵器・土師器の細片が出土している。

溝1 調査区東部中央を東西に走る断面逆台形の素掘り溝である。溝は土層断面の観察から2時期にわたって構築されたと考えられる。第Ⅰ期は地山を被覆する黒褐色シルト上面から掘り込まれた溝で、南側の溝肩を暗灰褐色粘性砂質土によって護岸するなどして長らく使用されたと推定される。

第Ⅱ期は暗褐色砂質土が溝より南側に盛土されたのちに掘り込まれた。

規模は第Ⅰ期で幅3.8m、深さ0.4m、第Ⅱ期で幅3.6m、深さ0.5mを残している。

溝2 調査区の東南隅で検出した東西溝の北側溝肩とみられる南方向に掘り込まれた断面U字形の掘形である。

溝1の第Ⅱ期と同様暗褐色砂質土上面から掘り込まれ、幅2.0m以上、深さ0.4mを残している。掘形内埋土からは、少量の土師器片が出土している。

杭列1 溝1の南側溝肩に沿って検出された杭列である。杭の間隔は、0.4~0.7m、杭径0.2m前後、深さ0.15~0.2m前後を残し、断面形がややV字形で杭端の痕跡と考えられる。直線的に整列せず、交互に打設されたもので、土留杭の可能性がある。

杭列2 溝2の北側溝肩に沿って検出された杭列である。杭の間隔は0.8m、杭径0.2m前後、深さ0.3m前後を残す。

4. 調査結果

調査地の約70%が、旧建物の地中梁・地中基礎によって現地表下約2.0mまで攪乱されていた結果、調査区の北・西部には、わずかに旧耕土・遺物包含層が残存するが、遺構はほとんど攪乱されていた。

調査区東部では、攪乱されながらも残存部分が見られた。検出された遺構のうち、溝1と溝2は、両溝の間に土留め杭を設え、盛土造成が行なわれた痕と考えられる。

溝2を溝1同一規模の溝と考えた場合、溝の心々間は約12mとなる。埋土内出土土器からみて、奈良時代から平安時代前期まで存続したと考えられる。

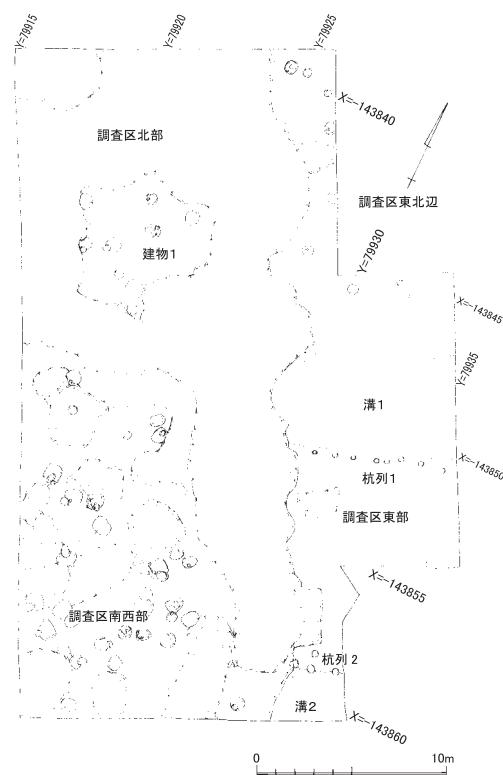
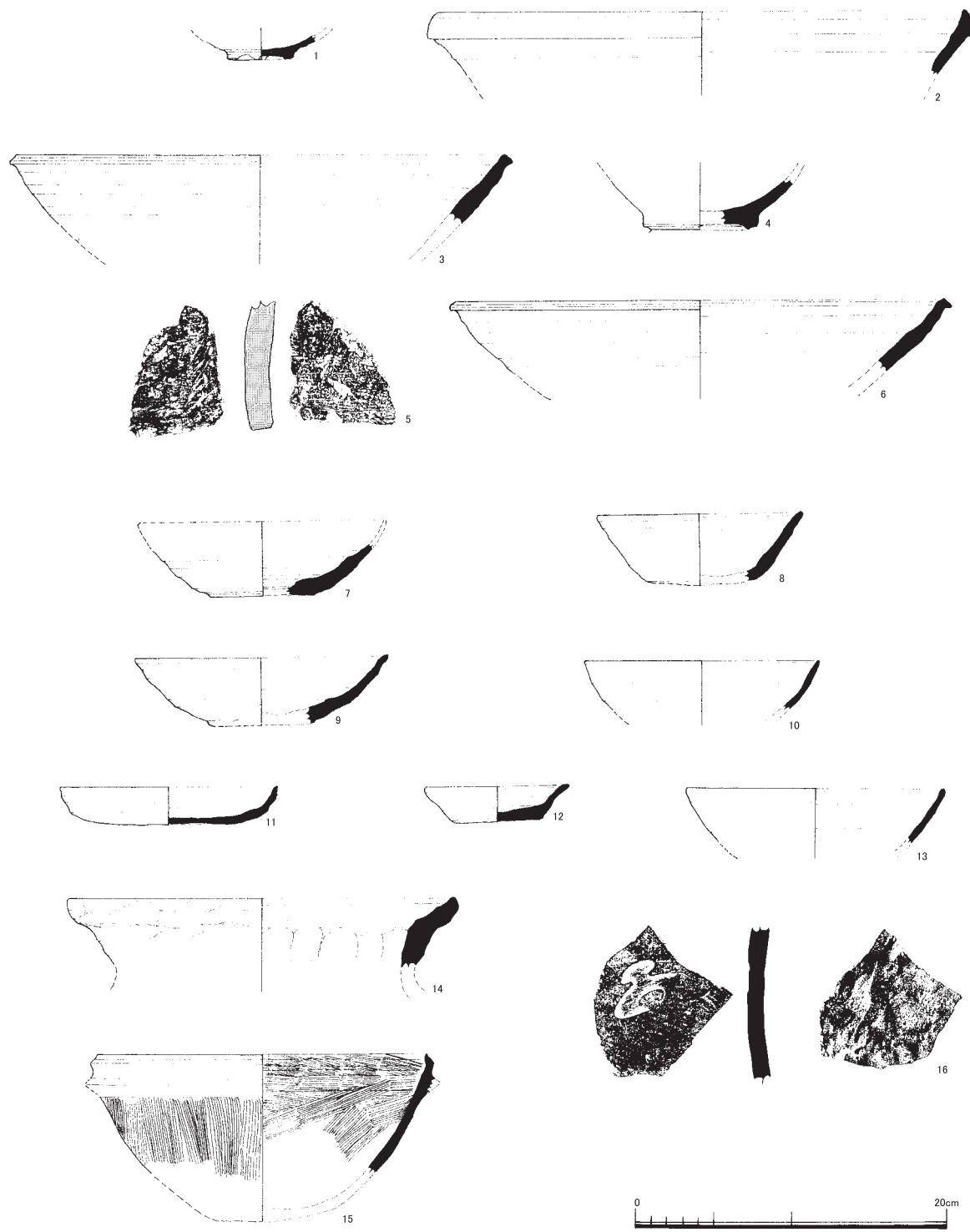


fig.107 調査区平面図



1・2 灰褐色砂質土
3～6 暗灰褐色砂質シルト
7・8 暗褐色粘性砂質土
9～12 溝1 13 溝2
14～16 黒褐色シルト

fig.108 出土遺物実測図

14. 日暮遺跡 第37次調査

1. 調査の概要

基本層序 現地表面は、およそ T.P.13.5mである。現地表から約0.2~0.5mは造成土および攪乱土である。その下層には、旧耕作土（1~4・6・7層）がそれぞれ約0.1mずつ堆積している。途中、洪水砂かとみられる細砂層（5層）が堆積するが、調査区の南西のみで、全体に広がる堆積ではなかった。これら旧耕作土中には、耕作にともなう溝の痕跡や、牛馬の足跡と見られる痕跡も残存していた。耕作土の下層に暗褐色砂質土の遺物包含層が堆積する（8層）。中世・平安時代の遺物を含み、やや粘性がある。その下層に、平安時代の遺物を含む淡黒褐色粘質土が5~10cmほど堆積する（9層）。これより下層は基盤層の堆積となる。礫をやや含む黒褐色粘土（10層）と砂礫をやや含む暗黄褐色粘土（11層）の堆積を確認した。遺構検出は、中世・平安時代の遺物包含層（8層）を除いた9層上面と、平安時代の遺物包含層（9層）を除いた10層上面で行なった。9層上面を第1面、10層上面を第2面と呼称し、以下に記述する。

第1遺構面 検出面の標高は約T.P.12.5m、現地表からの深さは約1.0mである。検出土坑、ピットなどを検出した。土坑SK101は長辺1.1m、短辺1.0mの平面方形で、検出面からの深さは0.1mである。土坑SK102は長径0.9m、短径0.72mの楕円形で、土坑SK103は長辺0.5m、短辺0.34mの隅丸長方形である。いずれも深さ約0.08mと浅い。ピットはいずれも径0.2m以下の小さなもので、深さも0.1mm以下で浅い。性格不明遺構SX101は調査区南端で検出した。埋土は暗灰褐色砂質土で、底面に凹凸がみられる。耕作溝の痕跡かもしれない。

第1遺構面は須恵器、土師器、黑色土器などが出土したが、いずれも小片で出土量も少ない。平安時代から中世にかけてのものと考えられる。

第2遺構面 検出面の標高は約T.P.12.4m、現地表面からの深さは約1.1mである。土坑2基、ピット11基、溝4条、性格不明遺構1基である。

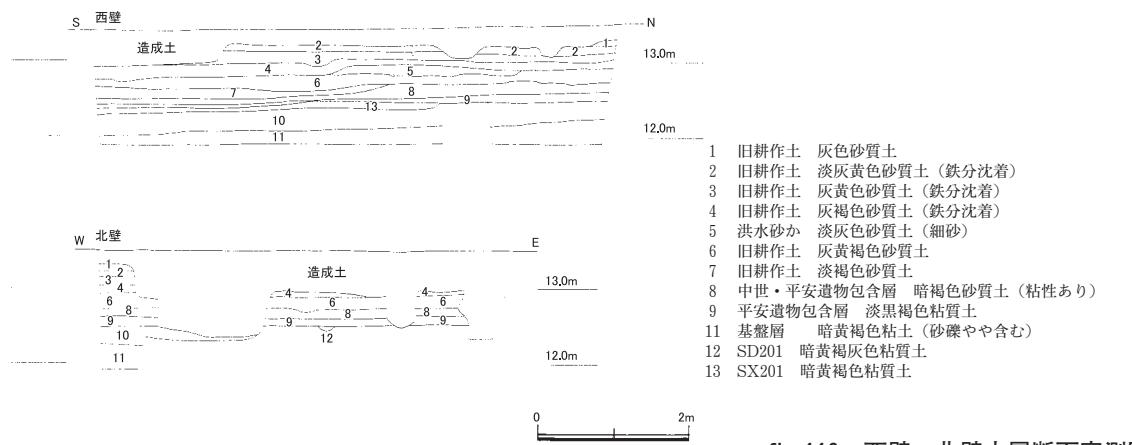


fig.109 調査範囲位置図

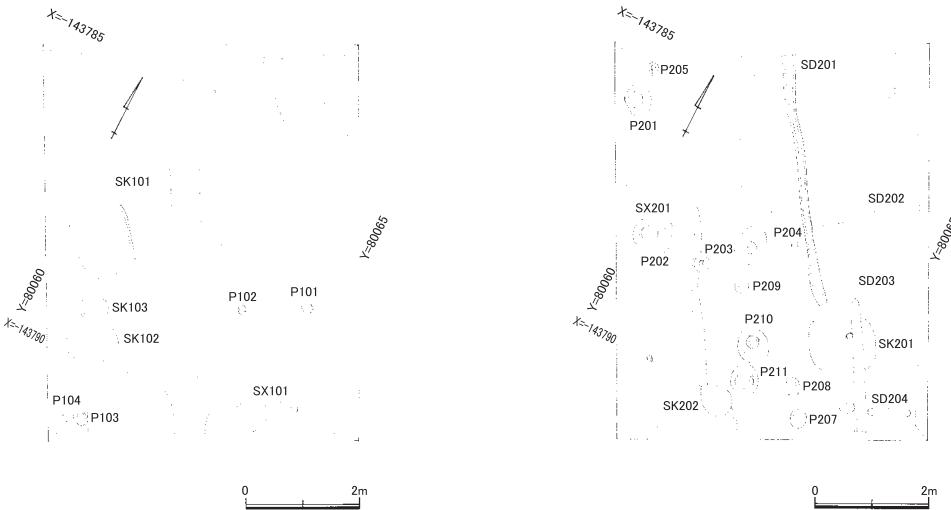


fig.111 第1遺構面平面図

fig.112 第2遺構面平面図

土坑 SK201は長辺1.06m、短辺0.94m の隅丸長方形である。検出面からの深さは0.2mほどで、溝 SD203より古い。埋土下層から、9世紀代とみられる土師器杯が1点、ほぼ完形で出土した。

土坑 SK202は径0.54mほどの不正円形で、埋土に焼土や炭化物を多く含む。土師器、須恵器の小片が出土している。

ピット SP201～SP204・SP210・SP211は、柱穴である。掘形は長径0.6～0.7m、短径0.5～0.6mの不正円形もしくは隅丸方形で、柱痕跡は径0.2～0.3mほどである。SP203は小規模で、掘形が径0.3m、柱痕跡が径0.1mである。検出面からの深さは、いずれも0.2mほどである。SP202・SP204・SP210は、ほぼ等間隔で検出しており、SP204を北西隅の柱穴として南西に展開する掘立柱建物である可能性も考えられる。その他のピット SP205・SP206～SP209は、径0.2～0.3m、検出面からの深さ約0.1mである。塀や建物などを想定できる規則性はない。

溝 SD201～204は、耕作にともなう鋤溝ではないかと考えられる。

性格不明遺構 SX201は、調査区南西で検出した。大半が調査区外になるため明確なことはわからない。埋土は0.08mほどと非常に浅く、遺物も小片である。

第2遺構面は、出土遺物や層位から平安時代と考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、第2遺構面で複数の柱穴を検出し、ほぼ完形の土師器杯も出土した。小片であるが、平安時代の遺物包含層（9層）中からは、緑釉陶器や灰釉陶器も出土している。第1次調査や第31次調査、第32次調査でも、平安時代の掘立柱建物や地鎮遺構が検出されており、今回の調査区も同時期の集落内にあると想定される。

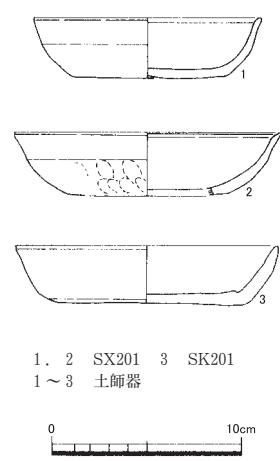


fig.113 出土遺物実測図

17. 雲井遺跡 第36次調査

1. 調査の概要

個人住宅建設に伴う調査で、調査面積は約58m²である。

基本層序 現地表面は、およそ T.P.12.3m である。現地表から約0.2~0.6mは造成土および攪乱土である。その下層には、淡灰黄色粘質土の旧耕作土（1層）が約0.2m、黄灰色粘質土の床土（2層）が約0.05m堆積する。旧耕作土の下層には、暗灰色砂質土の遺物包含層（3層）が約0.1m堆積している。遺物量は少ないが、中世以降の遺物包含層である。その下層に弥生時代の遺物を含む暗褐色砂質土が0.15~0.2mほど堆積する（4層）。これより下層は基盤層の堆積とみられる。やや砂まじりの黒灰色粘土（5層）と、灰褐色粘土（6層）の堆積を確認した。遺構検出は、中世以降の遺物包含層（3層）

を除いた4層上面と、弥生時代の遺物包含層（4層）を除いた5層上面で行った。4層上面を第1面、5層上面を第2面と呼称し、以下に記述する。

第1遺構面 検出面の標高は約 T.P.11.7m、現地表面からの深さは約0.6mである。溝2条を検出した。

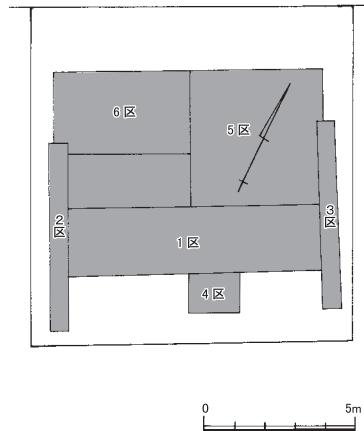


fig.114 調査範囲位置図及び地区割図



fig.115 調査地位置図 1:2,500

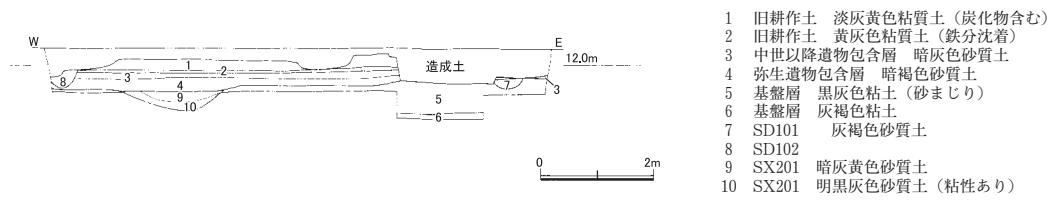


fig.116 北壁土層断面実測図

溝 SD101は、幅0.6m、検出面からの深さは約0.2mである。溝 SD102は幅0.4m、検出面からの深さは約0.2mである。いずれも遺物の出土はない。北壁土層断面で確認すると、SD101は3層下層から、SD102は2層から掘り込んでいる。よって、いずれも中世以降の溝であると考えられる。

第2遺構面 検出面の標高は約11.5m、現地表面からの深さは約0.8mである。ピット1基、性格不明遺構1基を検出した。

ピット SP201は径0.1m、検出面からの深さ0.08mである。性格不明遺構 SX201は、幅1m、平面形態は溝状で北に向かって急激に深くなる。遺物の出土はないが、弥生時代の遺物包含層（4層）下層から検出されているため、同時期の遺構である可能性もある。また、調査区外に展開するため明確なことはわからないが、遺構の形状および周辺の既往の成果から、周溝墓の周溝である可能性も指摘できる。

2. まとめ

今回の調査では、2面の遺構面を確認した。上層の第1遺構面では、中世以降の溝を2条検出した。下層の第2遺構面では、ピットと性格不明遺構を検出した。第2遺構面は、出土遺物などから弥生時代の遺構面と考えてよいだろう。出土遺物は少量である。遺物包含層などから土師器と弥生土器が出土した。

第1遺構面、第2遺構面ともに遺構は希薄であり、遺物の出土量も少なかった。おそらく、今回の調査地は雲井遺跡のなかでも集落の縁辺部に位置していたものと考えられる。ただし、弥生時代の墓域などは、こうした縁辺部に作られる例が多い。今回検出した SX201も、今後の資料の蓄積を待って再検討したい。

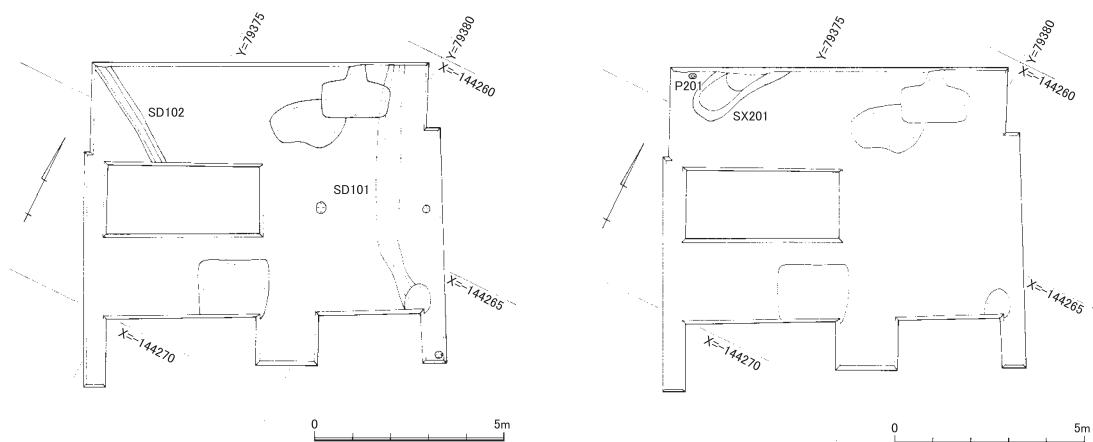


fig.117 第1遺構面平面図

fig.118 第2遺構面平面図

18. 花隈城跡 第5次調査

1. はじめに

花隈城は、戦国時代後期織田信長の命により荒木村重によって築城され、天正八年（1580年）荒木村重の謀叛に対する織田方池田恒興の攻撃により落城した。城域は、古絵図により現在の花隈町から下山手通3丁目付近と推定されている。過去4次にわたる発掘調査では、十六世紀後半の瓦が検出されるものの、直接城郭に関連する遺構は確認されていない。むしろ城域の南西部にある旧三宮駅構内遺跡に関連する古墳時代前期の土師器等の遺物がよく発見され、城郭遺構の下層には古墳時代の遺跡が存在すると考えられている。

2. 調査概要

層序 現地表下0.7m前後まで造成土、その下に灰オリーブ色の旧耕土もしくは旧表土2層が厚さ0.2m前後で水平堆積している。さらにその下層に須恵器・土師器・弥生土器を含む暗灰褐色砂質土（厚さ0.2m）、縄文土器を含む暗茶褐色粘性砂質土（厚さ0.25m前後）がほぼ水平堆積している。遺構は、暗茶褐色粘性砂質土上面から掘り込まれていたと考えられるが、今回はすべて遺物包含層の下面灰黄色砂質土（堅緻）上面で検出した。

検出遺構 調査区北部でピットが楕円状にめぐり、その中央東寄りに灰・炭を含む円形ピットを設える SX03（上層）を検出した。ピットの内側は縄文土器を含む埋土が被覆していた。この被覆埋土を除去した結果、溝がめぐる竪穴状の楕円形の落ち込み SX03（下層）となった。

調査区南部では掘立柱建物 SB01を検出した。さらに SB01に重複する位置で、竪穴建物 SB02を検出した。



fig.119 調査地位置図 1:2,500

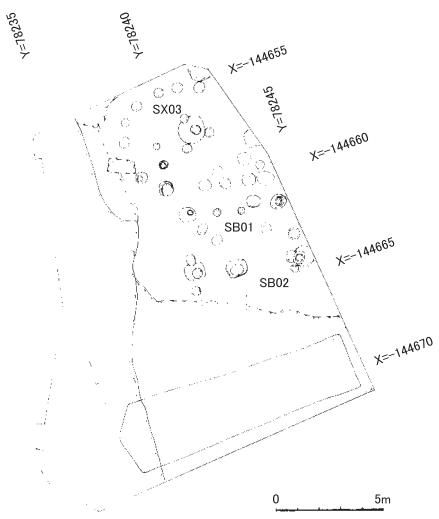


fig.120 調査範囲位置図及び調査区平面図

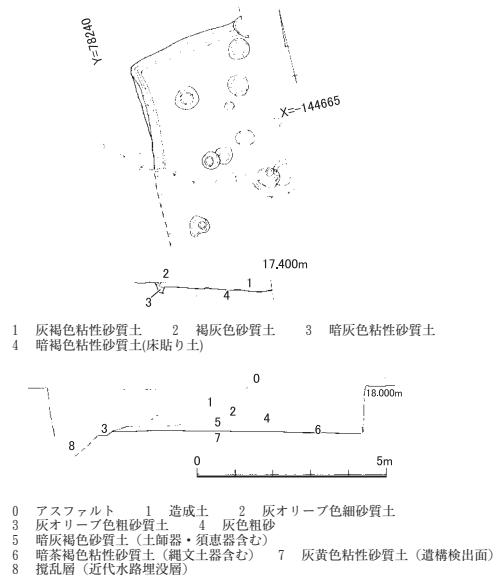


fig.121 SB02平・断面図及び北壁断面実測図

している。

SX03 調査区北部で検出した性格不明遺構である。地山の灰黄色砂質土(堅緻)上面で検出した遺構は柱穴状のピットが長径6.5m、短径5mの楕円状に配列されていた。柱穴状のピットは直径0.4~0.6m前後で、深さ0.3m前後を計測する。また、やや中央東よりに直径1.2m、深さ0.4m前後の土坑が穿たれ、土坑の埋没土には灰と炭が確認された。この柱穴状のピットの配列の内側は縄文土器を含む暗茶褐色粘性砂質土が充填されている。この層を掘り下げた結果、南北5.3m、東西7.0m(推定)、深さ0.18m前後の堅穴状の落ち込みとなつた。落ち込みの内側には幅0.5~0.8m、深さ0.12~0.2mの溝が検出された。溝の断面形は舟底状である。底部は暗茶褐色粘性砂質土が敷かれ平坦につくられている。その上面で深さ0.25m前後の柱穴8ヶ所を検出した。遺構埋土からは縄文土器1点が出土している。

上層部での柱穴状のピットの配列と灰・炭を含む土坑は、下層部の堅穴状落ち込みの上に整地土を敷いて設えられたと考えられる。

3. 検出遺構

SB01 調査区南東辺で検出した掘立柱建物である。検出した柱並びは南北1間、東西2間で、さらに南・東方向に延びている可能性がある。柱の間隔は、建物の北辺では2ヶ所の小柱穴が西から1.3m+1.3m+1.8mの間隔で並び、南辺では西から1.8m+2.7m、東・西辺は2.7mを計測する。柱掘形の規模は概ね一辺0.7m前後の方形掘形に、直径0.3m前後の柱痕跡を残す。掘形の深さは0.3m前後を残し、埋土内からは、土師器細片と須恵器片が出土している。

SB02 調査区南東辺で検出した方形の堅穴建物である。東側は調査区外となり、南側は近・現代の搅乱により壊滅されている。東西2.8m以上、南北5.0m以上を計測する。壁体は0.15m前後を残し、壁沿いに幅0.25m前後、深さ0.15mの周壁溝が穿たれている。床は厚さ0.2m前後の暗褐色粘性砂質土を灰黄色砂質土(堅緻)の地山の上に貼って造っている。支柱は北西と南西の2ヶ所で検出した。北西侧の支柱は径0.6m大の不定形の柱掘形に柱を据える。深さは0.4mを計測する。南西侧の支柱は、削平されて地山の灰黄色砂質土(堅緻)上面で検出した。径0.6m大の不定形掘形に柱痕跡を残す。深さ0.15mを残存している。支柱間隔は南北で3.3mを計測する。出土遺物は少ないが、土師器・須恵器片が出土

19. 下山手遺跡 第6次調査

1. はじめに

下山手遺跡は、六甲山の南麓、旧宇治川と旧鯉川に挟まれた段丘上に立地する、弥生時代～中世の集落遺跡である。遺跡の範囲は、下山手通7丁目、8丁目に広がっており、これまでに5次にわたる発掘調査が実施されてきているが、それらの調査は全て今回の調査地よりも南側の同8丁目地区において行なわれたものである。

当調査の成果は、平成25年度に「下山手遺跡第6次発掘調査報告書」を刊行しており、詳細については同報告書を参照されたい。

2. 調査の概要

第1遺構面 盛土・旧耕土の下層で、調査区北半では淡灰黄色～淡灰（褐）色砂質土、南半では淡（茶）灰色砂質土～茶灰色粘性砂質土の遺物包含層が存在し、その下層で第1遺構面を確認した。検出した遺構は、土坑、溝、落ち込み、ピット等で、主に西半部で検出している。

SK01 平面形は楕円形に近い形状を呈する。長径1.53m、短径1.08m、深さ0.35mを測る。土師器片が少量出土しているが、時期については不明である。SK02は、平面形がほぼ円形を呈する土坑である。長径1.15m、短径1.0m、深さ0.11mを測る。須恵器、土師器、瓦器が出土している。中世の遺構と考えられる。

SK03 平面形がほぼ円形を呈する土坑である。長径1.2m、短径1.02m、深さ0.14mを測り、SK02とほぼ同規模の土坑である。須恵器、土師器が出土しているが、小片のため詳細な時期は不明である。



fig.122 調査地位置図 1 : 2,500

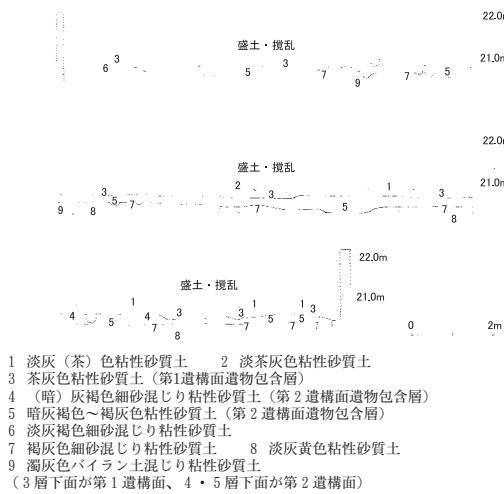


fig.123 III-1・2区南壁土層断面実測図

を考慮して掘削を実施しなかった。井戸枠部分と考えられる幅（直径）0.4m程度の土層断面を確認したが、内部の掘削を行わなかったため材質などの詳細は不明である。

SX01 北側の溝状の部分から流れ込んだ水を貯め、南側の溝状の部分から上澄み部分を流す構造であった可能性が考えられる。須恵器、土師器、瓦器、土錘が出土しており、中世の遺構と考えられる。

SX04 大型の落ち込みで、長径5.55m、短径4.67m、深さ0.79mを測る。平面形は長方形に近いが搅乱を受けて南東部分等が失われているため、本来の形状は不明である。中世の須恵器、土師器、陶器、磁器、瓦器、瓦、土錘などが出土している。

SX05 土坑状の落ち込みで、長径1.38m、短径0.8m、深さ0.33mを測る。中世の須恵器、土師器、陶器、土錘が出土している。SX04を切る。

SX07 大半が調査区外に延びるため詳細は明らかではないが、検出した状況からは井戸の可能性も考えられる。確認できた規模は、長径2.2m、短径0.4m、深さは0.33mを測る。

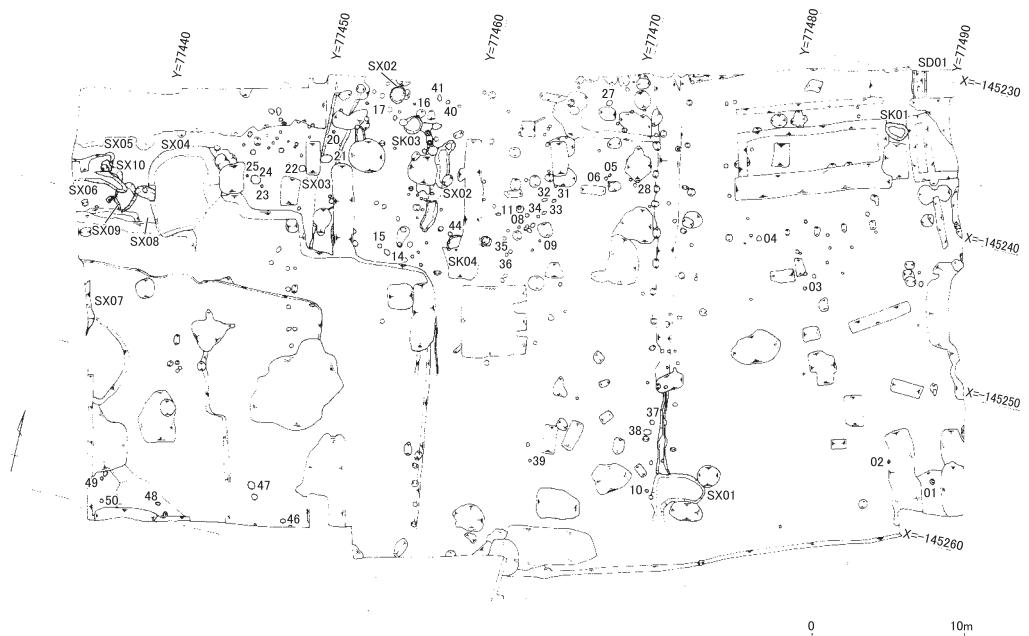


fig.124 第1遺構面平面図

SK04 平面形は円形ないし方形を呈すると考えられるが、搅乱によって削平されており断定はできない。深さ0.07mを測る。須恵器、土師器が出土しているが、小片のため詳細な時期は不明である。

SE01 井戸と考えられる遺構で、全体の3分の2程度は調査区外に存在するものと考えられる。おそらく平面形は円形を呈するものと考えられ、確認できた範囲では直径約4mを測る。深さについては断面調査を実施したが約4mまでは確認できたもののさらに下層については崩落の可能性があったため安全面

についても崩落の可能性があったため安全面

ピット 調査区全体で約50基検出しているが、I-2区でやや密集した状態で確認しているものの全体的には散在している。

第2遺構面 古墳時代後期を中心として一部奈良時代の遺構を含む遺構面である。竪穴建物2棟、掘立柱建物3棟、土坑8基、溝8条、落ち込み10ヶ所、柱穴・ピット多数を検出している。

SB101 竪穴建物で、平面形は方形を呈し、北辺中央にカマドをもつ。4.22m×3.85m、深さ0.28mを測る。内部でピットを5基検出しているが、遺存状態が悪く、主柱穴としての断定材料に乏しい。また周壁溝を南壁際東半～東壁際南半にかけての部分で検出している。出土遺物から、6世紀後半頃の建物と考えられる。

カマド 北壁中央で確認した。須恵器高壺を倒立させて支脚としていたものが遺存している。支脚部分上部には土師器片を数片載せ、上部に甕を載せて煮炊きを行う際の安定性を調整している。なお、この上部で使用された甕については元位置では遺存していなかった。

SB102 平面形が長方形を呈する落ち込みで、5.3m×4.45m、深さ0.23mを測る。検出当初は、その形状等から竪穴建物としての可能性が考えられたが、周壁溝や主柱穴と考えられるピットなどが検出されなかっことから、竪穴建物としての可能性は低く、落ち込みとして報告する。SX104、SP210に西側の一部を切られ、SD106を切っている。6世紀後半頃の遺構と考えられる。

SB103 竪穴建物で、平面形は方形を呈する。4.87m×4.35m、深さ0.05mを測る。東片中央やや南よりで焼土部分を確認し、カマドの可能性も考えられ、断割調査を実施したがその可能性は低くなった。須恵器、土師器、弥生土器が出土している。

そのほかI-2区中央の北壁際でカマドを1基検出しており、この付近に竪穴建物が存在した可能性が高いが、平面プランは確認できなかった。SB101と同様6世紀後半頃の遺構と考えられる。

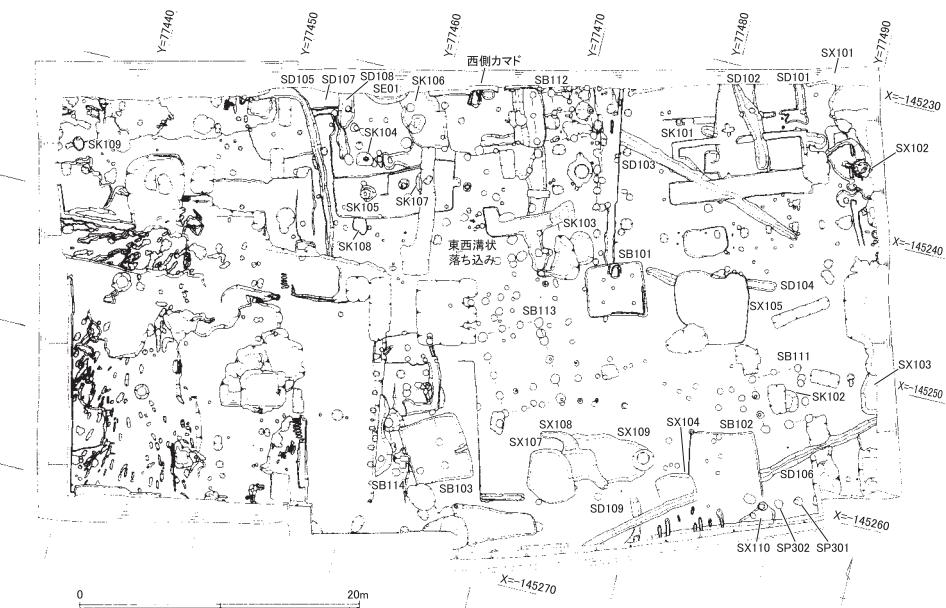


fig.125 第2遺構面平面図

SB111 2間×3間の掘立柱建物で、側柱建物である。建物を構成する柱穴は径0.45～0.65mを測り、深さは0.2～0.3mのものが多いが、P4は0.45m、P6は0.6mを測る。柱穴内の出土遺物から、6世紀後半頃の建物と考えられる。

SB112 2間以上×3間の掘立柱建物で、総柱建物である。建物は、北側が調査区外に延びている。建物を構成する柱穴は削平されているものもあり、径0.35～0.5m、深さ0.2～0.4mを測る。柱穴内から、古墳時代後期の須恵器、土師器が出土している。

SB113 3間×4間の掘立柱建物で、側柱建物である。建物を構成する柱穴は径0.55～0.7m、深さは0.3～0.6mを測る。柱穴から、古墳時代後期の土器が出土している。

SD103 幅0.6～1.0m、深さ0.17～0.3mを測り、長さ15mを検出している。西側は搅乱によって失われている。さらに西側にはSB112等が存在するが、この部分には続かず、搅乱の中で終わっているようである。東側も途切れている。溝というよりも、溝状の落ち込みとしたほうが妥当と考えられる。

SD104 溝状の落ち込みである。中央部はSX105に上部を削平されている。ほぼ東西方向に延びるが、西端部の長さ約2.2mは北に振っている。幅0.48～0.73m、深さ0.28～0.35mを測る。6世紀前半～半ば頃の遺構と考えられる。

SD105 幅0.4～0.7mで、深さ0.3～0.5mを測る。ほぼ南北方向に近い方向に流れるが、北端部は屈曲して西に伸びる。上面で完形の須恵器壺蓋が出土したほか、西肩部で扁平な石が出土している。

SD106 (北) 東側と(南) 西側はともに調査区外に延びている。また中央部はSB102によって上部が削平されている。幅0.35～0.85m、深さ0.15～0.3mを測る。6世紀代の完形の須恵器壺蓋が出土している。

SK102 西半部分は失われているが、残存する規模から判断すれば、本来の規模は、径1.6mの円形に近い平面形を呈すると考えられる。深さは0.3mを測る。奈良時代後半の遺構と考えられる。

SX102 深さは0.3mを測る。内部で円形に近い形で巡る粘土を確認している。古墳時代後期頃の須恵器、土師器、土錘が出土している。

SX104 浅い落ち込みで、SB102を切っている。深さ0.1mを測る。古墳時代後期の須恵器、土師器、弥生土器、土錘が出土している。

柱穴・ピット 第2遺構面では約300基の柱穴、ピットを検出している。一部については、掘立柱建物としてのまとまりを確認し、先述のとおり3棟の掘立柱建物を復元した。

第3遺構面 第2遺構面よりも下層においてもう1面の遺構面を確認した。

SB201 直径約9mを測る、平面形が円形を呈するものと考えられる竪穴建物である。西半部分肩部は上部の遺構などによる削平もあり不明瞭であった。深さは0.3mを測る。内部で6基のピットを確認しているが、P1、P2、P4、P5が主柱穴と考えられ、4本柱の竪穴建物と考えられる。建物中央で中央土坑を検出している。

弥生時代中期の土器や石鏃、サヌカイト片が多く出土している。

中央土坑は、長径1.2m、短径0.84m、深さ0.42mを測る土坑で、下層に炭層に由来すると考えられる粘質土が堆積している。上層、下層ともに、サヌカイト片や炭片が多く(下層の方が多い)出土している。

20. 楠・荒田町遺跡 第52次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡が所在する中央区楠町と兵庫区荒田町は、北に六甲山の山塊、東は安養寺山から神戸海洋気象台のある宇治野山、西は会下山から滝山・菊水山と三方を囲まれ、北東から南西に延びる楕円形状の盆地地形となる。地形は南ほど低く、六甲山系から派生する石井川・天王川が合流し湊川となる。かつては宇治川も西流していたと思われ、谷地形が残される起伏の多い地形である。

これまでの51次におよぶ調査から弥生時代から中世に盛行した遺跡と判明している。特に、弥生時代前期における貯蔵穴、中期の竪穴住居・方形周溝墓等の遺構および出土遺物からは、遺跡がこの地域の中心集落であったことを示している。

また、平安時代後期の福原京の所在はいまなお判然としないが、近年、同時期の壕や溝が並んで検出され、建物も確認されている。近隣の調査地点である神戸大学医学部附属病院内においても、1981・1982年度に神戸大学の多渕敏樹氏によって、いわゆる「福原宮」(平氏別邸群)に関連した遺跡がはじめて確認された。その後兵庫県教育委員会によって数次の調査が行なわれ、平安時代末以外にも、縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺構・遺物、や平安時代以降の掘立柱建物・溝・井戸などが確認されている。

2. 調査の概要

今回の調査は、緊急時発電用燃料タンク設置に伴うものである。

大部分が攪乱による削平を受けており遺構面はほとんど残されてはいなかった。GL-1m前後の第2層暗褐色シルト混細砂下面が遺構面であるが、ほとんど攪乱によって削平されているため、面的な調査は困難であった。

調査区北西部で南北に走る溝を検出したが、時期としては近世以降と考えられる。

ただし、それ以外は明確な遺構等は確認できなかった。

また、今回の調査では遺物は出土しなかった。

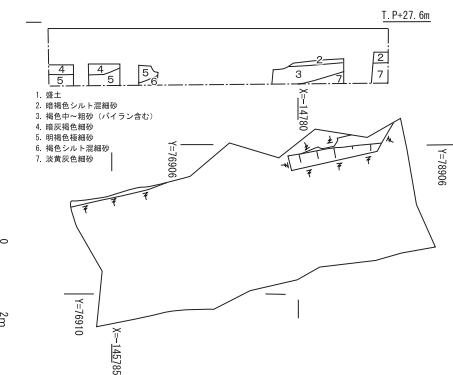




fig.128 調査地位置図 1:2,500

21. 楠・荒田町遺跡 第53次調査

1. はじめに

当調査の成果は平成25年度に「楠・荒田町遺跡第53次発掘調査報告書」を刊行しており、詳細については同報告書を参照されたい。

2. 調査概要

基本層序 基本的な層序は近現代の整地土の下は耕作土、旧耕作土、遺物包含層が3層、地山と続く。第1遺構面は上層の遺物包含層である暗茶色粘質土上面、第2遺構面は中層の遺物包含層である暗茶色砂混じり土上面、第3遺構面は地山である黒茶色～茶褐色砂

質土上面であるが、第2遺構面は極めて遺構の識別が困難であったため、約0.1m遺構面を削り込んで遺構を検出した。

第1遺構面 江戸時代頃の遺構面で、調査区中央でピット群を検出した他、散在的にピットを検出した。

第2遺構面 平安時代から鎌倉時代の遺構面で、掘立柱建物4棟・溝1条・井戸1基・土坑10基・墓3基・集石遺構2基の他、多くのピットを検出した。

SB201 調査区の東側で検出した規模の大きな総柱の掘立柱建物である。南側と東側が調査区外に続くため正確な規模や建物の棟の方向は不明であるが、現状で南北6間(12.3m)以上、東西3間(7.8m)以上である。柱間は南北方向が1.9～2.0mであるが、南端は2.4mと広くなる。東西方向が2.4mであるが、東端は2.9mと広くなる。柱間が変化する部分は掘立柱建物と掘立柱建物の間で、柱方向をそろえた別の掘立柱建物が並んで建っていた可能性も残っている。

SB202 調査区の西側で検出した掘立柱建物である。桁行4間(7.9m)×梁間2間(3.9m)、柱間は1.3～2.3mである。

SB203 調査区の北西側で検出した掘形が大きな掘立柱建物である。北側が調査区外に続くため正確な規模や建物の棟の方向は不明であるが、現状で南北3間(5.7m)以上、東西4間(7.0m)である。柱間は南北方向が1.4～2.5m、東西方向が1.3～2.0mである。

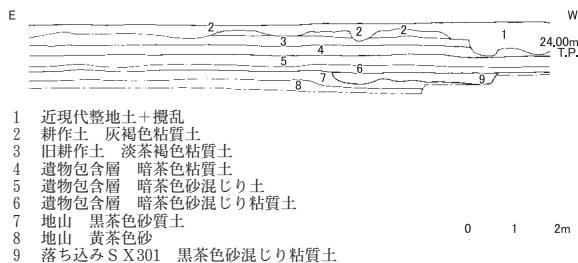


fig.129 南壁主要部土層断面実測図

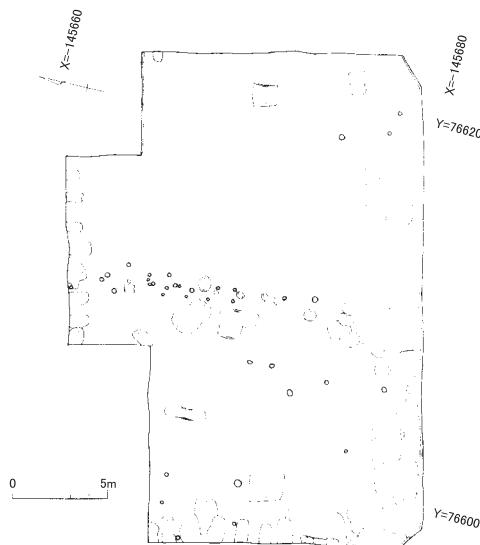


fig.130 第1遺構面平面図

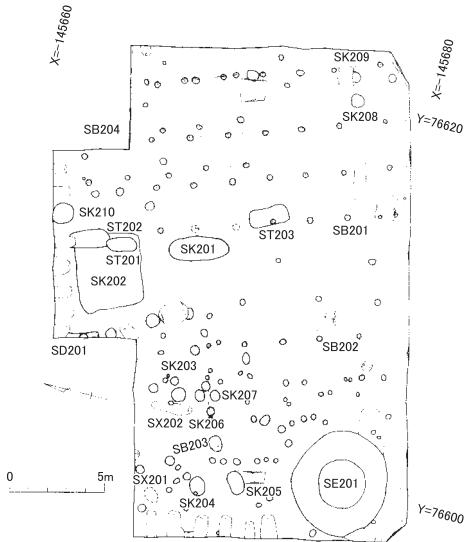


fig.131 第2遺構面平面図

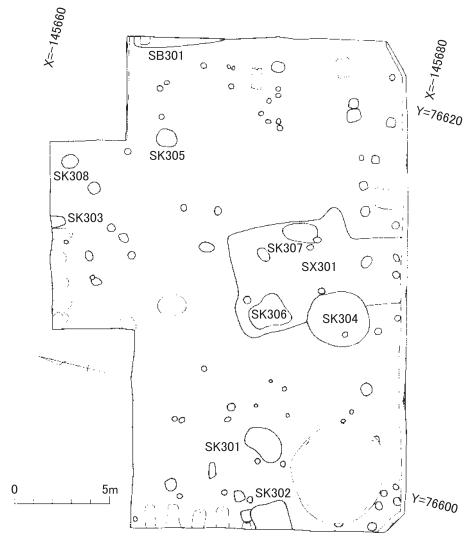


fig.132 第3遺構面平面図

SB204 調査区の北東側で検出した総柱の掘立柱建物である。北側と東側が調査区外に続くため正確な規模や建物の棟の方向は不明であるが、現状で南北4間（8.3m）以上、東西2間（4.7m）以上である。柱間は南北方向が1.9～2.2m、東西方向が2.2～2.4mである。

SD201 調査区北側突出部の西端で検出した小規模な溝である。北側が攪乱で破壊され、西端が調査区外に続くため全長や幅は不明であるが、現状で長さ1.8m以上、幅0.3m以上、深さ0.1～0.2mである。

SE201 調査区の南西隅で検出した井戸である。検出面での掘形は長径5.6m、短径5.1mの大きな橢円形であるが、深さ0.7～0.9mのところで急に小さくなり、直径2.4mの規模となる。その深さ以下の地山が非常に堅密な黄褐色砂礫になり、造られた際に範囲を大きく掘削する必要性がないと判断されたものと推測される。その部分からの深さ3.9m、検出面からの深さ4.6～4.8mまで掘削したが、1mのピンポールを突き刺してもまだ底に達しない状態であったため、安全性を考慮してここまで掘り下げを中止した。掘形の形状は下部に向かって円形から徐々に変化し、検出底では隅丸方形になっている。当初検出面での井戸枠の痕跡は明瞭ではなかったが、約0.5m掘削した深さで中心に直径約2mの円形の範囲で土質や色調が異なる部分を確認した。その範囲が井戸枠の痕跡と考えられるが、掘形との境界部分には木質は全く遺存していなかった。その範囲の形状も下部に向かって円形から徐々に変化していき、検出底では方形になっている。木質が遺存していないため推定の範囲を超えないが、井戸枠本体は方形であった可能性が高い。

SK201 調査区の中央で検出した長橢円形の土坑である。長径3.2m、短径1.3m、深さ約0.5mで、埋土は上が黒茶色粘質土、下が黒茶色砂混じり粘質土である。

SK202 調査区の北側突出部で検出した台形の土坑である。長さ3.6～4.2m、幅3.4m、深さ0.3～0.5mで、埋土は黒茶色粘質土である。

SK203 調査区の北半西側で検出した円形の土坑である。長径0.8m、短径0.7m、深さ約0.45mで、埋土は上から順に暗茶色粘質土、黒茶色粘質土、暗茶色粘質土が混和した黒茶色粘質土である。

SK204 調査区の西半北側で検出した円形の土坑である。長径1.0m、短径0.9m、深さ約0.4mで、埋土は黒茶色粘質土である。

SK205 調査区の西側中央で検出した長円形の土坑である。長径1.3m、短径0.8m、深さ約0.4mで、埋土は上が暗茶色粘質土、下が暗茶色砂質土である。

SK206 調査区の北半西側で検出した円形の土坑である。直径0.6m、深さ約0.35mで、埋土は茶灰色粘質土である。

SK207 調査区の北半西側で検出した円形の土坑である。長径0.6m、短径0.5m、深さ約0.2mで、埋土は茶灰色粘質土である。

SK208 調査区の南東隅で検出した不整円形の土坑である。長径0.8m、短径0.7m、深さ約0.5mで、埋土は中央が黒茶色粘質土、左側が暗茶色砂混じり粘質土である。

SK209 調査区の南東隅で検出した円形の土坑である。北側が攪乱で破壊されているが、直径0.7m、深さ約0.35mで、埋土は上が黒茶色粘質土、下が黒灰茶色粘質土である。

SK210 調査区北側突出部の北端で検出した楕円形の土坑である。北側が調査区外に続いているが、現状で長径1.2m以上、短径1.0m、深さ約0.4mで、埋土は黒灰色粘質土である。

ST201 調査区北側突出部の中央で検出した土坑墓である。掘形は長さ1.7m、幅0.7mの長円形で、深さ約0.2m、埋土は上が暗茶色粘質土、下が暗灰茶色粘質土である。遺骸の上には大きさ約0.25mの転磨した円礫が置かれており、その直下で人骨の足の部分が6本確認された。骨の方向から判断すると遺骸は東に体を向けて膝で足を折り曲げられた姿勢で埋葬され、足の上の部分に円礫が置かれていたことになる。また頭から顎の辺りの骨もわずかに残っていた。頭の前には青磁碗が1点、右手の辺りには鉄短剣が1本副葬されていた。青磁は傾斜して出土し、また鉄短剣は底から約0.1m上で検出した。

ST202 調査区北側突出部の中央で検出した木棺墓であるが、棺の痕跡は確認することができなかった。掘形は隅丸長方形で、北端が攪乱で破壊されているが、現状で長さ2.1m、幅0.8~1.0m、深さ約0.3m、埋土は黒茶色粘質土である。人骨は全く遺存していなかったが、遺骸の頭付近と推定される西隣に鉄刀子1本が東西方向に置かれ、さらにその上に和鏡が1面鏡背を上にして副葬されていた。和鏡の北側には白磁合子が蓋身揃って副葬されていたが、合子の隙間から中に徐々に入り込んだ泥の上面が底に対して傾いていた状況から判断し、恐らく頭側の棺小口に斜めに立て掛けられていたと推定される。掘形東側の斜面にほぼ接した棺外と想定される位置に土師器小皿4点を並べ、その内の2点の上に重なる状態で瓦器椀1点が副葬されていた。

ST203 調査区中央西寄で検出した木棺墓である。棺の痕跡は南端付近では判然としなかつたが、長さ約1.6m、幅約0.5mで、掘形の東端にほぼ接して配置されていた。掘形は隅丸長方形で、長さ2.1m、幅0.9m、深さ約0.2m、埋土は棺痕跡が暗灰茶色粘質土、掘形が灰茶色粘質土である。人骨は頭骨の一部と骨盤から大腿骨のあたりが遺存していた。遺骸の腹部付近に鉄刀子1本が副葬されていた。棺痕跡西側の掘形の底面にほぼ接した位置に土師器大皿1点を置き、その上に土師器小皿1点を重ね、少し南側に離れて土師器小皿が1点副葬されていた。土師器と人骨の位置関係を見ると明らかに人骨の方が約0.05m高い位置にあるため、棺の下に掘形を掘削した土を敷き均して棺を置いたことが明らかである。

SX201 調査区の北西隅で検出した集石遺構である。長さ0.1~0.2mの石の比較的平たい面を上にし、長さ0.9m、幅0.5mの範囲に17個の石を敷き並べている。石材はすべて花崗

岩類であった。明確な掘形は存在せず、石の下にも遺構は存在しなかった。

SX202 調査区の北半西側で検出した集石遺構である。西側半分が攪乱で破壊されているが、直径約0.3m、深さ約0.2mのピットに拳大以下の石を詰め込んでいる。石と石の間の埋土は暗灰茶色土である。

第3遺構面 弥生時代中期から古墳時代後期の遺構面で、竪穴建物1棟・土坑8基・落ち込み1基の他、多くのピットを検出した。

SB301 調査区の東端で検出した方形の竪穴住居である。大半の部分が調査区外に続いているのみを検出しただけであるが、現状で一辺4.7mである。深さ約0.2mで、埋土は暗灰茶色粘質土である。

SK301 調査区の西側で検出した不整橢円形の土坑である。長径2.2m、短径1.4m、深さ約0.7mで、埋土は暗灰茶色粘質土である。

SK302 調査区の西端で検出した方形の土坑である。調査区外に続くため全体の規模は不明であるが、一辺2.0mである。深さは約0.8mまで確認したが、工事影響深度の関係で掘り下げを中止した。埋土は暗灰茶色砂礫である。

SK303 調査区突出部の北端で検出した土坑である。調査区外に続くため全体の形状や規模は不明であるが、現状で長さ0.7m、幅0.7m、深さ約0.3mで、埋土は黒茶色粘質土である。

SK304 調査区の南半中央で検出した大きな不整円形の土坑である。長径3.2m、短径2.8m、底には若干の起伏があり、一番深い部分は深さ約1.4mである。埋土は灰茶色粘質土であるが、地山の崩れた土が底や斜面部分には堆積している部分もあった。

SK305 調査区の西半北側で検出した不整円形の土坑である。長径1.0m、短径0.9m、深さ約0.4mで、埋土は暗灰茶色粘質土である。

SK306 調査区の中央で検出した不整形の土坑である。長さ2.0m、幅1.8m、底には起伏があり、一番深い部分は深さ約0.5mである。埋土は東側が暗灰茶色粘質土、西側が灰茶色粘質土である。

SK307 調査区の南半中央で検出した橢円形の土坑である。長径1.8m、短径1.0m、深さ約0.3mで、埋土は暗茶色粘質土である。

SK308 調査区突出部の東端で検出した橢円形の土坑である。長径0.8m、短径0.6m、底には起伏があり、一番深い部分は深さ約0.3mで、埋土は暗灰色粘質土である。

SX301 調査区の南半中央で検出した不整形の浅い落ち込みである。南側は調査区外に続くため全体の規模は不明であるが、現状で長さ9.3m、幅3.5~5.5m、深さ約0.2mで、埋土は黒茶色砂混じり粘質土である。

22. 楠・荒田町遺跡 第54次調査

1. 調査の概要

明治14（1881）年の『兵庫神戸実測図』では当該地は田圃となっているが、昭和12（1937）年の地形図には「大同燐寸荒田工場」の記載が見られる。解体前の建物は兵庫県埋蔵文化財調査事務所として使用されていたものである。

今回当該地に神戸大学医療センター建設工事の計画が起り、平成24年4月と同年10月に試掘調査を実施したところ、遺構面や煉瓦積建物基礎が確認されたため、発掘調査を行なうこととなった。

なお当調査の成果は、平成25年度に「楠・荒田町遺跡第54次発掘調査報告書」を刊行しており、詳細については同報告書を参照されたい。

2. 遺構

発掘調査は建物解体作業及び残土置場の確保などの都合により、3回に分け実施した（I～III区）。

< I 区>

I区では、弥生時代中期の溝・ピット、平安時代の溝（土坑か）、江戸時代の自然流路・土坑と明治期の八角形煙突の煉瓦積基部・煙道を検出した。

①弥生時代中期の溝（fig.138） 弥生時代の溝は東西方向で、調査区南半で検出した。検出長約16m、幅約2～2.5m、深さ約0.8mである。溝の最上層には古墳時代後期の須恵器を含む土層が堆積する。

土器は畿内第Ⅲ様式でも新しい時期と推定されるが、未整理のため断定できない。溝埋土からは土器のほかサヌカイト剥片も出土したが、石器類はない。

②平安時代の溝（fig.138） I区の南西隅で検出したが、江戸時代以降の流路や現代のフーチングなどの搅乱によって破壊され、全体が明らかではない。溝または土坑になるものと推定される。規模も明確ではないが、長さ乃至径は2m以上になるものと思われる。平安時代の土師器、須恵器などが出土した。なお、搅乱中からではあるが、緑釉陶器の破片も出土している。

③江戸時代の自然流路・土坑（fig.138） I区の南西隅で弥生時代中期の溝、平安時代の溝（土坑）を切る状態で検出した、東西方向の流路である。検出長約13m、深さ約0.7mである。土坑は径2.5m、深さ約0.7mの不整円形で性格不明である。自然流路からは近世の陶磁器類、獸齒のほか土師器・須恵器なども出土した。

④明治期の八角形煙突・煙道（fig.133） I区北半部で検出した基部が八角形の煉瓦煙突で最下段から7段分が残存していた。径4m、高さは現存約0.8mである。八角形の相対する一边から東西両方に2本の煙道が延びる。煙突はまずセメント地業を行ない、やや雑然と2段に煉瓦を敷いた後、その上に整然と八角形になるよう構築されている。組積法はオランダ積である。煉瓦は大半が普通の形状のものだが、コーナー部には五角形の煉瓦を使用している。煙突部の組積に際しては目地にモルタルを使用するが、煙道部には使用せず積み上げただけの構造を採っている。東の煙道はI区北東隅にまで伸び全長約20mを測る。西の煙道は途中2本に分れII区に繋がる。煙道に使用される煉瓦は、壁部は基本的に普通煉瓦であるが、底面のそれは1コーナーが曲線を描く形状のものが目立ち、他の何

らかの建築資材を転用したものと思われる。

< II 区 >

II区では、弥生時代中期の溝、江戸時代の自然流路・井戸と明治期の煉瓦積建物基礎・煙道を検出した。

①弥生時代中期の溝 (fig.138) II区中央部の西端で検出した東西方向の溝である。幅約1.2m、深さ約0.6mで西は調査区外、東は攪乱によって破壊されており、全長は不明である。検出長4.5mである。埋土上層から完形の壺・甕が5個体と、焼成後の穿孔がある高环坏部が1個体出土した。北側から落ち込んだ状態で出土している。I区のSD01出土土器とほぼ同時期と思われるが、甕体部外面にタタキを残すことから、これより若干新しい時期になることも予想される。

②江戸時代の自然流路・井戸 (fig.138) 自然流路はI区のSD02と同一のものと考えられる。調査区南辺に沿って東西方向に走る。北肩は検出されたが、南肩は調査区外となっている。溝肩の一部に杭を打っており人の手が加わっていることが確認された。埋土中から近世の陶磁器類と共に12世紀後半～末ころの軒平・軒丸瓦の破片が出土した。検出長約20m、深さ約0.6m、幅3m以上である。

井戸は上面に自然石による2段の石組を持つ内径約0.7mのもので、井戸側及び水溜は円筒形となるよう幅10cm前後の縦板で構築されている。井戸側内部の埋土及び掘形から近世陶磁器の小片が少量出土した。深さは検出面から約2mまで確認したが、崩壊の危険があるためこれ以下は掘削していない。掘形の径は上面で約1.9mである。



③明治期の煉瓦積建物の基礎・煙道 (fig.133) II区南半部から東西方向に伸びる煉瓦積の建物基礎を検出した。東西22.5m、南北6mで内部は約5mおきに南北方向の基礎（地中梁）があり、建物内部は壁によって区切られていた可能性もある。綾杉状に煉瓦を敷いた床面の一部が、西端近くで残存していた。この床面に使用された煉瓦は通常の厚みではなく7.2cmあり、使用による摩滅を考慮し規格外のものを採用している。

南辺を除く基礎部は厚さ0.4mほどのモルタル上に3段の煉瓦を積んで構築される。南辺はコンクリート地業の上に3段の煉瓦を積み、その上に4段の切石積の石垣を構築している。この切石上に煉瓦積が2段分残る箇所があり、切石の上は煉瓦壁が立ち上がっていたものと考えられる。

石垣外面の下には東西方向の煉瓦を3列に敷き並べ、中央列の煉瓦を低くして断面を浅いU字形として雨落ち溝としている。雨落ち溝の使用煉瓦もやや特殊で幅15.5cm、長さ24.5cmを測るものである。溝の南辺は三角形の割石を並べて補強し、入念な作りとなっている。

建物床面下の内部からは煉瓦積の煙道などを検出したが、建物と同時期のものや建物基礎構築以前のものもあり、煙道の作り替えが確認された。煙道は建物の北側（II区北西部）でも出土しており、一部を残すのみだが大型で、断面が円形となるよう煉瓦で作られており、内径0.6mを測る。この煙道に使用された煉瓦は他よりやや古い傾向のものが含まれ、明治20年代末～30年代前半と見られる。構造も上記のように他と相違しており、当工場が堀川社、直木燐寸製造所と呼ばれていた時期の可能性もある。



fig.134 I区全景 (東から)



fig.135 II区全景 (東から)



fig.136 II区 SD01埋土堆積状況

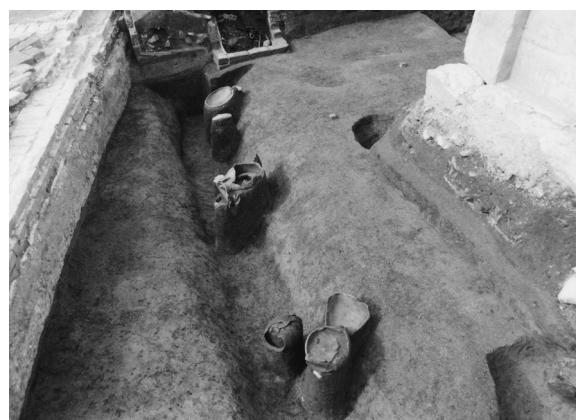


fig.137 II区 SD01検出状況 (東から)

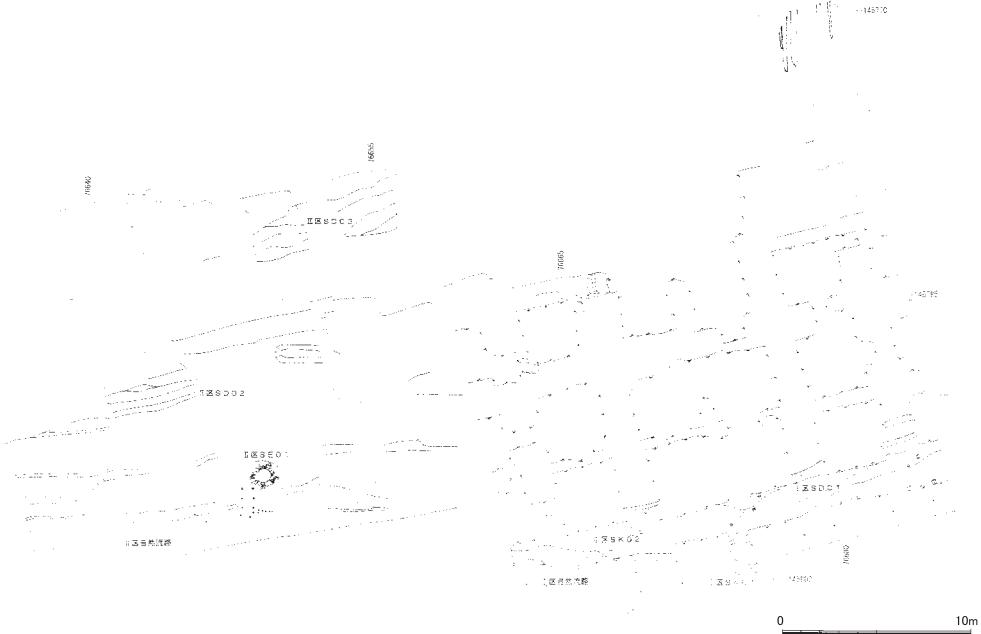


fig.138 I～III区弥生時代～江戸時代遺構全体図



fig.139 II区北西部検出状況（東から）



fig.140 II区東半検出状況（北から）

< III区 >

III区では、弥生時代の溝を検出した (fig.138)。

東西方向の溝で幅2.5m以上、検出長8m、深さ約0.4mである。埋土から弥生土器の他、土師器、須恵器、中国製青磁片なども出土し、混入が見られる。

3. 出土遺物

出土遺物には、弥生時代中期の土器類・石器、古墳時代後期の須恵器、平安時代の土師器・須恵器・綠釉陶器・軒丸瓦・軒平瓦、江戸時代の陶磁器類・銭貨、明治期の陶磁器・煉瓦（墨書のものを含む）・瓦（刻印瓦を含む）などがある。出土した明治期の瓦の中には刻印を有するものがあり、明石の地名を持つものが多く、この時代の瓦の生産及び流通を知る上で注意される。また数量の計算をしたと思われる墨書をもつ煉瓦を1点検出してお、建築工事の実態を知る上で史料となるものと思われる。

「煉瓦の墨書文字（実物は縦書き）」

壹□筋式百五拾有
四筋ニ千□外ニ拾壹□
四千四拾四個



fig.141 II区南辺検出状況（南から）



fig.142 II区 SE01（南から）



fig.143 II区煙道（東から）



fig.144 八角形煙突検出状況（西から）

4. まとめ

弥生時代中期の土器類は、機内第Ⅲ様式でも後半のものと思われる。同時期の遺構・遺物は今回の調査地から西へ約300m離れた第11次調査（現荒田駐車場）で纏まって出土しており、この時期の集落規模を知る上で、貴重な史料が得られた。今回のII-SD01の土器の出土状態を見ると完形のものがあり、方形周溝墓の可能性も否定できないが、検出範囲が狭小のため断定はできない。

平安時代、12世紀後半～末ころの遺物も少量ながら出土し、中に小片ではあるが軒丸瓦・軒平瓦を含むことは、この近辺に瓦葺き建物の存在を予想させる。

江戸時代については、調査区南辺で自然流路などを検出したに止まるが、流路肩部に杭が打たれていた事や、土坑、井戸なども検出したことは、当時の生活空間がこの周囲に広がっていたことを証明している。

明治期の煉瓦積の建物基礎や八角形煙突、煙道はこの地にあった獎拵社→直木燐寸製造所→日本燐寸製造株式会社→大同燐寸製造株式会社の工場施設の一部である。明治20年代～大正初期の燐寸生産額は兵庫県が全国の40～80%を占め、最大の生産地神戸の生産額は全国の40～50%に達していた。日本の明治20～40年における輸出品全体をみても燐寸は輸出額で第7位を占めていた。これより見ても当時の燐寸製造が神戸の基幹産業の1つと認識され、明治期の神戸のみならず日本の主要産業の1つであった燐寸製造業の実態を知る上で、今回の調査は重要な史料を提供するものと考えられる。

(参考) 大同燐寸関連年表

- i. 明治20（1887）年9月 直木政之助、泉仙、泉政、小西米吉らと「獎拡社」設立。
『神戸財界開拓者伝』によれば、当時の工場は、
荒田工場…荒田町2丁目
- ii. 明治29（1896）年9月 直木の単独経営となり「直木燐寸製造所」と改称したが、明治30年ころまで「獎拡社」の商号を併用していた。明治33年ころより工場を拡大し4工場となる。
明治35（1902）年『工場通覧』には、
本工場……荒田町2丁目 (M19年8月創業、職工：男81人・女355人)
第2工場…奥平野村 (M33年2月創業、職工：男48人・女72人)
第3工場…荒田町1丁目 (M34年5月創業、職工：男51人・女120人)
- その後、明治36年の『実業の誉』によれば、
本工場……荒田町2丁目
第2工場…奥平野村
第3工場…明石郡明石村
第4工場…石井村
- iii. 明治40（1907）年 明治社（本多義知）、三井物産と提携し、「日本燐寸製造株式会社」設立。
大正元（1912）年の『神戸市の工業』では、
湊町工場…湊町3丁目 (M40年1月創業、職工：男40人・女132人)
石井工場…石井村 (M40年1月創業、職工：男75人・女133人)
大開工場…大開通5丁目 (M40年1月創業、職工：男30人・女164人)
荒田工場…荒田町2丁目 (M40年1月創業、職工：男63人・女230人)
御蔵工場…御蔵通2丁目 (M40年1月創業、職工：男47人・女145人)
- iv. 昭和2（1927）年 スウェーデン・マッチ社、東洋燐寸株式会社（滝川儀作）、公益社（小林吉右衛門）と合併し「大同燐寸株式会社」となる。
- v. 昭和7（1932）年 大同燐寸が経営難となり、日産農林株式会社に経営が移るが、社名は「大同燐寸」のままとした。荒田工場は「日産農林工業神戸支店」となる。
- vi. 昭和48（1973）年 大東燐寸工業株式会社（日本紙軸燐寸製造所→船井燐寸株式会社→大東燐寸と改称）と合併し、ダイドー工業株式会社となる（現本社：神戸市中央区北長狭通）。

24. 祇園遺跡 第16次調査

1. はじめに

祇園遺跡は、天王谷川よって形成された扇状地の扇頂部から中央部付近に立地し、兵庫区上祇園町、上三条町、下祇園町、下三条町にかけて約15万m²の広さを持つ。これまでに15次に及ぶ発掘調査が実施され、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されている。第2・5次調査では、12世紀後半の園池と考えられる遺構から、多量の土師器皿・瓦類が出土し、当地の北東側にあたる第14次調査では、平家関連の在地有力者と考えられる屋敷跡の一部が検出されている。

2. 調査概要

平成24年4月に湊中学校・旧楠幼稚園内で試掘調査を実施した結果、T.P.4において多くの土師器片が出土したため、遺構の性格や広がりを把握するべく園舎にそって東西約4m、南北約10mの調査区を設定し確認調査を行なった。調査地の標高は約24.8mを測る。

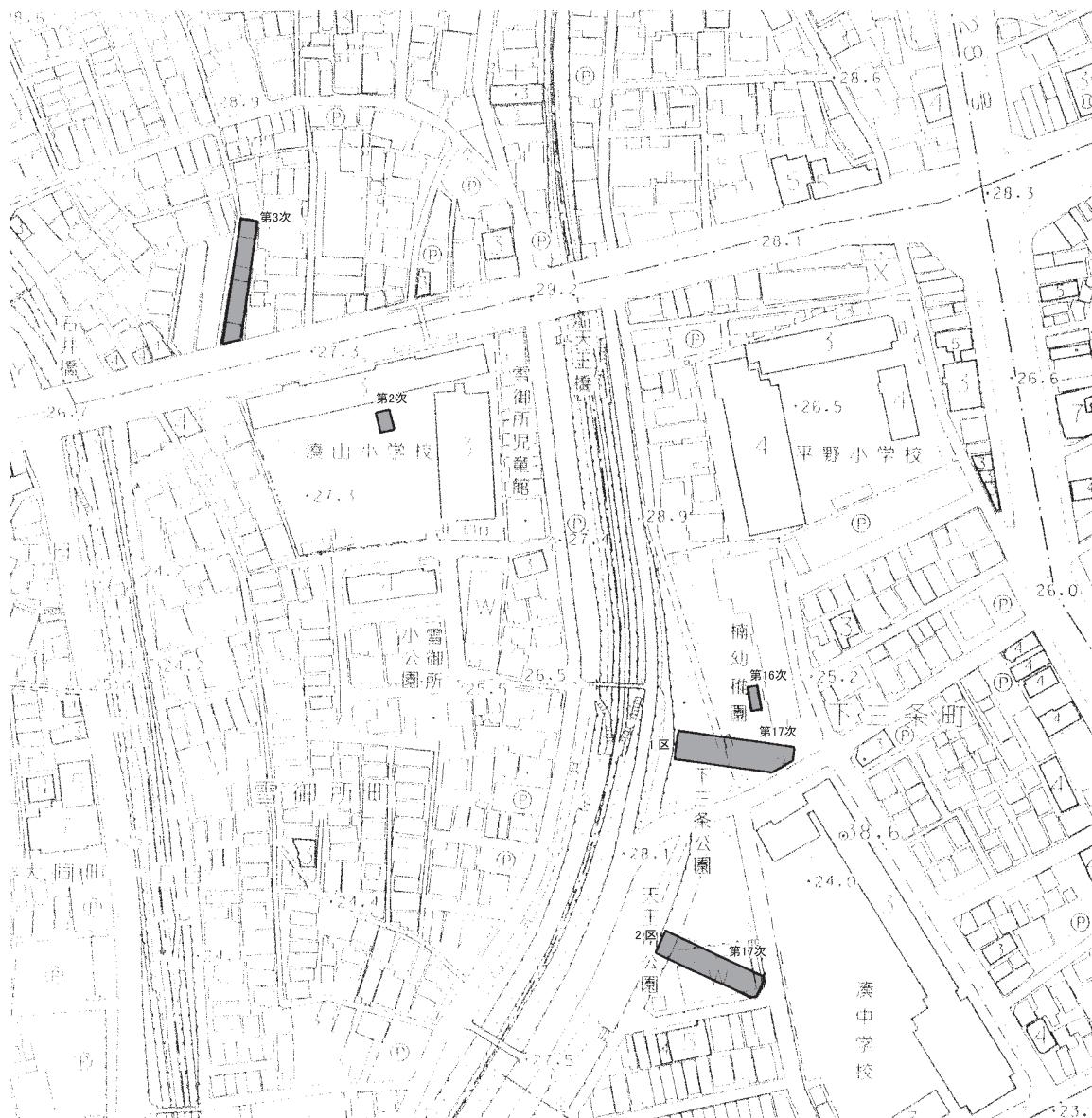


fig.145 調査地位置図 1:2,500

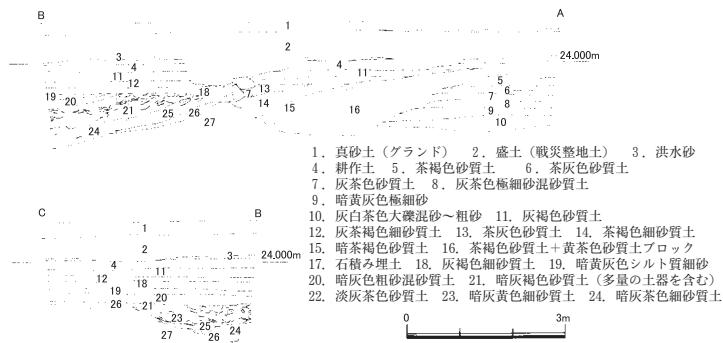


fig.146 調査区土層断面実測図（上段西壁・下段南壁）

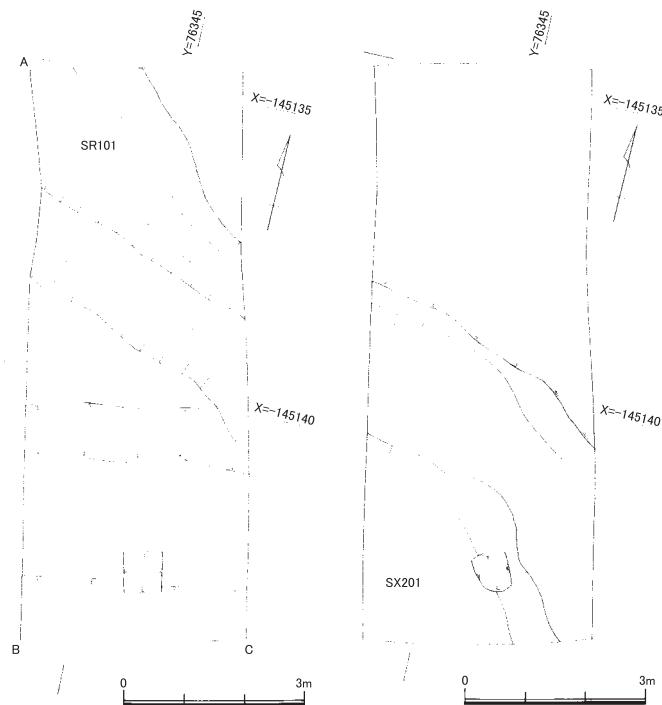


fig.147 第1遺構面平面図

fig.148 第2遺構面平面図



fig.149 SX201遺物出土状況実測図

基本層序 調査地の基本層序は、真砂土（グランド）、盛土（戦災整地土を含む）、洪水砂、耕作土と続き、G.L.-0.8mからは旧耕土となる。その下層 G.L.-1.2mで平安時代後半の遺物包含層である灰褐色細砂質土を確認した。

遺構 調査区南半・地表面下約1.4mで多くの土師器皿が集積した不定形遺構（SX201）を検出した。東西長約3.2m以上、南北長3.3m以上を測り、南西側に緩やかに傾斜する。調査区外に広がっており、全体規模・性格等は明らかではない。保存のために遺物が出土した段階で掘削を終えたため、正確な深さは判らないが、サブトレレンチで確認したところ約0.9mまで掘り下げた段階でも土器が出土した。深さはそれ以上と考えられる。遺物は、平安時代後期の土師器小皿の破片が多く、中に完形品も含まれる。その他少量の土師器中皿も存在する。須恵器・青白磁等は数点であった。何回か投棄が繰り返された結果と考えられる。

3.まとめ

遺物の出土状況から苑池遺構の存在が想定されたが、調査区の南西側で一部が確認されたのみで全体規模や性格を把握できるまでは至らなかった。遺構の時期は、概ね平安時代後期後半頃である。祇園遺跡周辺では、この時期の建物跡や苑池が確認されており、福原京関連の遺跡と考えられている。今回の遺構も屋敷地の一部の可能性があり、周辺の調査結果を待つて考察を行ないたい。

25. 祇園遺跡 第17次調査

1. 調査の概要

17次調査は、兵庫区北部東の平野小学校、湊山小学校、荒田小学校、湊川多聞小学校の統合事業に伴うもので、平成24年12月に湊翔楠中学校に移転した旧湊中学校跡地と旧楠幼稚園及び周辺の公園が対象である。新校舎建設工事に先立ち外周道に取りつく道路建設に先立つ調査で、公園内と旧楠幼稚園の敷地を1区、旧湊中学校のプール跡地を2区とした。

基本層序 現地表面は1区で、およそ T.P.24.500m、2区で、およそ T.P.23.000mである。

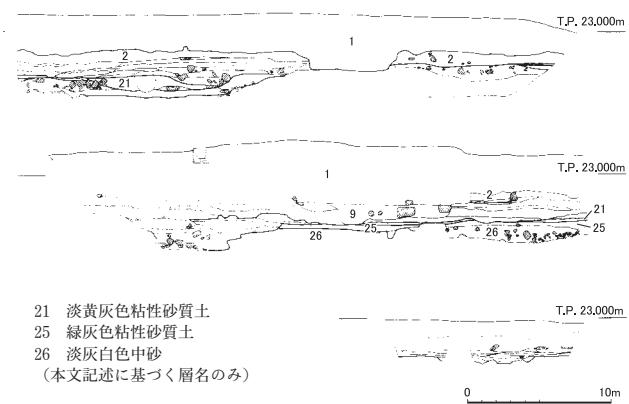
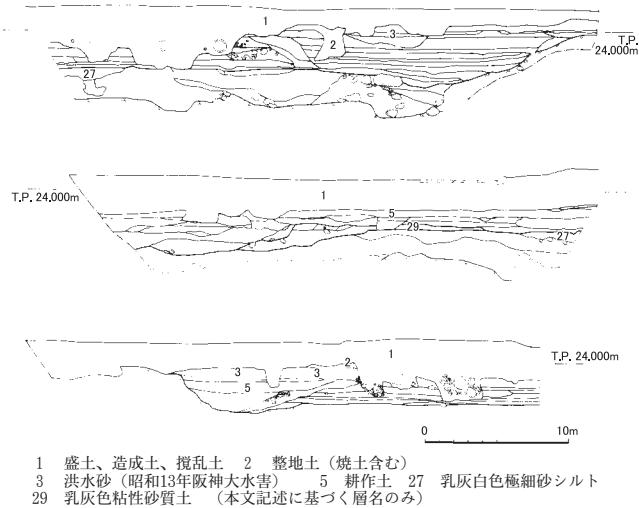
1・2区共に、調査区東端部において西側に急激に落ちる地形がある。

1区は現地表面から約0.6~1.0mは、盛土を含む造成土および攪乱土①である。その下層には、第2次世界大戦における空襲の焼土を含む整地層②、その下層に昭和11年の阪神大水害と考えられる洪水砂③が堆積している。その下層には近代から昭和初期にかけての耕作土⑤である。複数の旧耕土層が存在するものの、T.P.22.800mで第1遺構面となる近世の耕作土⑨乳灰色粘性砂質土となる。その下層、T.P.22.600mで平安時代末から鎌倉時代にかけての第2遺構面のベース層⑦乳灰白色極細砂シルトとなっている。

2区は、旧湊中学校のプールがあった場所であったため、ある程度の損壊が予想されていたが、現地表面から約1.0~2.6mは、盛土を含む造成土および攪乱土①②⑨であったため、プール建設工事による遺跡への影響はなかった。T.P.22.500mで第1遺構面の近世耕土である⑪淡黄灰色粘性砂質土となる。その下層には、第2遺構面で中世の耕土である⑯綠灰色粘性砂質土があり、T.P.21.100mで第3遺構面となる⑮淡黄灰色砂質土となっている。

なお、1・2区共に調査終了後に下層断割りを行なったが、土石流である褐色系の粗砂～円角礫が続いている。

1区 調査地は、旧楠幼稚園の園庭とその西側に隣接する公園内に付け変わる道路部分の調査である。調査区のほぼ中央部分に、調査区の北側にある住宅への150mm水道管があるため、この水道管を境に東西に調査区を2分した。



第1遺構面 盛り土、旧宅地面、戦災ガラ、阪神大水害と考えられる洪水砂、その下層には旧耕土があり、さらに洪水砂が分厚く堆積しており、その洪水砂を取り除くと東西方向に細長い圃場が検出された。この圃場は、南北幅が2m前後で、東西が長いもので10m、短くて2.5~4mのものである。この細長い圃場を南北に3列検出した。この圃場の西側には、石列を護岸とした水路を検出した。この水路の西側にも細長い圃場の耕土と同じ土が存在し、畦畔と思われる高まりが確認された。しかしながら、細長い圃場が磁北による東西方向であるのに対し、水路とその西側の畦畔は天王川の方向に沿った方向である。これらの圃場を覆う洪水砂には古墳時代の須恵器や中世の遺物に混り近世の陶磁器が含まれていることから、近世に発生した洪水で埋まった圃場である。東端は旧地形としての段があり、一段上がる地形を検出した。おそらく、河道と安定した河岸段丘の境に当たるものと考えられ、この段から西側は大水が出るたびに洪水を繰り返す地区であったと考えられる。

第2遺構面 第1造構面の耕土層を掘削すると、第2遺構面である。東端部の段の下には、

緩やかに落ちる溝状のへこみを検出した。その西は土石流による円角礫が露頭しており、近世に至るまでは旧耕土層が連綿と続いていたようである。調査区の西半において、試掘で大量の遺物が出土した地点でSX01とSK01を検出した。SX01は、東西5m、南北5mの不定形で、緩やかな鍋底状の窪みである。試掘坑を中心とした遺構の北側に集中して、底に敷き並べたように土師器の皿が大量に出土した。出土状態としては、2次調査において確認された池遺構の土師器の出土状態と似通っている。この土師器の集中する範囲の南側には組み上げたように石が集中する。石は大きいもので0.5m、大半は0.2m前後のもので、池に見られる州浜のように敷き並べたようではなく、集中して石が集められたように検出した。SX01の北側に隣接して、SK01を検出した。東西1.5m、南北1.9mの楕円形のもので、緩い丸底の土坑である。土坑内からは、土師器皿を中心として出土したSX01とは違い、瓦器、須恵器、土師器などの遺物が多く出土した。時期としては、平安時代末から鎌倉時代にかけての、

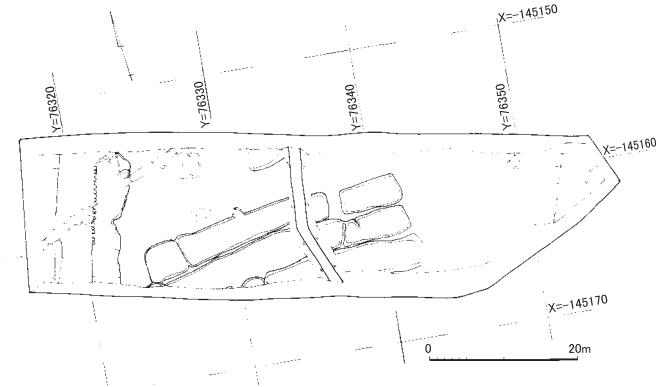


fig.152 1区第1遺構面平面図

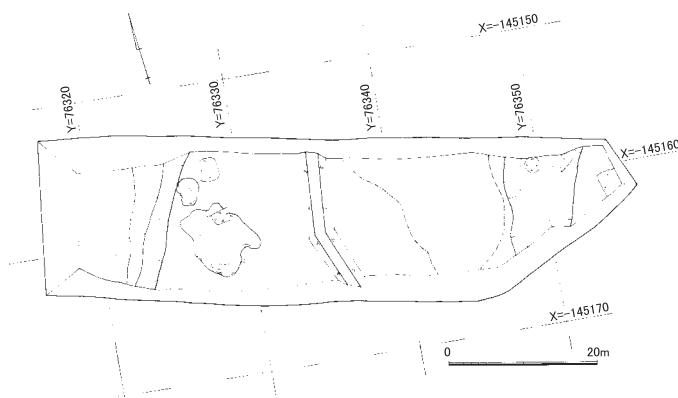


fig.153 1区第2遺構面平面図

福原関連と考えられる。

2区 旧湊中学校のプールと西側にある南北道路を直交して天王川左岸堤防の上から東に向けて取りつく新設の道路建設予定地区である。

第1遺構面 1区と同様に、上層から盛り土と旧宅地面、戦災焼土、阪神大水害、旧耕土とそれに伴う木製の暗渠を検出した。この木製暗渠は、松の細長い幹を暗渠内両側面に這わせ、その上に梯子状に細い木や枝を掛けた構造であった。これら旧耕土の下層には洪水砂があり、この洪水砂を掘削

すると1区同様、近世の圃場を検出した。圃場の形状も1区と同じであるが、2区で検出したものはさらに細長く、東西幅0.8m、南北幅11mを測る。この形状のものを調査区のほぼ中央部分で座標軸に平行に13列分を検出した。細長い圃場列の西側には2~3m角の圃場を検出した。さらに西側は土石流により削り取られている。東端は、1区同様に河岸段丘の上りがあるが、耕土層は周辺を盛り土する前の旧宅地面の影響で削平されている。

第2遺構面 近世の耕土層を掘削すると、近世圃場の方向と同様に正確な東西方向に石組の圃場段を検出した。使用されている石は大きいもので0.6m、大半は0.3m前後の自然石で、2段分を積んだように見える部分もあるが、精緻な作りとは言えない。西端には南北方向への石列を検出したが、のちの土石流の影響により崩れたようである。これらの石段を検出する土層からは15世紀代の遺物が混ざっていることから、室町時代に経営されていた圃場の段と考えられる。

第3遺構面 石組の段を取り除くと、西端の土石流とほぼ中央部でも土石流である礫層が検出され、西半のごく一部に包含層と第3遺構面を検出することができた。特に北側は良好に残っていたが、南側に関しては第2遺構面である中世の圃場面により削平を受けており、深い遺構の一部だけ検出できた。検出した遺構はピットが主体であるが、建物を構成する規則性は確認できていないが、ピットの中には柱穴と考えられるような深い掘り込みのものもあるので、建物が建っていた可能性も考えられる。調査区の中央部分は、東に河岸段丘の段があり、段下の湿地状になっていた地点を、中世の圃場造営時に石を点的に置いて整地したような痕跡を検出した。包含層からは、11世紀末から12世紀にかけての遺物が出土しており、遺構内からも同時期の遺物が出土することから、平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構が混在していると考えられる。

2.まとめ

今回の調査対象地区は、天王川の東に沿う地域で



fig.154 1区 SK01遺物出土状況（南西から）



fig.155 2区 2遺構面全景（西から）

あり、土石流や洪水が頻繁に発生する地帯の調査であった。現在の地図で見ると、旧湊中学校の西辺にある道を境として河岸段丘上に中学校が建設されており、川沿いは大規模な盛り土をし、さらに堤防も積み上げていくことにより、川の深さをとることにより、大雨の時の洪水を防いだものと考えられる。

祇園遺跡で最も注目される平安時代末の遺構に関しては、土石流によりほとんどが削られていたが、1区で検出したSX01は土師器皿の出土状態が一定のレベルで層状に堆積しており、第2次調査で検出した園池内の遺物出土状況が似ていることから、池の底の一部

分が残存し、池の畔になるような州浜などは、後世の圃場面造成時に削平されたものと考えられる。石が集中する部分もあり、あるいは池の水面に石を見せるための下部構造とも推定される。当地域は洪水や土石流に見舞われる不安定な土地であるにもかかわらず、1区での池、2区でのピットなどの生活痕が検出されることから、狭小な福原京域に無理やり宅地開発を行なったことが考えられる。

2区で検出した室町期の石段は正確に東西方向に並べられており、また、1・2区で検出した近世の細長い圃場についても正確に東西方向と南北に連なっていることから、当地域が福原京の条理を近世に至るまで残していたことがうかがえる資料である。なお、近世の細長い圃場に関しては、通常は山間地において、水田経営するときに見られるが、今回検出した細長い圃場は、南北に高低差があるものの、急激斜面でもないことから、地形によるものとは考えにくく、農産物から由来するものと考えられるが、今後当地域の農業史を解明する資料となる。

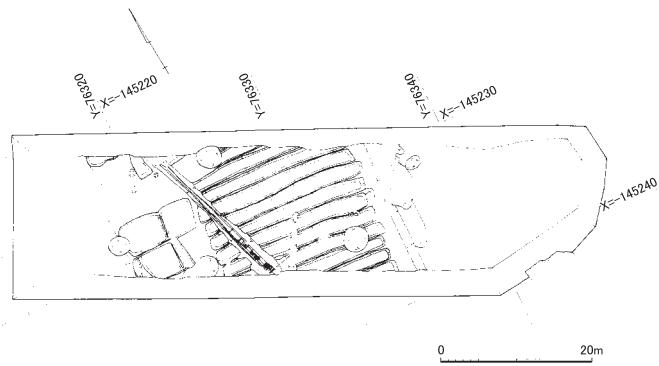


fig.156 2区第1遺構面平面図

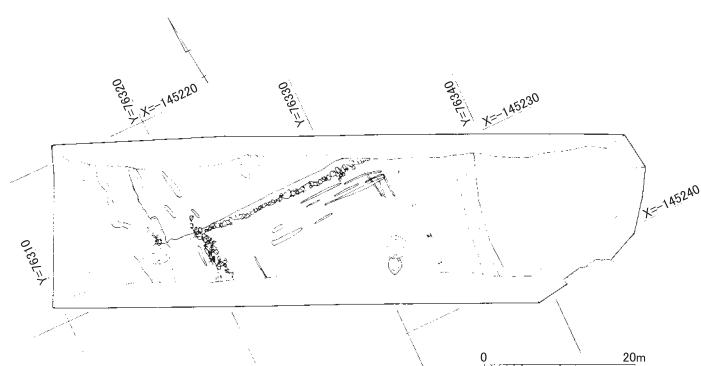


fig.157 2区第2遺構面平面図

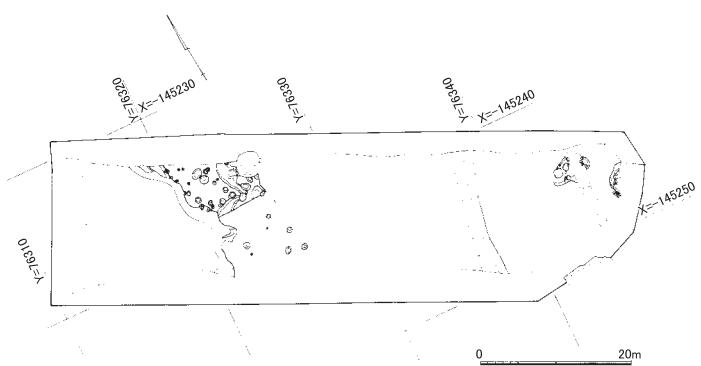


fig.158 2区第3遺構面平面図

26. 雪御所遺跡 第2次調査

1. はじめに

雪御所遺跡は、湊川に続く石井川と天王谷川によって形成された扇状地に立地する遺跡である。これまでに小学校周辺で弥生時代末～平安時代の遺物が散布していたことが記録されており、この時期の遺跡があることが示唆されている。明治31年湊山小学校の校地造成中に亀甲型の花崗岩の巨石と多くの瓦と土器が出土し平氏との関連が注目された。昭和61年度に小学校の校舎改築に伴い発掘調査（第1次）を実施している。この時の調査では、石垣・石列を3列検出している。

2. 調査概要

今回の調査は、平成24年3月に実施した物理探査（地中レーダー）のデータに基づき第1次調査で確認した石垣が、南側に延びていると想定して、その部分に南北長8.5m、東西幅6.5mの調査区を設定し石垣の検出に努めた。調査地の標高は約26mを測る。

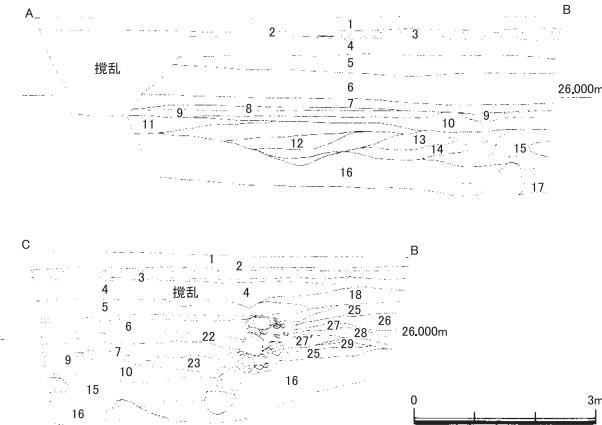
基本層序 基本層序は真砂土（グランド）、盛土、暗灰オリーブ色シルト混じり砂（耕作土）で、G.L.-0.6～0.7mに乳灰色砂層それより下層については巨礫を多く含む灰白色礫砂となる。後述する石垣は、中近世の遺物を含む灰白色砂の下で検出され、石垣から西側は中世後半の遺物を含む土で整地されている。また、中世整地土の下層 G.L.-1.5～1.6mからは灰白色礫砂となる。

遺構 石垣 調査区の中央に南北方向に石垣1列を確認した。この石垣は、昭和61年度調査の石垣1の続きとなる。石垣は主に花崗岩の自然石を使用し積み上げている。検出長約7.3m、幅0.8～0.9mを測る。石垣の検出面から基底部は2段、その上に3段積む構造である。

石垣の裏込めには、平安時代後半の土師器の小片とともに中世後半の土師器片も混在していることから、この頃に構築されたものと推定できる。また、石垣の前面には、上層は河川堆積物である乳灰白色砂～細砂が厚く堆積し、主に近世の遺物を伴っていた。この石垣の検出面から下層については、乳灰白色砂～灰白色砂礫が何度も堆積の方向を変えて堆積していることが窺えた。



fig.159 調査地位置図 1:2,500



1. 真砂土(グランド) 2. 盛土 3. 旧グランド 4. 暗灰オリーブ色シルト混砂
 5. 乳灰白色粗砂 6. 乳灰白色礫じり砂～粗砂 7. 淡灰褐色シルト混砂
 8. 乳灰白色砂 9. 灰オリーブ色細砂 10. 灰オリーブ色シルト混細砂
 11. 茶色細砂+灰白色砂(ラミナ状) 12. 淡茶白色細砂+乳灰白色砂(ラミナ状)
 13. 乳灰白色砂 14. 灰白色砂～細砂 15. 乳灰白色砂～細砂(ラミナ状)
 16. 灰褐色細砂+灰白色砂礫 17. 灰オリーブ色シルト混じり細砂 18. 灰オリーブ色細砂
 19. 灰色粗砂+黃灰色細砂 20. 黄灰色細砂+灰オリーブ色砂 21. 暗灰褐色細砂+灰黄色砂
 22. 乳灰白色砂 23. 灰オリーブ色粗砂 24. 灰オリーブ色粗砂 25. 灰オリーブ色シルト混砂
 26. 明灰オリーブ色シルト混砂 27. 暗灰褐色極細砂 28. 暗灰褐色極細砂+黄灰色細砂
 29. 灰褐色極細砂+黄灰色細砂

fig.160 調査区東壁・南壁土層断面実測図

きな花崗岩の自然石を含む乳灰白色砂～灰白色砂礫が深くまで堆積していることが確認できた。その結果、この河川堆積物の上に石垣を構築し、その西側に整地土を積み上げたと考えられる。

また、石垣裏込めに含まれる遺物は細片のみで時期を特定できるものはなかった。しかし石垣の西側の整地土に含まれる遺物は中世後半まで遡るもののが含まれているため、この時期以降の石垣といえる。

この石垣の用途は判然としないが、中世後半以降に旧天王谷川の護岸のため構築され近世の段階で川の氾濫で完全に埋没していることが窺い知れる。

今回の調査では、「雪御所」に関係する遺構の確認が期待されたが、検出された石垣は中世後半以降のものであることが明らかになった。

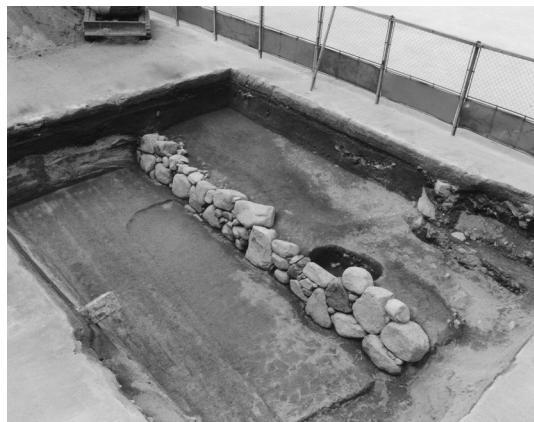


fig.161 石垣検出状況（北東から）

3. まとめ

今回の調査範囲は、昭和61年度調査の石垣1の続きを地中レーダーによる探査によって方向と範囲を決定した。その結果、石垣1の続きを確認でき更に南側にも延びていくことが予想された。明らかになった石垣の東側は、天王谷川の旧河道もしくは氾濫原と考えられる砂～粗砂層が厚く堆積し、近世から中世の遺物が含まれていた。

調査区の南端を東西方向に石垣の基底部より下の深さまで断割りを行ない、石垣の構築状況と土層堆積の関係に努めた。石垣の下部には、大

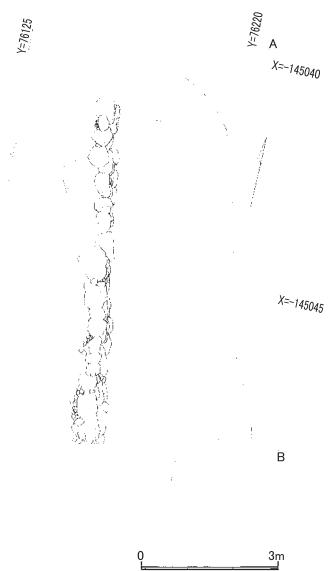


fig.162 調査地平面図

27. 雪御所遺跡 第3次調査

1. 調査の概要

今回の調査は店舗付共同住宅の新築に伴うものである。

基本層序 近現代の攪乱が多く基本層序の残る部分は少なかつたが、西壁北半の残存状態が良好な地点では、近現代整地土、近世頃整地土、遺物包含層、地山と続くことが確認できた。近世頃の整地土は暗黄色砂で、平安時代末頃と弥生時代末頃の遺物を含む遺物包含層は黒茶色砂である。地山は上層が淡黄褐色砂～粗砂で、攪乱の底ではその下層の淡黄色微砂が見えている。この2層は比較的粒度が均一な扇状地堆積物である。

検出遺構 壁穴住居1棟、溝2条、落ち込み2基の他、ピット27基が検出された。

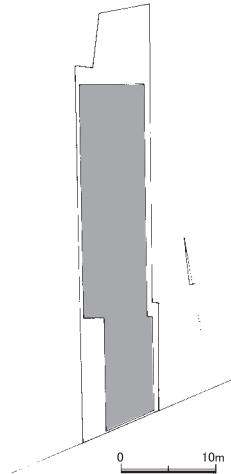


fig.163 調査範囲位置図

SB01 調査区南半で検出された円形の壁穴住居である。一部が調査区外に続き、攪乱で破壊された部分があり、地山が軟弱な砂層であることから遺存状況が悪い。床面には柱穴の可能性のあるピットが数基ある。深さはいずれも約0.3～0.4mである。中央には長径約0.8m、短径約0.6m、深さ約0.5mの中央土坑があり、そこから弥生時代末頃の土器が比較的多く出土した。

SD01 壁穴住居の南側で検出された短い溝である。長さ2.2m、幅0.3～0.4m、深さ約0.05mで、埋土は黄色褐灰色砂である。遺物は出土しなかった。

SD02 調査区北半で検出されたゆるい弧状になる溝である。調査区外に続くため全長は不明だが、現状で長さ3.6m以上、最大幅1.0m、深さは約0.15mで埋土は淡黄色砂が混和した灰色砂である。遺物は弥生時代末頃の土器が少量出土した。

SX01 調査区の中央で検出された大きな落ち込みである。多くの攪乱で損壊を受けていたため遺存状況が極めて悪いが、平面形状は略「S」字状に近い。北東・南東・南西側は調査区外に続いているため長さや幅は不明であるが、南北方向で長さ12.3m以上、幅は東西方向で5.6m以上である。底面は凹凸があり、深さは一定ではないが、深い部分では中央で約0.6m、南側で約0.5mの所がある。それ以外の深さは概ね約0.2～0.4mである。埋土は場所によって色調が異なるが、暗灰茶色系の砂が主体である。遺物は弥生時代末頃の土器と平安時代末頃の土師器が大量に出土した他、少量平安時代末の須恵器が出土した。

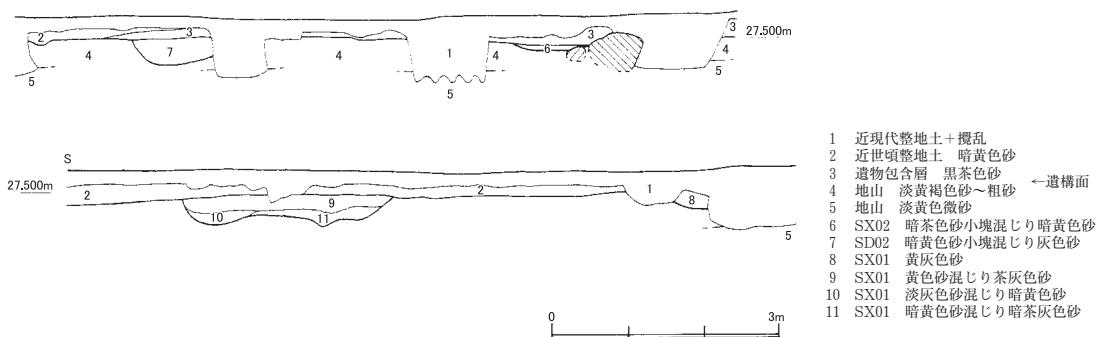


fig.164 西壁土層断面実測図

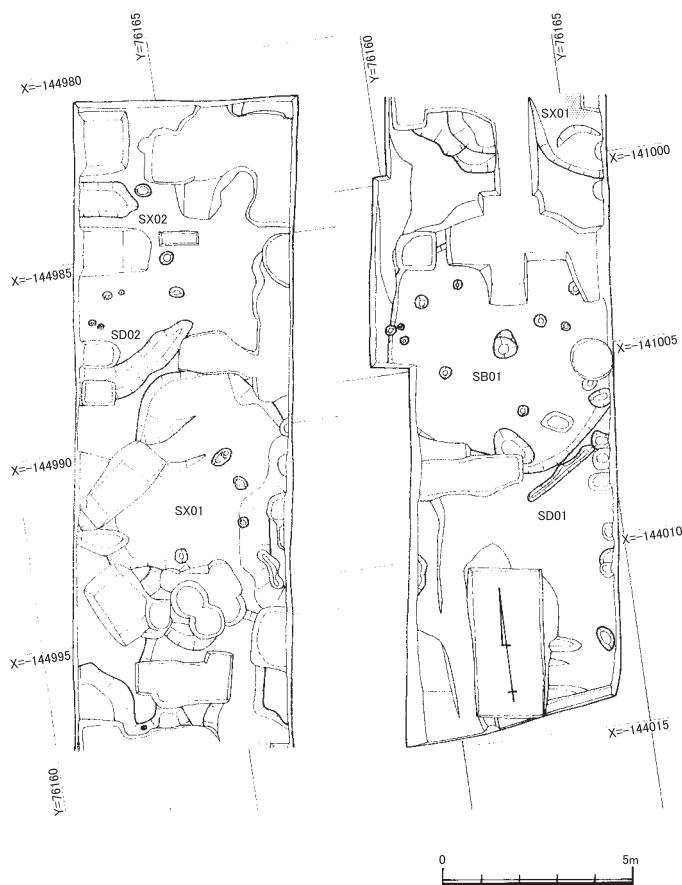


fig.165 調査区平面図



fig.166 SX01上面遺物出土状況（北から）

は、性格の良くわからないSX01のみで、建物や敷地を区画する溝ではなかった。当該地周辺はかなり削平されており、今後雪御所遺跡の範囲が北方へ拡がった場合でも、今回の調査地点周辺よりさらに削平が進んでいる可能性が高い。

また今回は弥生時代末の遺構も確認された。天王谷川の東側に隣接する祇園遺跡からも平安時代末頃の遺構面の下に弥生時代末頃の遺構面が確認されており、天王谷川を間に挟むものの両者は連動する遺跡であった可能性が高い。また雪御所遺跡の北側山腹には弥生時代の天王谷遺跡が、祇園遺跡の北側山腹には祇園神社裏山遺跡が存在している。天王谷遺跡と祇園神社裏山遺跡の現在実態は良くわかっていないが、これら4つの遺跡と、さらに南側の楠・荒田町遺跡を含めて遺跡の内容を検討していかなければならない。

また南端近くの埋土上面で平安時代末頃の土師器が集中して出土したが、SX01の傾斜に対応して出土しているため、SX01が自然に埋まっていた最終段階で土器が投棄されたものと考えられる。SX01の底面には粘土や砂利を敷き詰めた痕跡はなく、この遺構の平面形状からは庭園の池の可能性もあるが、そのような造作は全く見られない。

SX02 調査区の北西隅近くで検出された浅い落ち込みである。西側が調査区外に続くため全体の大きさは不明だが、現状で長さ1.5m以上、幅1.0m、深さ約0.1mで、埋土は暗茶色砂が混和した暗黄色砂である。弥生時代末頃の土器とサヌカイトが少量出土した。

ピット 調査区内に散在した状況で合計27基のピットを確認した。現状では掘立柱建物を構成するような配置のものは確認されなかったが、調査区南半東壁直下で検出されたピットには根石が設置されていた。

2. まとめ

平氏関連遺跡として名高い雪御所遺跡だが、発掘調査事例は少なく、実態が良くわからない。今回明確に平安時代末頃と言える遺構

28. 兵庫松本遺跡 第24次調査

1. はじめに

兵庫松本遺跡は、震災復興事業市営松本東住宅建設に先立つ試掘調査により平成10（1998）年に発見された遺跡である。以後震災復興区画整理事業に伴う発掘調査を重ね当調査が24回目（第24次）の調査となる。

遺跡は、市営地下鉄湊川公園駅の西約300mに所在する。旧湊川の右岸に位置し、旧湊川が形成した自然堤防上標高10m前後の箇所に存在する。遺跡の時期と種類は、縄文時代晚期から中世にかけての複合遺跡である。これまでの調査で、弥生時代前期の遺構や弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴建物、掘立柱建物、鎌倉時代の集落址などが検出されている。

今回の調査地は、平成23年度までに周知された遺跡範囲に北接する箇所である。平成24年3月、事業に先立ち試掘調査を実施したところ、遺物包含層が確認された。これにより遺跡範囲が北側に拡がり、事業計画の検討の結果、発掘調査の実施が必要となった。

2. 調査の概要

調査の方法

弥生時代1面、古墳時代1面、計2面の遺構面が検出された。調査範囲は、調査範囲位置図に示すとおりである。

調査地は斜面地の裾にあたり、北側道路より調査用重機の搬出入を行なった。北側道路と調査地とは高低差が約3mある。このため北側架設台より重機をクレーン車によって揚げ降ろしを行なった。

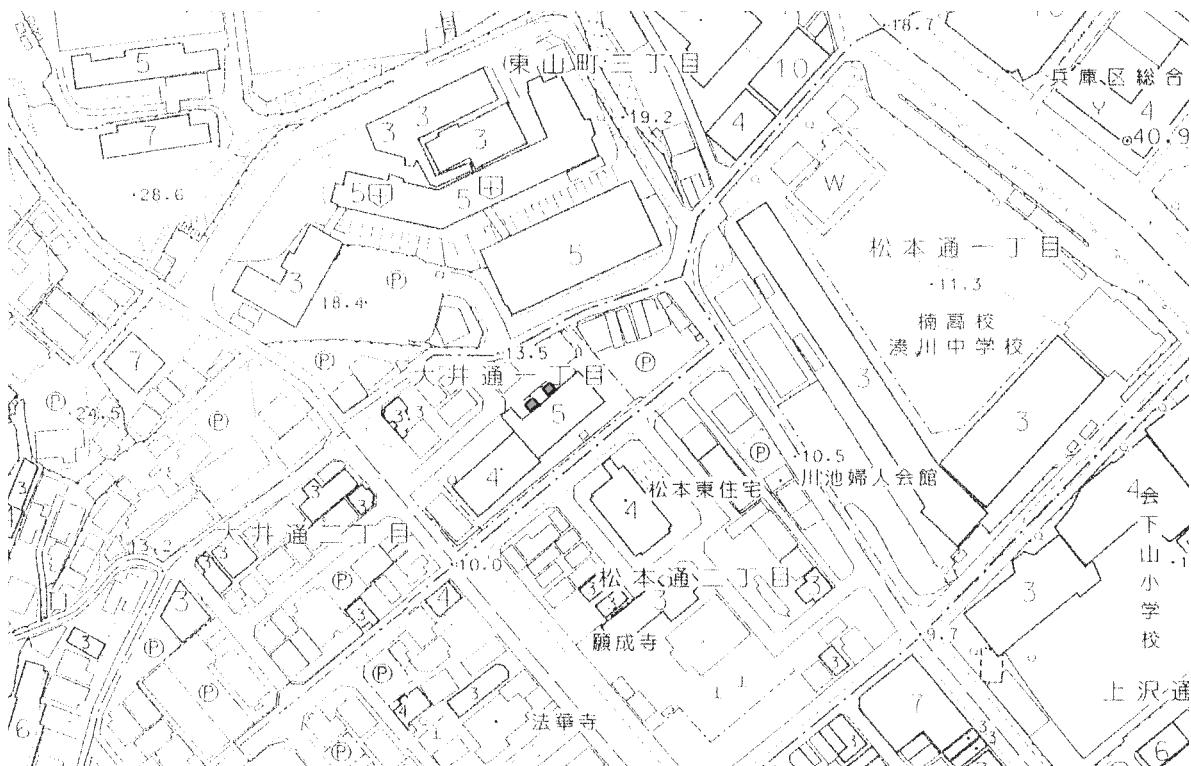


fig.167 調査地位置図 1:2,500

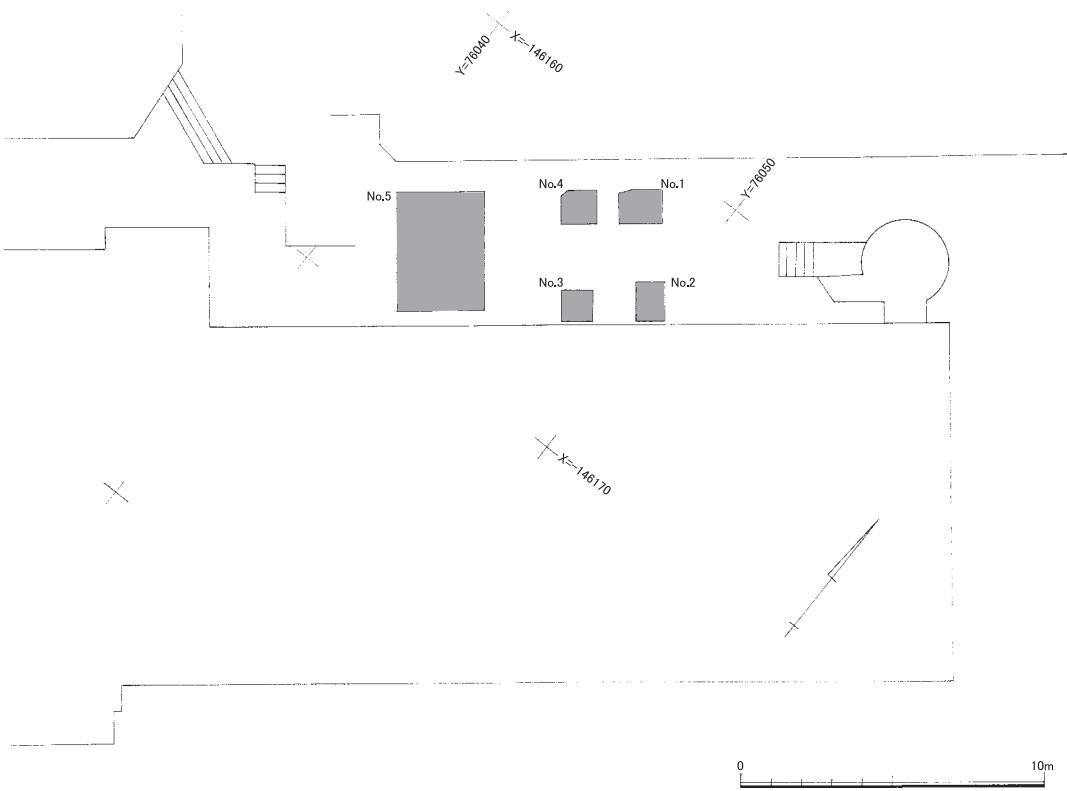


fig.168 調査範囲位置図

調査掘削残土を置くために便宜的に東半（No.1～4）と西半（No.5）に分割して調査を行なった。現代盛土などは重機により掘削し、それ以下を人力によって掘削した。調査区番号は調査区配置図に示した。No.5では、第1遺構面下層の遺構、遺物の状況を確認するために、南北方向に断割りトレンチを設定して調査を行なった。

基本層序

基本層序は、断面実測図に示すように上から1 現代盛土、2 搅乱土、3 旧耕土、4 暗灰色泥砂、5 灰色泥砂、6 褐色泥砂（古墳時代遺物包含層）、7 黄灰色泥砂（弥生時代遺物を僅かに含む）、8 淡黄褐色泥砂となる。4、5層からは少量の土師器、須恵器が出土した。

第1 遺構面

No.1～5では6層を掘削し、7層上面が第1遺構面となる。No.1～4では平面的に些少であることもあるが、遺構は検出されなかった。6層に含まれる土師器から古墳時代頃と考えられる。No.5では、南北方向に幅1m弱の浅い落ち込み状遺構が検出された。

第2 遺構面

No.5では、工事影響レベル以下の層序など確認するため、断割りトレンチを設定した。7層から僅かに弥生土器片が出土した。幅0.6m、深さ0.1mの溝状遺構が検出された。遺物は出土しなかった。

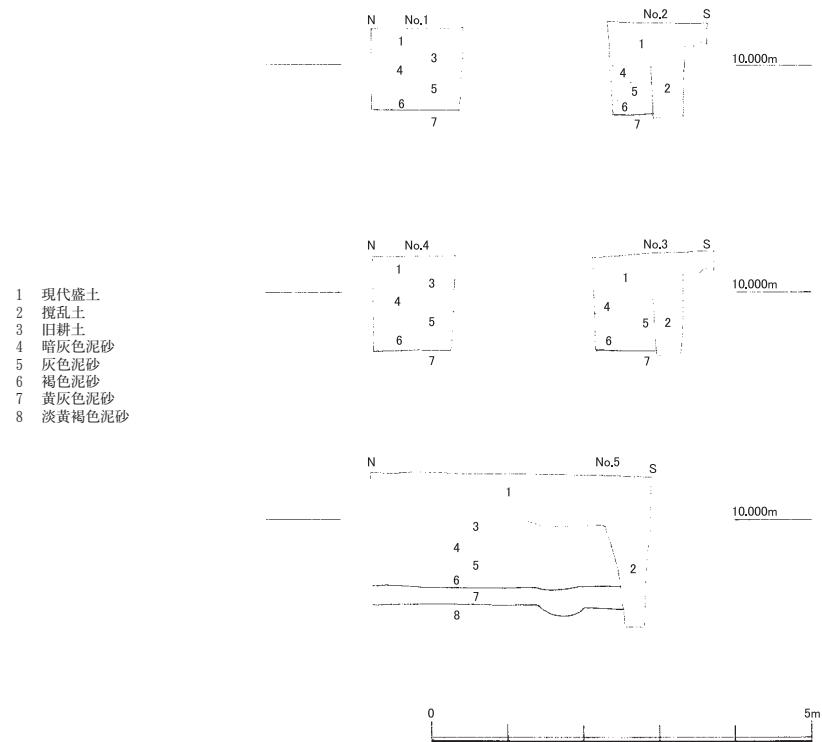


fig.169 調査区南北方向土層断面図



fig.170 No. 1 ~ 4 掘削作業状況



fig.171 No. 5 遺構面検出状況

3. まとめ

遺構面は2面検出された。出土遺物は14ℓ入コンテナに1箱であった。基本層序で示すように、堆積土は基本的に砂層をベースとしており、穩やかに堆積した土壤である。

検出された遺構面2面が、安定した面とは断定し難いが、これまでの調査成果と整合性はあるようである。また今回の調査で、遺構は希薄であるが、遺跡が北側に拡がることが確認できた。

現状で述べた遺構、遺物の詳細な時期については、今後の調査内容と整理作業に期したい。

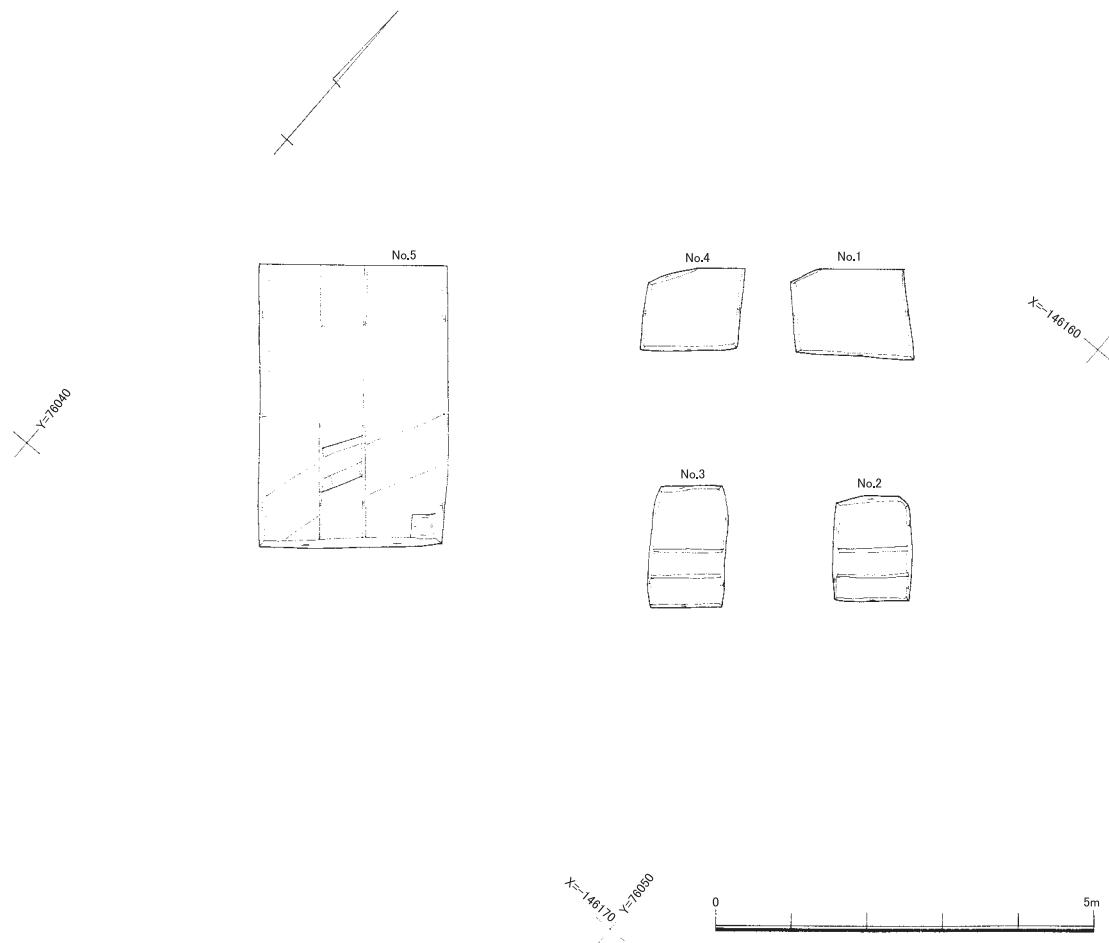


fig.172 調査区平面図

29. 兵庫津遺跡 第57次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、兵庫区の南部、JR 兵庫駅の南東側に広がる広範囲な遺跡である。兵庫津は、瀬戸内海に突き出た和田岬によって波風を避けられる天然の良港であり、古くから栄えた。これまで56次におよぶ調査が行なわれている。近年の調査では平安時代の遺構や遺物も発見されているが、質量共に大半を占める遺構・遺物は、近世以降の「兵庫津」に関連するものである。

今回の調査地は、天正9（1581）年に池田恒興によって兵庫城が築かれた場所と考えられている。『摂津八部郡福原庄兵庫津絵図』（元禄9年：以後『元禄絵図』と記す）には

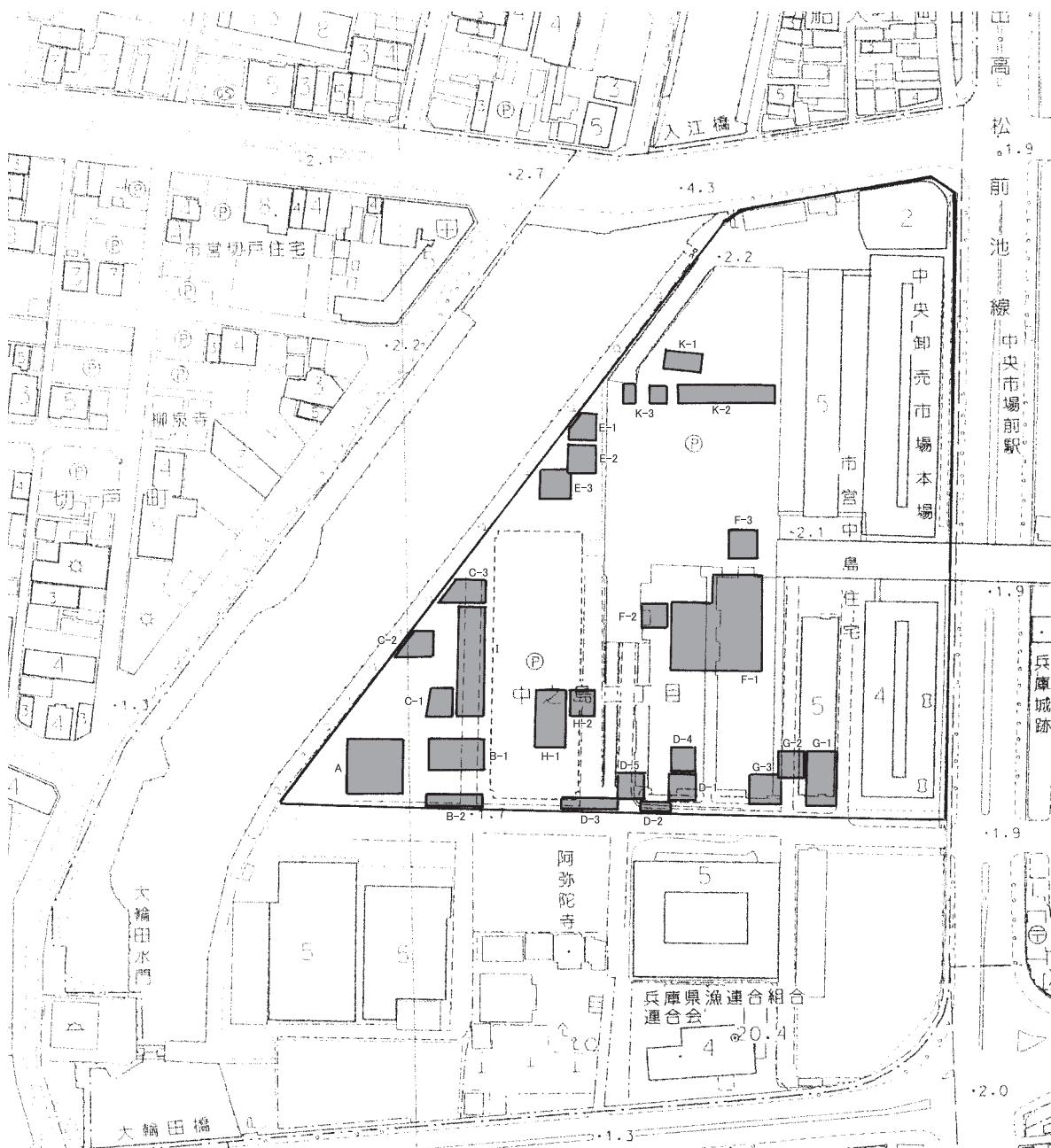


fig.173 調査地位置図 1:2,500

「御屋敷」と表現されており、D字形の堀や東西の門が描かれている。その後、明和6(1769)年には、尼崎藩領だった兵庫津が幕府直轄領となった。これに伴い兵庫城跡には勤番所が置かれ、堀は幅を狭めて埋め立てられたと記録されている。文久2(1862)年の『兵庫津之圖』では、堀は完全に埋め立てられ、その名残が町割りの水路として残っている様子が伺える。御番所(勤番所)は北側半分の区画のみで、周囲は町屋になっていることもわかる。明治元(1868)年には兵庫県庁が置かれたが、4ヶ月ほどで移転し、明治7(1874)年に新川運河開削により大半が削平される。兵庫城跡の調査は、平成16年度に行なわれた第35次調査が最初である。兵庫城の北西隅を調査した。このときに検出した石組溝は、おそらく明和6年の上知令により、堀が幅を狭めて埋め立てられた後の石組溝と考えられる。

このように、江戸時代における堀の埋め立てや明治時代の新川運河開削などにより、兵庫城の実態は不明であった。今回の調査がはじめての兵庫城の本格的な調査となる。

2. 調査の概要

今回の調査は、旧中央卸売市場本場における汚染土除去工事によって、埋蔵文化財が影響を受ける部分について行なった。また、兵庫城の範囲確認のための調査区も設定している。
A区 第1遺構面は、18世紀から19世紀代の遺構面である。攢乱によってかなり遺構面が壊されており、そのために複数面の遺構を同時に検出している。

第2遺構面は、およそ18世紀後半代の遺構面であるが、一部に17世紀代の遺物を含む遺構も確認している。

B-1区 攢乱が深く及んでいたため、複数の時期の遺構を1面で検出している。

B-2区 工事の影響が及ばず、調査は遺構の平面での検出にとどめたため、検出した遺構の明確な時期は把握できていない。

C-1区 T.P.0.3m~0.1mで遺構を確認した。木枠遺構(SX101)、土坑(SK101)などを検出した。ピットは、直径0.2~0.4mで、建物を構成するようなものではない。18世紀後半以降の遺構面と考えられる。

C-2区 工事の影響が及ばないため、調査は遺構の平面での検出にとどめた。石組み



fig.174 E-1区石垣検出状況（南西から）



fig.175 E-1区石垣・堀検出状況（西から）

の基礎部分を確認した。I 区で検出した木組み遺構 (SX201) の延長と考えられる。

C－3 区 西側は新川運河に接しており、新川運河開削時に大きく削平を受けている。この調査区での汚染土壌の除去深度内では攪乱のみが確認され、遺構面には達していない。調査は影響深度、深さ1mをもって終了した。

D－1・2 区 上部の攪乱が著しく、第1遺構面では土坑や不整形な遺構などおおむね18世紀代の遺構を確認した。第2 遺構面では、土坑や不整形な遺構などおおむね18世紀前半の遺構を確認した。

D－3 区 工事の影響が及ぼず、調査は遺構の平面での検出にとどめたため、検出した遺構の明確な時期は把握できていない。検出した遺構は、複数の土坑、井戸などである。

E－1 区 井戸と石垣を検出した。井戸は内面が六角形になる石組みがあり、内部には大きな石が投棄されていた。湧水部には、幅10cmの板材を使用した桶が埋め込まれる。井戸からは微細な遺物が少量出土するのみで、時期を特定できない。

石垣 石垣は、南東方向に長さ 6 m、高さ 4 段分1.5mの規模である。使用石材は自然石がほとんどであり、僅かに転用石が用いられている。裏込めの幅は0.5mもなく、人頭大の石を用いており、比較的小ぶりで石種も多種に及んでいる。また、石垣の中央には目通りが観察できる。この目通りを境に積み方が異なり、西側は最下段の石がその上の石よりも少し前にせり出した積み方である控え積、東側は野面積である。石垣の普請単位をあらわすものと推定される。石垣構築に際して複数の石工集団が関わり、石工の技術の差が積み方に現れたものと考えられる。この石垣は、『元禄絵図』に描かれている馬出と主郭を隔てる堀の主郭側の石垣と考えられる。堀底の標高は T.P.-0.9mを測る。

なお、検出した石垣の下からは、石垣と交差する状態で土留に使用したと考えられる杭列と横板を検出した。横板は 5 m ほどの長い一枚の板であった。石垣との構築順序からすると、この土留状の構造物が先行して構築されている。石垣に転用されている石には円形の柱座を削り出した礎石などが複数含まれることも判明しており、大掛かりな土留遺構と合わせて、兵庫城築城以前に大きな建造物があったことが想定できる資料である。

E－2・3 区 新川運河開削時に大きく削平を受けており、汚染土壌の除去深度では攪乱のみが確認された。調査は、影響深度の深さ 1 m をもって終了した。

F－1 区 調査区の東半部では町屋の遺構を確認し、西半部では兵庫城に伴う堀と石垣を検出した。

最上層遺構面 幕末以降の街区の縁石などを利用しながら、区画をほとんど変えずに昭和まで家が継続して使用されていたものと考えられ、コンクリートとレンガを利用した町屋の跡が検出された。

石組溝 レンガを底に敷き詰めた石組溝は、底を上げながら改修を重ねていることが、石組の組み方、使用石材の種類で推測できる。1期目は、最下段に使用されているもので、転用石を多く用いている。2期目は、比較的切り石に近く表面を玄能研したものを1期目の石の上に2段～3段積んでいる。3期目は、間知石を用いている。この間知石の改修時期は、1889年と鋳込まれた鉄製水道管が敷設された大正期に相当すると考えられる。その上に、4期目として、レンガや瓦を底部に敷いた昭和期の溝が構築されている。

東辺の石組溝では、東と西の石組で底の高さに違いがあり、西側の石組の下には、粘土層が堆積していた。このことから、東側の石組は江戸時代初頭に石垣として改築していた

可能性がある。

石垣 東辺の石組溝を取り除くとその背後から、さらに底が一段下がる石垣を検出した。この石垣は、『元禄絵図』に描かれた東辺城外側の石垣と考えられ、長さ30m、高さ4段分1.7mを検出した。石垣には多くの転用石材が使用されており、石垣の表には、五輪塔の地輪部や石塔、周囲を結ぶ釘抜や地覆石等の石材が多く用いられている。中には、梵字などが刻字されており、「文亀四年月日」(1504年)と年号の刻まれたものも存在する。石垣の裏込めには、一石五輪塔の地輪部を打ち欠いた残余を大量に栗石として使用している部分も見られる。

東辺城外側石垣に対面する城内側の石垣も、検出することができた。『元禄絵図』では、隅円形の馬出状の郭が描かれており、その南東隅が検出した地点にあたる。検出した石垣は、南北14m、高さ3段分0.9mを測る。石垣の平面を見ると0.8mほどの自然石を二列に並べ、それぞれの石列には裏込めに栗石が積まれていた。

堀 東西に城内側、城外側の石垣を検出し、堀の規模を確認することができた。堀幅は15m、堀底は標高T.P.-0.8~1.0mを測る。堀の南辺については、18世紀以降に構築された石組溝が存在したため、石垣を検出するには至らなかった。石組溝に伴う裏込めのさらに南側から、石垣の裏込めに使用されている石と同様の栗石を検出している。しかし、この栗石の間から出土する遺物は17世紀代のものであることから、当初の石垣から堀の内側を埋めて堀幅を狭めた際の石垣の裏込めである可能性がある。よって、今回の調査区の南側において築城当初の石垣が存在していることも考えられる。

町屋跡 東半部では、従前建物の独立基礎による攪乱が著しく、面的な遺構を検出することが困難であったが、江戸時代を通して町屋が存在したものと考えられる。生活面は8面確認できた。下層の遺構面では、大規模な整地がなされており、兵庫城築城時に造成を行なった可能性が考えられる。



fig.176 F-1区全景（南西から）



fig.177 F-1区石垣・堀検出状況（南から）

F-2区 従前建物の基礎などで汚染土壌の除去深度内では搅乱のみであった。しかし、F-1区の調査結果から『元禄絵図』に見られる馬出状の郭に当たるため、部分的に下層確認をし、搅乱を受けていない層を確認した。その結果、堀の中から出土する粘土層はなく、地盤を形成する土層が存在することから、絵図に見られるとおり、馬出状郭の内面に相当する地区となることが確認できた。

F-3区 従前建物の基礎などで汚染土壌の除去深度内は搅乱のみで終了した。

G区 搅乱が著しく、工事によって影響を受ける範囲では遺構面は確認できなかった。

H-1区 従前の建物基礎による搅乱の深度が深く、ほとんどが削平を受けていた。島状に残った部分的な遺構面観察により、町屋が存在したであろうことがうかがえた。

H-2区 従前建物の基礎などで汚染土壌の除去深度内は搅乱のみで終了した。

I区 本丸の南側に位置し、堀跡が検出されるものと想定された。3面の遺構面を調査し、北半部では城内側、城外側の石垣、南半部で町屋跡を確認した。

最上層面 造成土を除去した直下で検出した面は、間知石やレンガを使用し、戦災ガラを埋土としているため、明治時代以降の面であると考えられる。北側で検出した石組溝は、新川運河に直行しており、運河開削後の土地利用に起因しているものとみられる。

第1遺構面 レンガ等を使用する最上層面の下層を第1遺構面とした。出土遺物などから、18世紀後半以降の遺構面ではないかと考えられる。

石組溝 新川運河に直行する石組溝の下層から東西方向の石組溝を検出した。東端は明治時代以降の石組溝によって削平されている。下端で幅1.25m、上端で幅1.7mを測り、深さは0.65mである。石材は大きいもので長さ0.6m、小さいもので長さ0.2m、表面は玄能研加工されている。明和6（1769）年の上知以降に、堀の埋め立てにともなって造られた溝の可能性がある。

町屋跡 南半部では、町屋跡を検出した。土坑、ピット、柱穴などを検出しているが、明確な屋敷地のプランなどは把握できていない。

南半部の西側では、焼土が多く堆積する範囲が広がっていた。その範囲の中で、平面長方形の土坑4基を検出した（SK104・105・110・112）。規模は長辺0.7～0.9m、短辺0.4～0.5m、検出面からの深さ0.35～0.5mである。壁面は、瓦を平らに使用して支持体としな



fig. 178 F-1区東辺城外側石垣検出状況（北西から）



fig.179 I区全景（南東から）

がら、粘土と瓦を互層に積み上げ、厚さ0.1mほどの粘土壁をめぐらせている。粘土は火を受けて赤褐色に焼けていた。均一に強い火を受けていたものと考えられる。底面に長方形の石を置いているものも2基あった。これらの土坑の用途は不明であるが、一般の居住地に伴うものではなく、なんらかの製作工房と推測する。

第2遺構面 第1遺構面より下層であるが、時期差はほとんどないと考えられる。

木組み遺構 北半部では、板材と丸太杭を使用した木組み遺構を検出した。堀を埋めた地盤を強固にするためか、居住地の床下倉庫（地下室）なのか、用途は不明である。なお、第1遺構面の石組溝と近接しているが、切りあい関係はない。検出面の違いや土層の堆積状況から、異なる遺構面であると判断したが、おそらく大きな時期差はなく、同時並存していた可能性もある。

町屋跡 南半部では、ピットを数基確認したのみである。第2遺構面としているが、北半部とは検出面にも高低差があり、同時期とは考えにくい。第1遺構面の削平を大きく受けている。

第3遺構面 北半部では、兵庫城の南辺にあたる堀と石垣を検出した。南半部では、町屋跡を検出した。城内側と城外側の石垣を検出した。堀幅は約18m、九間を測り、堀底の標高はT.P.-0.8mである。城内側の石垣は、長さ10m、高さ0.7m、2段分を検出した。積み方は野面積みで、最下段には五輪塔の火輪部、宝篋印塔の屋根部などを転用している。裏込めは狭く、一石五輪塔などが栗石として転用されている。宝篋印塔屋根部の耳飾部分1石も栗石の中から出土した。石垣を構築する過程で打ち欠いたと推定される。石垣の掘形は、標高T.P.0.1mで検出しているので、石垣の高さは少なくとも0.9mほどと想定できる。

城外側の石垣は、長さ10m、高さ1.3m、3段分を検出した。積み方は野面積みであるが、2、3段目には間詰め石が著しく少なく、石が相互に組み合っていない積み方をしている。結果として、上段ほど前傾してきてしまっている。積み方があまりにも粗いので、2、3段目は一度崩壊したものを積みなおした可能性がある。石積みの状態から、専門の工人ではない人々が行なったことが考えられる。石垣の掘形は、標高T.P.0.7mで検出した。石垣の高さは少なくとも1.5mほどと推定される。

城内側の石垣は、転用石材を多く用いていること、野面積みであることなど、他の調査区で検出した石垣と類似しており、天正期に造られた兵庫城築城当初の石垣であると考えられる。

町屋跡 南半部では、町屋跡を検出した。土坑、ピット、溝、竈などを検出している。第3遺構面としているが、城外側石垣の掘形に近接した位置で検出している遺構も多いため、堀や石垣が機能していた時期より新しい遺構面であると考えられる。この第3遺構面の下層には遺構面がないことを確認した。堀を埋める際に大規模な造成が行われ、堀が機能していた時期の遺構面は削平されている可能性がある。

K-1区 K区は、兵庫城の範囲および実態確認のために設定した調査区である。

第1遺構面 調査区西側で、石組溝を検出している。溝幅は、1.85m、残存している最深石組溝で、0.5mを測る。周囲の遺構の状況から見て、本来は深さ1mほどであったと考えられる。石材は方柱石や自然石に近い割り石などであり、西と東では使用石材に違いがある。補修時か、築造時の石材かは明確にできない。調査区東側では、東西方向の道路

側溝と思われる溝とそれに直交する幅1.8m ほどの道路を確認した。東側には、建物が築かれていたと考えられるが、規模等は確認できない。調査区北側の東西方向に走る道路側溝は、幅0.34m、深さ0.25m を測る石組みの溝である。この溝は、西に位置する石組溝につながっていたと考えられ、道路もおそらくこの石組溝に接していたと考えられる。

石組溝の中には、杭状の丸太が何本も打ち込まれており、その方向は溝に直行する方向で、それぞれ3列確認できる。また、埋土内からは、多数の板材が出土している。これらのことから、道路（推定幅3.6m）から石組溝を渡る簡単な橋状の遺構がここに築かれていた可能性が考えられる。

この遺構面は、石組溝から出土した遺物等から19世紀前葉から中葉にかけての時期と考えられる。

第2遺構面 調査区西側は、石組溝保存のため、下層については部分的に断ち割りを行なったに過ぎない。西側では、石組みの溝や素掘の溝ならびに土坑を確認した。調査区北側に位置する石組みの溝は、幅0.1m、深さ0.15m を測り、東西方向に走る。SD12001とこの石組み溝との間隔はおよそ5mである。

これらの遺構の時期は、出土遺物から18世紀末～19世紀初頭と考えられる。

第3遺構面 土坑と溝を確認している。調査区西端では、石組みの溝が埋められた痕跡を確認している。石組みの溝が確実に埋没したのは18世紀後半と考えられる。

この面の遺構の時期は、出土遺物より18世紀後半と考えられる。

K-2区 第1遺構面では、K-1区に継続する石組溝や土坑、溝などを検出した。

石組溝 石組溝は、幅2.1m、深さ0.6mを測る。本来は深さ1mほどであったと推定できる。

調査区中央付近でも、石組みの溝を検出した。西半では、石材のほとんどが抜き取られているが、現状で、幅0.5m、深さ0.2mを測る。

この遺構面は、石組溝から出土した遺物等から19世紀前葉から中葉にかけての時期と考えられる。



fig.180 I区城内側石垣検出状況（南東から）



fig.181 K-3区城内側石垣検出状況（北から）

第2遺構面 第2遺構面では、土坑ならびに溝を検出した。SD22001とSD22002は、共に東西方向に並行して走る溝であり、溝間の幅は約2mを測る。この溝は道路側溝である可能性があるが、確定するには至っていない。

これらの遺構の時期は、出土遺物から18世紀末～19世紀初頭と考えられる。

第3遺構面 第3遺構面では、土坑、溝を検出した。土坑には甕が伏せて置かれるものも見つかっており、甕の内部には石が充填される構造から水琴窟と考えられる。調査区西端では、壕が埋められた痕跡を確認している。壕が確実に埋没したのは18世紀後半と考えられる。出土遺物からも遺構面の時期は、18世紀後半と考えられる。

第4遺構面 第4遺構面では、土坑、溝、井戸を検出した。SE24001（SK24001改め）は、石組みの円形の井戸である。石組みの井戸の内径は、約1.0m、深さ約2.0mを測る。掘形の直径は約2mである。この井戸は、最下段に深さ0.5mの桶を据え、掘形を埋めて周囲を固めてから上部に石を組んで井戸を構築している。この井戸は、18世紀前半に埋没したと考えられるが、井戸内からは17世紀代の遺物も出土しており、井戸の構築時期は17世紀代に遡る可能性もある。この面の遺構の時期は、出土遺物より18世紀前半と考えられる。

K-3区 K-3区東側で、南北方向からやや西にカーブする石垣の基礎部分を検出した。
石垣 この石垣は18世紀後半には破壊され、埋没したものと思われる。K-2区の調査成果や絵図面などと考えあわせると、この石垣は兵庫城東堀の城内側部分と考えられ、この部分での堀の幅は、約10m前後と考えられる。

SK62004としたものは、最大長3.5m、深さ0.7mを測る。北側には東から西に深くなる石垣を備え、傾斜の入り口付近には柱の礎石状の方形の石材が配置されている。石垣は最大で2段積みとなっており、石材もやや大型である。しかしながら、石材との間は密ではなく、隙間が各所に認められる。この石垣は位置関係から見て、城内の施設と考えられるが、積み直されている可能性も残されている。

3.まとめ

今回の調査では、兵庫城周辺における比較的広範囲の調査を実施し、多くの遺構、遺物を確認した。なかでも、E・F・I・K区で検出した天正期とみられる石垣の検出は、兵庫城築城当初の様子を知ることのできる重要な成果である。

その他、様々な所見や実証などが得られているが、詳細は『兵庫津遺跡第57次発掘調査報告書』に掲載していることから割愛する。

30. 兵庫津遺跡 第58次調査

1. 調査の概要

今回の調査は共同住宅の基礎によって遺跡が損壊される部分について実施した。調査が必要な 2ヶ所のうち、国道 2 号線に面した個所を 1 区、奥の方を 2 区とした。

基本層位 当該地は沖積地末端に属し、現地表面標高は 3 m 前後である。1 区の基本層位は、現況面 -0.2~0.4 m 程度まで現代盛土層であるが、過去の建物解体時に大きな穴を 1 区北半分に掘りこんでおり、遺構面がかなり損壊されていた。損壊を受けていない部分では現代盛土以下に瓦礫・焼土・炭が混ざった戦災焦土層が 0.2~0.3 m 堆積し、その下に黒色～黄褐色砂質土（近代整地層）が数層認められる。現況地表面 -1 m 程度で灰黑色砂質土（上面が第 1 遺構面・19世紀後半）、以下黒灰色砂質土（上面が第 2 遺構面・18世紀～19世紀）、灰褐色砂質土（上面が第 3 遺構面・18世紀）、黄灰褐色中砂（上面が第 4 遺構面・15～18世紀）が連続し、これらの層以下は沖積地末端の洪水および風による堆積物と考えられる

黄灰褐色細砂・粗砂（無遺物層）が堆積していた。現況面から第 4 遺構面までは、調査地

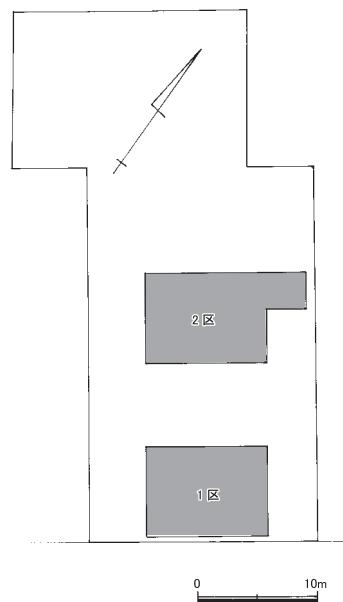


fig.182 調査範囲位置図



fig.183 調査地位置図 1:2,500

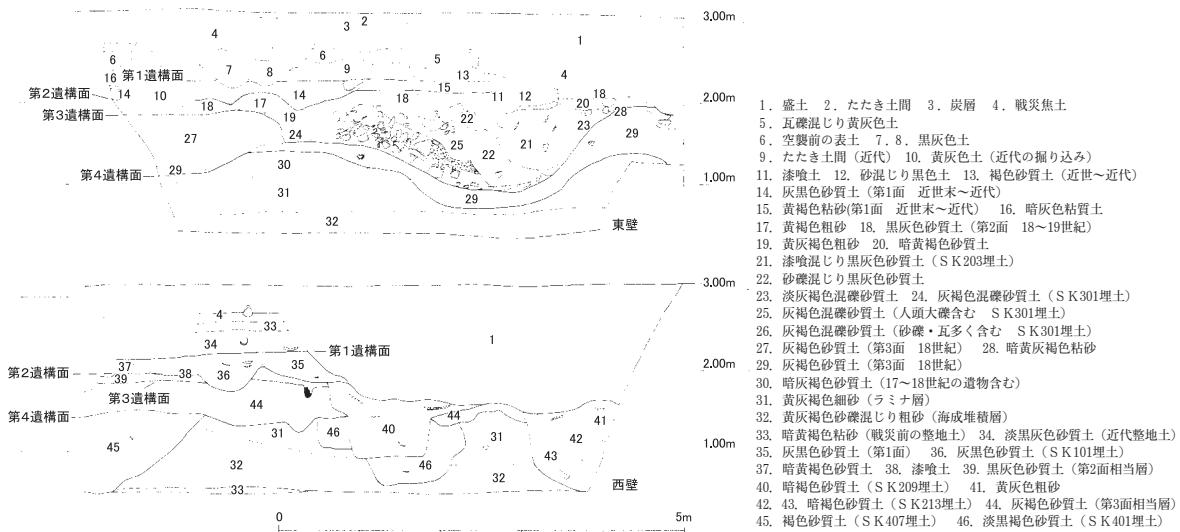


fig.184 1区東・西壁土層断面図

東半分で約-1.7m、西半分で約-1.2m程度である。

1区 第1遺構面 灰黒色砂質土上面で確認した遺構で、幕末～明治期の石列、土坑、礎石の根石、埋甕・埋桶遺構、瓦組み井戸を確認した。

石列は調査区北端で2列確認され、扁平な川原石の面を揃えて置いている。長屋建物の基礎または境界石と判断される。土坑は、炭化物を含み、埋土内から19世紀後半の陶磁器が出土している。また、川原石と瓦が重なった状態で出土する箇所があり、すぐ横に礎石と思われる石が出土することから、礎石の根石部分と推定される。

埋甕遺構は3箇所で確認された。2箇所は底部から胴部部分が残存していた。いずれも底付近から銅錢・銅貨が出土している。1箇所は陶器鉢を逆様に埋めており、漆喰と玉砂利で穴の底を充填している。この正確な用途は不明であるが、近い形状のものには水琴窟がある。

また、直径0.7mほどの桶状の丸い容器を埋め込んだ水溜め遺構を確認した。出土遺物から、埋没の年代は明治期まで下る。

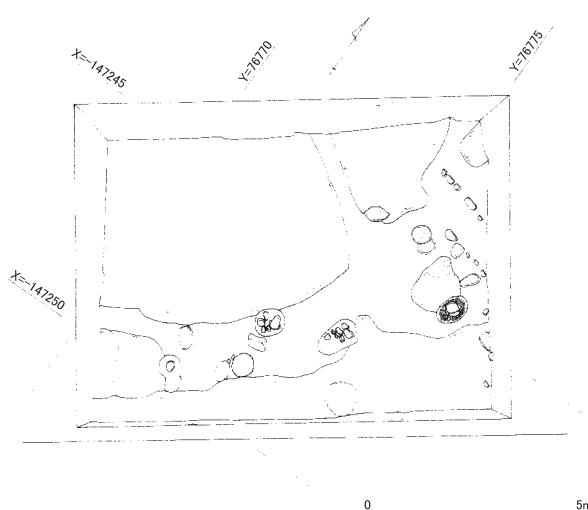


fig.185 1区第1遺構面平面図

第2遺構面 黒灰色砂質土上面で確認した遺構群である。この面では直径1～2m前後の円形・隅円方形の土坑を多数検出した。埋土からは炭や漆喰片、貝殻、陶磁器、瓦などが出土した。深さは0.3～0.5m程度あり、不用品を投棄した土坑と思われる。出土品からみて江戸時代後期～末期（18～19世紀）の遺構群と判断される。

第3遺構面 灰褐色砂質土上面東半部で確認した。東西方向に延びる短い溝2条と拳～人頭大の川原石・陶磁器・瓦・壁土・炭などを投棄した直径4m程度の土



fig.186 1区第1遺構面全景（南西から）



fig.187 1区第2遺構面全景（南西から）

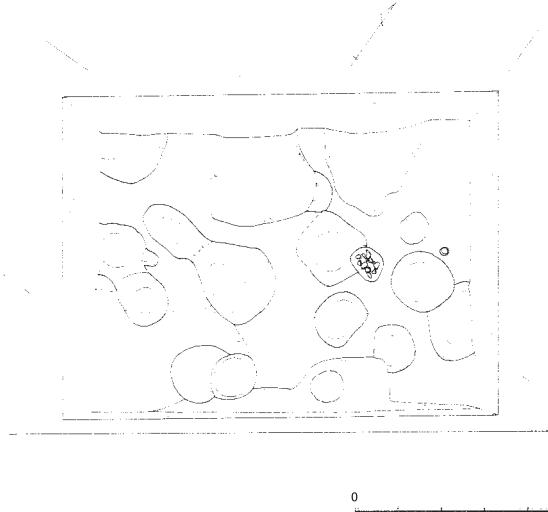


fig.188 1区第2遺構面平面図

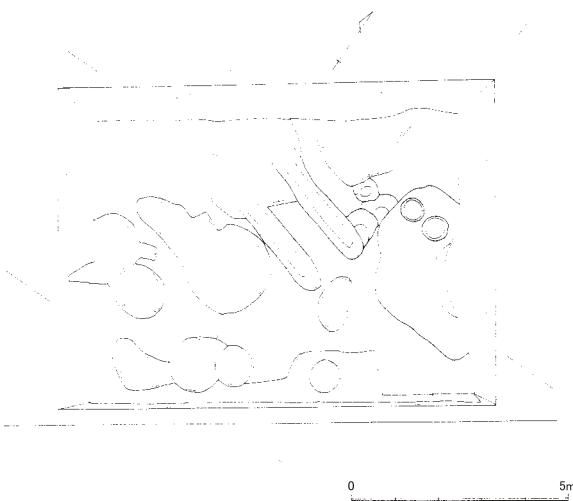


fig.189 1区第3遺構面平面図

坑1基、ピット3基などである。出土遺物から江戸時代後期（18世紀）の遺構群と判断される。

第4遺構面 黄灰褐色中砂上面で検出した。直径0.6~0.8m前後の浅い土坑群は埋土から18世紀頃(江戸時代後期)の陶磁器が出土する。これらは本来、第3遺構面で検出すべきと思われる。また、長さ2~4m、幅1~2m程度の大型土坑群からは15世紀前後（室町時代）の陶磁器、土器が少量出土する。出土品の量の少なさから、砂採取のための土坑の可能性を考慮する必要がある。

2区 以前に建っていた鉄筋コンクリート造の建物基礎により、調査範囲全体にわたって現地表下2m前後まで既に掘り返されており、文化財は存在しなかった。

2. まとめ

今回の調査では、1区では4期にわたる遺構面が過去の建物解体時に相当な搅乱を受けながらも確認できた。今回の調査で判明したことは以下の通りである。

①第4遺構面（15世紀前後）の段階では長さ2~4m、幅1~2m程度の大型の土坑群が確認されるが、これらは砂採取のために掘られた穴の可能性がある。この段階ですでに近隣に町屋が成立していたかは不明である。

②第3~2遺構面（18~19世紀前半）の段階では明確な町屋遺構は確認されず、土坑・ピット・溝等が集中することから、当該地が共有的な利用を行なう町屋裏手の空閑地に当たっており、そこには町屋から出された不用品の廃棄土坑を設けたものと判断される。

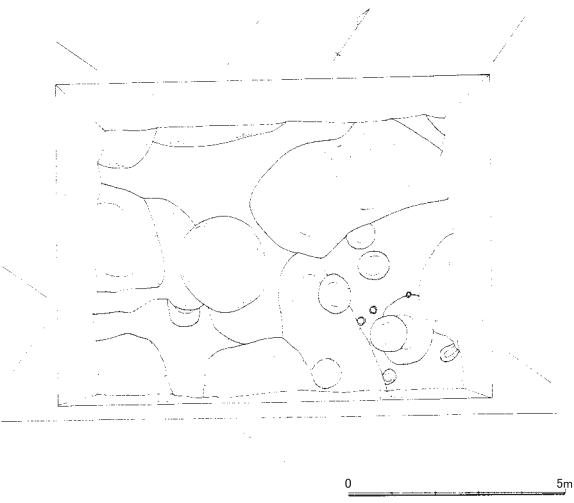


fig.190 1区第4遺構面平面図



fig.191 1区第3遺構面全景（南西から）

③第1遺構面（19世紀後半）の段階では調査地内で石列、礎石の根石、埋甕・埋桶遺構等が確認されたことから、空閑地の占有化が進み、それぞれの宅地の中に取り込まれていたことが判明した。



fig.192 1区第4遺構面全景（北西から）